

研究紀要

第 35 号

(目 次)

<論 文>

文禄三年摂津・河内・和泉国太閤検地帳の基礎的研究
..... 則 竹 雄 一 ... 1

<教育実践報告>

C線上のリアV S オンラインの国のリア
..... 柳 本 博 ... 33

<論 文>

Function of Slums – A Case Study in Nice Terutoshi AOKI ... (1)

Task Based Language Teaching in a pedagogical context,
its strengths and weaknesses. Samuel Lilley ... (17)

<紀 行 文>

8000 Miles in Search of Another Opportunity:
Road Trip Across the United States Jun Harada ... (29)

<要 旨> 67

2020

獨協中学校・高等学校

Dokkyo Junior & Senior High School Review

No. 35

2 0 2 0

Contents

Articles :

Basic Study on Taiko Land Resister (太閤検地帳)
of Settsu, Kawachi and Izumi Provinces in Bunnroku 3
..... Yuichi NORITAKE ... 1

Educational Practice Report :

Lear on the C String vs. Lear in the Virtual Country
..... Hiroshi YANAGIMOTO ... 33

Articles :

Function of Slums – A Case Study in Nice Terunori AOKI ... (1)

Task Based Language Teaching in a pedagogical context,
its strengths and weaknesses. Samuel Lilley ... (17)

Travelogue :

8000 Miles in Search of Another Opportunity:
Road Trip Across the United States Jun HARADA ... (29)

Abstract 67

Edited by

Dokkyo Junior & Senior High School Review Committee

Address : Dokkyo Junior & Senior High School

3-8-1, Sekiguchi, Bunkyo-ku, Tokyo 112-0014

文禄三年摂津・河内・和泉国太閤検地帳の基礎的研究

則竹雄一

はじめに

文禄三・四年に、畿内近国の伊勢・和泉・河内・摂津・大和国において豊臣政権による惣国検地が実施されたことは周知のことである。

この中で和泉・河内・摂津三国の検地は、検地奉行の連続性から見ても一国単位の惣国検地をこえる三国を一体とする惣国検地であり、一時期に実施された検地としてはその広域性は特徴的であると言える。

この摂河泉惣国検地の専論は多くなく、『大阪府史』第五巻や『兵庫県史』第三巻が研究の到達点を示し、各地域の具体的な検地事例の分析は、各自自治体史の記述が成果である¹⁾。しかし、各自自治体史の記述は、その範囲及び周辺の事例に限定され、検地全体の実施状況を整理されるまでには至っていない。そこで可能なかぎり、自治体史から検地実施が確認される村を一覧にしたのが表1である。ここには、実際に検地帳が残っている村々だけでなく、のちの村明細帳などの記載から実施が確認できる村々もなるべく掲載した。後の史料による情報は、村高や斗代などを記す場合もあるが、多くは検地奉行の名が残される場合が多い。本稿では、前稿の慶長三年越前国検地や文禄四年

大和国検地²⁾と同様に、自治体史の史料編に掲載された検地帳の奥書を中心に分析をおこない、文禄三年摂河泉太閤検地帳の特徴を明らかにしたい。

1、天正年間の摂河泉の豊臣期検地について

羽柴秀吉は、天正十一年（一五八三）四月に柴田勝家を北ノ庄に自害させると、大坂を本拠と定め、五月二十五日に大坂を領していた池田信輝に美濃国大垣城を与え、九月一日には大坂城の普請を開始した。大坂を本拠とすると同時に膝下の摂津・河内両国での検地を命じたとみられる。ここでは、文禄三年検地の前提として天正年間の検地について三国毎に自治体史の成果を整理しておきたい。

(1) 河内国検地

天正十一年二月に河内国では指出が命じられた。『府史』によると河内国の早い事例であるのは、天正十一年二月十五日付け富田林下水分社神田指出案（『富田林市史』第四巻）であるとされる。検地実施に際して、まず土地台帳の指出を命じられた時の帳簿の案文と位置づ

けている。翌天正十二年の「神田納帳」では「御くらの御米」が納付されたことが記され、下水分社神田は秀吉の蔵入地に組み込まれたされる。しかし、神田指出案と検地との具体的な関係を示す明証はないことから検討が必要に思われる。次は、招提村(枚方市)の事例である。「八田多山敬応寺古記録」によれば、天正十一年六月に伊熊源助(生熊長勝)によつて竿入れが行われたとされるが、詳細は不明である。

次は天正期の唯一の検地帳の事例である。河南町北村家文書に天正十一年八月吉日付け石川郡加納村水帳^③が残されている(宮川満『太閤検地論』第三部)。福島市松たちへの河内国所領の宛行の日付けが天正十一年八月一日であることから、この頃には検地が終了していたと推定している(『河内長野市史』)。また、天野山金剛寺には天正十一年十月吉日付け「天野山検地名寄之帳」がある(『河内長野市史』第六巻)。院坊ごとの名寄帳であり、高・反別が記載され地目はない。これも八月の検地帳の結果に基づいて作製された名寄帳と見られる。

その後、河内国では天正十二年から十三年にかけて再び検地が行われた。表紙に「天正十二年十一月九日 河内国御給人之内より出来目録 御蔵入れ二野帳之うつし」と書かれた史料がある(中之島図書館所蔵)。これは給人・蔵入地ごとに高と出来が記載される。この出来目増分は天正十一年と天正十二年検地の増加の差額であると理解され、天正十二年にも河内で検地が行われたことを示す史料とされる。さらに、十三年では河内国招提村で検地が行われた(『枚方市史』第六巻)。河内国招提寺内(枚方市)の由来と記した「招提寺内興起後聞記并年寄分由緒実録」には、「天正十三乙酉七月検地奉、吉田文左衛門也」と秀吉の馬廻りの吉田文(又)左衛門を奉行としての検地実

施が伝えられている。前述の「河内給人出来目録」に給人石川加賀守の招提村が記載されることから、招提村では天正十一年から十二年・十三年と立て続けに検地が行われたことになる。この点から十三年検地は十二年検地の誤記との理解もある。

(2) 摂津国検地

天正十一年に摂津国福祥寺領(神戸市須磨区)で検地が行われた。福祥寺『当山暦代』には「天正十一癸未季、羽柴殿御奉行又御見地候、色々寺僧申理、如前寺領御付候」と羽柴秀吉による検地と寺領の安堵が記されている(三浦真巖編『摂津国八部郡福祥寺古記録須磨寺』「當山暦代」校倉書房、一九八九年)。次に摂津国で検地実施が見られるのは、天正十九年である。のちの史料であるが延宝六年二月付けの能勢郡天王村(能勢町)の「惣百姓口上書写」に「二右天王村御検地ハ、天正十九卯年徳善院殿御繩にて、斗代位付下々田、又ハ見かけ二被成、高四拾石九斗五升二而御座候」(吉良信行氏所蔵文書、『能勢町史』第三巻)とあり、徳善院(前田玄以)が検地を行ったことがわかる。この時期の検地帳は、一冊も残っていないので詳細は不明である。もう一つの傍証としては、表紙「天正拾九年辛卯十月 摂津一国高御改帳并領主村名附」(吉井良尚所蔵文書)と記される史料が指摘されている。内容を見ると村高は文禄三年の検地高であり、領主名は元和年間のものであるが、天正十九年以降の異同を記入して成立した史料との見解もあり(『兵庫県史』)、摂津一国の検地実施状況を示すものとしては利用できよう^④。

以上、河内・摂津両国の豊臣期検地は、秀吉の領国支配の開始され

た天正十一年と天正十九年の検地時期が一致している。この二つの検地は、大坂城築城とともに膝下の経済基盤の掌握のための両国にまたがる一連の惣国検地であったと見られる。但し、のちの文禄惣国検地にはある検地条目は確認できないことから、どこまで統一的基準で実施されたのかは不明である。確認できる検地奉行は、生熊正勝（招提村）、大□□□（加納村）、吉田又左衛門（招提村）、前田玄以（天王村）とまとまりは見られず、しかも、のちの文禄三年検地奉行とは全く重なっていないのである。

(3) 和泉国検地

『府史』では、天正十一年に摂河の近い和泉国一部でしか実施できなかったと指摘しているが、この年に実施された史料は見当たらない。和泉国での検地が明確となるのは天正十三年である。天正十三年四月に根来雜賀一揆が平定され、和泉・紀伊両国は、羽柴秀長の支配地となった。同年閏八月九日付け秀長書状（神前家文書『和歌山市史』第四巻）で、家臣小堀新介正次を奉行として紀伊国での検地を命じていることから、和泉国についても検地が命じられたとされる。天正の検地帳は一冊も残っていないが、その詳細は不明であるが、次のような傍証史料がある。慶長一五年（一六一〇）の貝塚御坊世主石見（卜半齋）返答書（並河記録『貝塚市史』第三巻）に「一、羽柴美濃守様御代ニ被成御検地時、御堂物供田悉すたり申候、寺内廻ニて我等親卜半才覚仕上ニて少田畠被下候事無其隠候」とあり、同じく卜半覚書（卜半文書『貝塚市史』第三巻）に、「一、天正十三年羽柴美濃守様より国中御検地被成候時も 秀吉御意として彼地免許之事」とあり、天正十三

年の羽柴美濃守〓秀長の検地に際して、貝塚寺内の土地について卜半の活躍で安堵されたことを記録している。また、寛文四年（一六六四）五月の和泉国波有手新村口上書（石川家文書『阪南町史』下巻）には、「鳥取庄浦山之御役仕候、初ハ天正十三年ニ小堀新介殿鳥取庄御検地被成候時」と秀長家臣小堀新介が検地を行ったことが記されている。

天正十九年にも和泉国では検地が行われた。この年正月二十二日に秀長が大和国郡山で病没して、紀伊・大和両国は秀長には子がいなかったため甥の秀保が継承することになった。一方、和泉国は秀吉の蔵入地に組み入れられることになり、同年の検地実施は、代替わりに伴うものであった。蔵入地代官と見られる吉田清左衛門尉が、現地代官吉田源次宛の天正一九年五月付けの書状と起請文案がある。

【史料一】吉田清右衛門尉書状（池辺家文書『和泉市史』第二巻）

猶々由断ハ為間敷候、早々可申付候、致無沙汰百姓候ハ、その名をかき付て、此方へ可下候、又薪など之儀、懇ニ可被申存候、細々ハ此元可申候、以上、

又被申候入すミを十か斗大さかへ御やり候へく候、柴入ふなちへいたし可申候とかたく可被申付候、以上

一、指出之事、無由断候、急度可申付候、於由断ハ左右を可申越候、明白催促入可申候、

一、きせうの事、御くまの、牛王御あミたのうち此方より遣あんもんことく、いかにも慥か、せ可申候、下判ハわれら見て、させ可申候、さし出しときしやうとを上様へ上可 申候条念を入可申候、爰元も大かた隙明申候間、恐々謹言、

五月廿二日

吉清右衛門尉（花押）

吉源次殿まいる

この書状に引き続き一六ヶ条に及ぶ起請文前書きの雛型が示されている。前書きには斗代や小物成、納枘などの項目があり、検地条目の内容に類似することから検地の実施を思わせる。しかし、「指出」を命じていることから検地実施が想定されるように考えられるが、天正十九年五月は、秀吉が全国に御前帳の提出を命じた時であり、百姓からの「指出」「起請文」は、「上様」⇨秀吉への提出が明記されることからみると、吉田清右衛門尉が在地に求めたのは御前帳であったと言えるのではないだろうか。この点については、すでに秋澤繁氏によって指摘され、「豊臣氏直轄領での御前帳作製は、実質的再検地とも云うべき厳格さを有し、先述諸大名領の場合とは、その趣を異にするものと云えよう」と評価している。⁶⁾ 起請文前書き内容と検地条目との類似性は確かであるが、これによって通常の丈量方式による検地、つまり再検地であったとまではわからないように思われる。検地原則である長さ・面積・斗代などの提示がない所から見ると、天正十三年検地帳に依拠した指出であった可能性が高いと考えられる。

2、文禄三年摂河泉の惣国検地について

前掲の「招提寺内興起後聞記并年寄分由緒実録」には、「文禄二癸巳年八月下旬より一円御検地御奉行木下周防守検地高七百二拾石二計、翌甲午十二月帳面被下置、勘定頭林藤兵衛印形也」とあり、同史

料を所蔵する片岡家には、文禄三年検地帳と見られる「林藤兵衛（花押）」との署名のある帳簿が残されている。これによれば検地の開始時期は、文禄二年八月となる。後述するように現存する河内国の検地帳の日付は、初見が志紀郡小山村（藤井寺市）の一〇月一九日であり、ほとんどが十一月に集中している。招提検地帳には日付けがなく、「実録」から十二月の帳簿として推定されている。前年の文禄二年八月から検地が行われ、帳面が村に下されたのが一年以上もかかった事例は通例ではなく、和泉国検地帳の日付の最初が、文禄三年八月六日の長滝村（泉佐野市）であり、河内国検地の実施が文禄二年に遡るとは考えづらい。これは文禄二年ではなく文禄三年八月の誤記の可能性を考える必要もある。

一方、江戸後期中盛彬の地誌『かりそめのひとりごと』には、次のように記載する。⁷⁾

【史料2】当国文禄の検地（『かりそめのひとりごと』）

（前略）豊臣家一統ののち、諸国検地せられてより、みずからのくるしき秋とはなりにけり。この州は文禄二年八月、五畿内四国検地あるべしとて、舟越五郎右衛門より沙汰ありてしらすべそめしが、なにかと取りまぎれて、やうやう七月二十九日に三郡とも民図帳を出しぬ。同き三年八月に、浅野弾正少弼・宮木藤左衛門検地をはじめ給へり、此時の令文あり、今うつしとりみす。

口上

態申遣候、今度御検地に付、夫々納升之事、刺により遣候、此升にて可納取候、并御米の事右に付式升宛可出候、此外自然御代官御給人

衆横役被申懸候は、此方へ可申越候、

文禄三 八月廿八日

弾正少弼

長吉 花押

日根郡

熊取庄百姓中

このふみは荘ごとに一通を出されぬ。

(検地条目省略【史料3】)

かくのごとし。この時いかなる跡なしどものわざにや、沢村の南に札をたて、

百姓は九月のそのの熟し柿

棹にいたれてびしやとつぶれた

この口ぶちのおろかさをおもへば、実に国民のせしことなるべし。さまたまにおほひしらべありしかどしれざりとぞ。されど今よりみれば人情あり。

これによると文禄二年八月に、「五畿内四国」の検地実施が秀吉家臣舟越五郎左衛門景直から伝えられたものの、「なにかと取りまぎれて」しまい、翌年七月二十九日に和泉国三郡から「民図帳」の提出が行われ、八月から浅野弾正少弼長吉・宮木藤右衛門による検地が始まったとされる。文禄検地の始まりについては、前述の河内国でも文禄二年八月とされる伝承があり、時期の一致がみられる。この点から元々の摂河泉の惣国検地の予定時期が、文禄二年八月であったことを示しているようか。その原因は不明ながら実際の時期は、一年以上遅れて三年八月からであったということになる。「民図帳」(＝水帳＝検地帳)は、

検地奉行による検地実施の前提として百姓から提出されたことから、村々に存在する過去の帳簿(＝天正十三年検地帳か)の指出とみられ、惣国検地が一からの丈量検地ではなく、在地からの指出を基づいて行われた特徴を指摘できる。指出の検地帳が十三年のものだとすれば、在地に検地帳が残されていない理由が説明できよう。天正年間の摂河泉検地は、広範囲では実施されたとみられるものの、検地条目に基づく文禄三年検地が統一的惣国検地の最初であるといえる。また、惣国に対する短時間での検地実施には、過去の帳簿指出が重要であったであろう。

【史料1】で記載する浅野長吉判物では、検地に際しての「納升」と「御米」について規定している。「荘ごとに」とあるように熊取庄だけでなく和泉国全体に出されたものである。升については、後掲の検地条目に京枡の規定があるが、なぜ「納升」規定が別に命じられているのかは明確ではない。本来、検地に際し京枡が、検地奉行から在地に渡されるはずであったが、渡されなかったことが問題となったのであろうか。この「納升」は、「御米」の納入で使用されたものである。「御米」は年貢の付加税としての口米のことで、一石につき二升の額で、年貢輸送などの諸経費を賄うものとみられる。^⑧

また、【史料1】には文禄検地の厳しさを示す事例としてよく引用される和泉郡沢村(貝塚市)に立てられた落首が記録されている。この厳しい検地実施の状況は、次の慶長一〇年(一六〇五)十一月の中左近言上状にみられる。^⑦

【史料2】日根郡熊取谷中左近言上状^⑨(中家文書『熊取町史』史料編Ⅱ)

謹言上仕候覺

(中略)

一、浅野彈正様御檢地の時、中左近ごとく御けんちにあい申候、その御けんちあまりにたかく候て、めいわくつかまつり候時も、太夫はいんきよ仕、われらにしよ事をかけまかなわせ候事、

一、先条のことくあまりに御けんちめいわくつかまつり候て、諸ひやくしやう散在におよび候へ者、浅野彈正様より御けんち高下候ハ、ところの御代官・百姓たちあいならしをつかまつり候へと、御高札たち申について、こほり新介さま熊取の御代官にて御座候につき御奉行をいだされ、さおおは在所の百姓にうたせられいでいりなきやうに御ならし候、そのとき太夫名前、中左近名前別々に御うちなされ候、そのとき当谷中のならし高下これなきかと御といなされ候時、すこしも甲乙なきよし申あげ候へは、しやうや・としよりども判つかまつり候へと被仰候条、上下なく御座そろよし誓紙をつかまつり候てあげ申候、さやうに候へは、太夫ぞんぢふん、中左近ぞんぢふんかくべつまきれなき事、

(中略)

右之条々上様御かゝみのことにて候間、ありやうに被仰付候て可被下候、

慶長十年十一月

熊取谷の土豪中左近も奉行浅野長吉による檢地が及び、それは大変厳しもので百姓たちは迷惑と思ひ、「散在」に逃散に及んだ。浅野長吉は、檢地が場所による「高下」に厳しさの差があるならば代官と百

姓が立ち会いならしを行うことを命じる高札を立てた。熊取谷の代官小堀新介正次は、奉行を向かせ百姓立ち会いの下で檢地のやり直しが行われた。檢地後にやり直しにより、差による問題はないかと問われ、在所の庄屋・年寄は百姓たちはもう問題はないとの誓紙を奉行にさし上げた、というものであった。厳しい檢地実施に対して在地の百姓たちの抵抗の様子が描かれている。

次に檢地に際して秀吉から檢地奉行浅野彈正少弼・宮木藤左衛門へ示した檢地条目についてみてみよう。¹⁰⁾

【史料3】文祿檢地条目(福原文書『貝塚市史』第三卷史料)

御檢地御掟条々

①一、田畑屋敷、六尺三寸之竿ヲ以、五間六拾間三百歩壹反ニ可致檢地事

②一、上田壹石五斗、中田壹石三斗、下田壹石壹斗、下々ハ見斗可相

究事

④一、屋敷方ハ壹石式斗たるへき事

⑤一、山畠・野畑・川原、先斗代聞届、其上見斗斗代可相究事

⑥一、右之斗代よりも上者、先斗代のことくたるへき事

⑦一、山手錢・浜小成物事、堅指出申付、其上見斗年貢可相究事

⑧一、在々之上中下、並井掛り、麦田・日損・水損処、念入見分、斗

代可相究事

⑨一、村切二傍示を立、入組無之様ニ可相究、今迄はうじ相粉二付てハ、隣郷上使と申談、新儀境目可相究事

⑩一、升者は京升、則檢地之奉行有様之京升相調、在々へ可遣、前之

升を悉あつめ可取上事

- ⑪一、検地帳百姓二も写させ、請状ヲ申付、以来斗代違・笠違等無之様ニ可申付候、即検地為奉行、其在々之帳面判をすゑ、可渡置事
- ⑫一、如御法度自賄可仕候、さうし・薪・ぬか・わらハ地下人ニ乞可召遣事

- ⑬一、給人・百姓にたのまれ、礼儀・礼物取私曲之族於有之者、互聞付次第遂糺明、竿打之者不相届ニ付てハ可加成敗、主人相残ニ付ては、無用捨有様ニ可令言上事

右之条々旨相守、下々迄此書を写遣、抑折仰付候也

文祿三年八月二日

浅野弾正少弼

宮木藤左衛門

【史料4】文祿検地条目（かりそめのひとりごと）所収文書『和泉市史』第二巻）

御検地御掟条目

- ①一、田畠やしき、六尺三寸の棹を以、五百六拾間三百歩壹反に可致検地事、

- ②一、上田壺石五斗、中田壺石三斗、下田壺石壹斗、下々は見斗可相究事、

- ③一、上畠壺石式斗、中畑壺石、下畑八斗、下々見斗可相究事、

- ④一、屋しき方は壺石式斗たるへき事

- ⑤一、山畠・野畠・河原、先斗代半届け、其上見斗に斗代、

- ⑥一、右之斗代よりも上は、先斗代のごとくたるへき事、

- ⑦一、山手銭・塩浜小成物の事、堅差し出し申付、其上見斗に年貢可

相究事、

- ⑧一、在々の上中下並井かゝり、麦田・日損・水損処、念を入見分け、斗代可相究事、

- ⑩一、榊は京榊に相定、則検地の為奉行、有様の京榊相調、在々へ可遣、別之榊を悉くあつめ可取候事、

- ⑪一、検地帳面百姓にもうつさせ請状を申付候、則検地為奉行、其在々之帳面に判をすへ可渡置事、

- ⑫一、如御法度、自賄に可仕候、但しさうし・薪・糟・藁は地下人に乞可召遣事、

- ⑬一、給人・百姓にたのまれ、礼儀・礼物をとり私曲之族於有之者、互に聞付次第に遂糺明、棹打の者不相届に付て者、可加成敗、主人相紛に付ては、無用捨有様に可言上事、

右条之旨相守下々迄此一書を写遣し棹打可申付者也、

文祿三庚申八月二日

浅野弾正少弼とのへ

宮木藤左衛門とのへ

【史料3】【史料4】は、周知の和泉国「検地条目」として引用される史料である。この検地条目は、写ししか残されていなく、いくつかの点で異なるがある。両方とも一二ヶ条で構成されるが、【史料3】では【史料4】の三ヶ条目(③)がなく、【史料4】では【史料3】八ヶ条目(⑨)がない。他の条文は内容が一致することから、③⑨はそれぞれ検地条目が写される際に落とされたもので、もともとは一三ヶ条で構成されていたと推定される。

第一条は、田畠屋敷ともに六尺三寸の竿で、五間×六〇間で三〇〇歩を一反とする。

この六尺三寸一一間、一反三〇〇歩の規定は、太閤検地の原則として知られているが、和泉国では、六尺五寸一一間、一反二五〇歩による事例が散見されることが指摘されている。しかし、検地条目を逸脱して和泉国の一部の村落で一一反二五〇歩制が採用されているのはわかっていない。¹¹⁾

第二条は、上田一石五斗、中田一石三斗、下田一石一斗と田の斗代を規定し、下々田は見計らいとしている。

第三条は、上畠一石二斗、中畠一石、下畠八斗と畠の斗代を規定し、下々畠は見計らいとする。

第四条は、屋敷一石二斗の斗代と規定している。

第五条は、山畠・野畠・川原などは先からの斗代を聞いた上で見計らいで決定する。

第六条は、前からの斗代が右の斗代よりも高いときは、前の斗代とする。

第二条から第六条は、斗代に関する規定である。上中下田畠の斗代は太閤検地での典型とするが、下々の場合は「見はからい」とする一方で、典型斗代よりも前代の斗代が高い場合は前代の斗代を採用している。一般的な田畠以外の山畠・野畠などは前代の斗代を参考しながらも「見はからい」による決定を優先している。

第七条は、山手銭・浜小物成は指出を命じて、その上で見計らいで年貢を決定する。

第八条は、村の上中下の品位や用水状況、麦田（二毛作田）、日損・

水損の受けやすいところなどを見計らい斗代を決定する。

これも斗代決定の条件を示している。村の品位、用水環境、災害状況などを加味しての斗代決定を指示している。この村の品位上中下で村別斗代制が存在したとは単純には評価は出来ないように思われる。村の品位はあくまでも上中下個別の田畠斗代決定の要件としても、上中下の品位の村を決定するとは言えないのである。

第九条は、村堺に榜示を立てて入り組のないようにする。今までの村堺が不明となった場合は、隣村の上使と話し合いをおこない新しい村堺を決定すること。

第一〇条は、枡は京枡に決定し、検地奉行から在地へ遣わす。従来
の枡はすべて回収する。

第一一条は、検地帳は百姓にも写させて請状を出させる。検地帳写には検地奉行の判をすえて村に渡すこと。

第二二条は、検地奉行は法度のように自賄いとする。但し雑仕・薪・糟・藁については村から調達すること。

第二三条は、給人や百姓に頼まれて、礼儀（礼銭の誤りか）・礼物を受け取り私曲を行う者について、互いに聞きつけ次第に礼明して、棹打ち者が不正を行ったならば成敗する。（棹打ちの者の）主人がごまかしたとしても有りのままに申し上げること。

以上の一二ヶ条の検地条目内容は、文禄三年の伊勢国検地条目とほぼ一致する内容であり、文禄年間の伊勢国から大和国までの惣国検地の統一した規定であったとみられる。¹²⁾

3、文禄三年撰河泉の惣国検地の「奥書」記載

自治体史史料編に記載される検地帳を整理して一覧表にしたのが表2である。これから「奥書」部分についての分析をおこないたい。

(1)「奥書」記載項目

文禄三年撰河泉太閤検地帳の「奥書」で最も多くの記載項目を示す「奥書」事例は次の通りである。

【史料5】撰津国東田井村検地帳(62) ()内は表1の番号、19以下同様に表示)

丹北郡布忍之郷内東田井村 家数十七間内
七間夫やく

田畠 惣高
屋敷 合拾参町六反五畝

分米百七拾式石六斗八升八合 ……④

此内

壹石四斗代

一上田八町式反一畝廿二步 百壹拾五石四升三合

壹石式斗代

一中田貳町三反七畝廿三步 廿八石五斗三升式合

壹石代

一下田壹反八畝 壹石八升

八斗代

一下々田四畝五步 三斗三升三合

ノ拾町八反壹畝廿步

分米百四十五石七斗八合

壹石式斗代

一上畠壹町貳反六畝廿三步 拾五石式斗式升四合

壹石代

一中畠三段廿五步 参石八升三合

八斗代

一下畠四段四畝廿六步 三石五斗九升

□□□(四斗代)

一下々畠五反七畝廿三步 式石三斗一升一合

壹石式斗代

一屋敷貳反三畝三步 式石七斗七升二合

ノ貳町八反三畝七步

分米廿六石九斗八升

以上

文禄三年 長東大蔵大輔 ……⑤⑥

十一月十日 正家(花押)

表紙共

紙数卅四枚 ……⑦

【史料5】の①部分は、地目(田・畠・屋敷)品位(上中下々々)別にそれぞれの面積合計と分米合計と斗代が記載されている。③④は総面積と総分米(村高)を記載している。記載順としては総計である③④が最初にあり、その後「此内」と内訳として①②の地目別面積分米がある。⑤⑥は年月日と検地担当奉行名と署名である。⑦は帳簿の紙数である。この紙数(墨付き)は、文禄四年大和国検地帳・

表2 摂津河内和泉国大開校地帳刊本一覽

国名	郡名	村名	年月日	種名	奉行	地	配方式	字	品位	間敷	面積	分米	出作	その他	地目別	面積	分米	年月日	奉行名	紙数	家数	その他	原写	所蔵	出典
1	和泉	日根	文禄3年8月	泉州日根野郡土丸村御校地帳	宮本藤左衛門尉	田畠屋敷	○	4	×	教歩	○	地名		田畠別計	合計	文禄3年8月15日	宮本藤左衛門	60			大阪歴史博物館蔵	新修泉佐野市史第7巻			
2	和泉	日根	文禄3年8月6日	泉州日根野郡長滝庄御校地帳	三橋之内	田畠屋敷	○	4	×	教歩	○	地名	途中興築2回	田畠別計	合計	文禄3年8月6日	八幡久兵衛印写	上紙除85				写	喜多久博文書	新修泉佐野市史第7巻	
3	和泉	日根	文禄3年8月	泉州日根郡中庄村御校地帳	印	田畠屋敷	○	4	×	教歩	○	地名		田畠別計	合計	文禄3年8月6日	淺野輝正(花押影)					写	新川義清文書	新修泉佐野市史第7巻	
4	和泉	日根	文禄3年8月12日	泉州日根郡内瓦屋村御校地帳	長英次良兵衛	田畠屋敷	○	6	×	教歩	○	地名	かわた	田畠別計	合計	文禄3年8月12日	長英次良兵衛印写	131				写	佐治重徳文書	新修泉佐野市史第7巻	
5	和泉	日根	文禄3年8月吉日	泉州日根郡加祥寺御校地帳	二帖之内	田畠屋敷	○	4	間半	教歩	○	地名		田畠別計	合計	文禄3年8月吉日	萩野治郎卿判					写	地井誠一郎文書	田原野史第6巻	
6	和泉	南	文禄3年8月吉日	泉州南郡内岸和田御校地帳	宮本藤左衛門尉	田畠屋敷	○	4	×	教歩	○	地名		田畠別計	合計	文禄3年8月吉日		上紙共77				写	敷十八所蔵文書	岸和田市史第6巻	
7	和泉	南	文禄3年8月11日	泉州南郡粟守郷春木村	二内	田畠混合	○	4	×	教歩	○	地名		田畠別計	合計	文禄3年8月11日	桑原次右衛門(花押)	68				写	正	岸和田市史第6巻	
8	和泉	和泉	文禄3年8月5日	泉州近木庄(ほとた)村御校地帳	二内	田畠混合	○	4	×	教歩	○	地名		田畠別計	合計	文禄3年8月11日	桑原次右衛門(花押)	928				写	正	岸和田市史第6巻	
9	和泉	和泉	文禄3年8月	和泉国泉郡内横山谷御校地帳	宮本藤左衛門尉	田畠屋敷	○	3	×	教歩	○	地名		田畠別計	合計	文禄3年8月6日	宮本左衛門尉	袋数101				写	要祐一文書	貝塚市史第2巻	
10	和泉	大鳥	文禄3年8月	泉州大鳥郡神野庄御校地帳	○	田畠屋敷	○	○	×	教歩	○	地名		田畠別計	合計	文禄3年8月吉日	船越五郎右衛門尉	上紙共126				写	北村桂三文書	堺市史統編第4巻	
11	和泉	大鳥	文禄3年8月	泉州大鳥郡神野庄御校地帳	○	田畠屋敷	○	○	×	教歩	○	地名		田畠別計	合計	文禄3年8月吉日	船越五郎右衛門尉	上紙共126				写	北村桂三文書	堺市史統編第4巻	
12	和泉	大鳥	文禄3年8月19日	泉州大鳥郡上神谷内片蔵室御校地帳	○	田畠屋敷	○	○	×	教歩	○	地名		田畠別計	合計	文禄3年8月15日	石河久五郎	100				写	奥野健一文書	堺市史統編第4巻	
13	和泉	大鳥	文禄3年8月23日	泉州大鳥郡熊野田村御校地帳	○	田畠屋敷	○	○	×	教歩	○	地名		田畠別計	合計	文禄3年8月7日	下与右衛門印					写	和田泰次文書	堺市史統編第4巻	
14	和泉	大鳥	文禄3年8月24日	泉州大鳥郡長興寺村御校地帳	○	田畠屋敷	○	○	×	教歩	○	地名		田畠別計	合計	文禄3年8月6日	舟越五郎右衛門	46				写	所蔵文書	新修豊中市中史第4巻	
15	和泉	大鳥	文禄3年8月吉日	泉州大鳥郡牧西小路村御校地帳	○	田畠屋敷	○	○	×	教歩	○	地名		田畠別計	合計	文禄3年8月吉日	舟越五郎右衛門	39				写	西小路共有文書	高槻市史第4巻	
16	和泉	大鳥	文禄3年8月吉日	泉州大鳥郡河村御校地帳	○	田畠屋敷	○	○	×	教歩	○	地名		田畠別計	合計	文禄3年8月吉日	石川久五郎	74				写	森田家文書	高槻市史第4巻	
17	和泉	大鳥	文禄3年8月吉日	泉州大鳥郡河村御校地帳	○	田畠屋敷	○	○	×	教歩	○	地名		田畠別計	合計	文禄3年8月吉日	石川久五郎	74				写	森田家文書	高槻市史第4巻	
18	和泉	大鳥	文禄3年8月吉日	泉州大鳥郡河村御校地帳	○	田畠屋敷	○	○	×	教歩	○	地名		田畠別計	合計	文禄3年8月吉日	石川久五郎	74				写	森田家文書	高槻市史第4巻	

32	摂津	能勢	天王 畑	文禄3年9 月17日	摂州能勢郡西郷 天王畑村御後地 畷	森原治右 衛門	田島混合 屋敷別	○	3	×	散歩	○	地名		×	合計	文禄3年 9月17日	森原治右 衛門尉	10 121 行	明和8 年写	東藩三文書	能勢町史 第三巻	
33	摂津	八部	西尻 池	文禄3年9 月	摂州矢田郡中 庄内西尻池村御 後地畷		田島屋敷 混合	○	3	×	散歩	○	地名	三百歩 香反也	×	田島別 合計	文禄3年 9月	浅野弾正 (花押)	71	かきそ ごない 印	則光賢治郎 文書	兵庫県史 史料編近 世二	
34	摂津	川辺	山田	欠	□口郷山田村	津田忠右 衛門	田島屋敷 混合	○	6	×	散歩	○	地名	下々下 田・山 島	×	合計	文禄3年 9月晦日	片桐市正 (花押)	30上 紙條	百枝標 写さむ・ 山田村 百姓中	伊丹市市役 所所蔵	兵庫県史 史料編近 世二	
35	摂津	河辺	椎堂	文禄3年 10月吉日	摂州河辺郡椎堂 村御後地畷		田島屋敷 混合	○	4	×	散歩	○	地名		×	田島別 合計	文禄3年 10月吉日	舟越五郎 右衛門尉 (印)花押	38上 紙共		門田隆夫文 書	尼崎市史 第五巻	
36	摂津	河辺	岡院	文禄3年	摂州河辺郡五ヶ 之内岡院村御後 地之畷		田島屋敷 混合	○	4	×	散歩	○	×		合計	文禄3年 9月吉日	御奉行山 岡如幹様 御後地		延宝9 年写	浜野種次郎 文書	尼崎市史 第五巻		
37	摂津	河辺	額田	文禄3年9 月日	摂州河辺郡額田 村御後地畷		田・島・屋 敷別	○	4	×	散歩	○	地名	大豆 かわた	×	田島別 合計	後欠		29		写	田中重次郎 文書	尼崎市史 第五巻
38	摂津	武庫	友行	文禄3年9 月4日	摂州武庫郡友 内友行村御後地 之内畷		田島屋敷 混合	○	4	×	散歩	○	地名	欠か	合計	後欠か					延宝五 年写	尼崎市史編 第五巻	
39	摂津	武庫	守部	文禄3年 10月14日	摂州武庫郡守 内守口御後地 畷		田島屋敷 混合	○	3	×	散歩	○	地名		合計	後欠か					享保二 十年写	尼崎市史 第五巻	
40	摂津	武庫	浜田	欠			田島屋敷 混合	○	4	×	散歩	○	地名		合計	文禄3年 9月6日	八島久兵 衛尉印 右衛門尉 (印)花押	66			滝井誠一郎 文書	川西市史 第五巻	
41	摂津	河辺	出在家	文禄3年 拾月吉日	摂州河辺郡小戸 庄出在家村御後 地畷		田島屋敷 混合	○	3	×	散歩	○	地名		合計	文禄3年 拾月吉日	舟越五郎 右衛門尉 (印)花押	17上 紙共			江口武司文 書	川西市史 第五巻	
42	摂津	河辺	坂根	文禄3年9 月吉日	摂州河辺郡坂根 村御後地畷		田島屋敷 混合	○	3	×	散歩 半	○	地名		後欠						写	川西市史 第五巻	
43	摂津	河辺	西野	文禄3年9 月19日	摂州河辺郡多 田之内西野村 御後地畷		田島屋敷 混合	○	4	×	散歩	○	地名		後欠						写	川西市史 第五巻	
44	摂津	川辺	佐曾	文禄3年9 月23日	摂州河辺郡多 田之内佐曾利 村御後地畷		混合	○	4	×	散歩	○	地名		×	田島別 合計	文禄3年 9月23日	石川久五 口	41		写	二井貞一文 書	宝塚市史 第五巻
45	摂津	河辺	中山 寺	文禄3年 10月5日	摂州河辺郡中 山寺村御後地 畷		○	○	3	×	散歩	○	地名	中山寺 諸坊	合計	文禄3年 10月5日	浅野弾正			写	中山寺文書	宝塚市史 第五巻	
46	摂津	河辺	中筋	文禄3年9 月	摂州河辺郡中 筋御後地畷		○	○	×	×	散歩	○		柿木・ 茶園	合計	文禄3年 9月	浅野弾正 判	72		写	小池博文書	宝塚市史 第五巻	
47	摂津	河辺	山本	文禄3年9 月吉日	摂州河辺郡山 本村御後地畷		○	○	×	×	散歩	○	地名		×	田島別 合計	文禄3年 拾月吉日	舟越五郎 右衛門尉 (印)花押	110 上紙 共		金岡信雄文 書	宝塚市史 第五巻	
48	摂津	有馬	山田	文禄3年9 月9日	摂州有馬郡松 山庄山田村御後 地畷		田島屋敷 混合	○	4	×	散歩	○	地名		×	田島別 合計	文禄3年 9月9日	石川久五 郎判	24		写	宝塚福尾氏 所蔵	三田市史 第四巻
49	摂津	川辺	木器	文禄3年9 月20日	摂州河川辺郡多 田之内木器村御 後地畷		田島屋敷 混合	○	4	×	散歩	○		うせ人	×	田島別 合計	文禄3年 9月23日	石川久五 郎(花押)	×	高之外 算蓮二 人書	写	三田市史 第四巻	
50	摂津	八部	白川	文禄3年9 月	摂州矢田郡都下 庄白河村御口		田島屋敷 混合	○	4	×	散歩	○		かわた	×	合計	文禄3年 9月13日	八嶋久兵 衛(印)	46そ ごない i4		原	白川区有	神戸史料第 一巻

51	摂津 八部	山田 村上村	文禄3年9月11日	摂津州安部郡丹生山田各上村御後地帳	片桐市正 津田忠右衛門打口	田島屋敷 混合	○	5	×	歩	○			×	なし	合計	文禄3年9月22日	片桐市正 花押	46	43 後地帳 面...	今度御 写	舟越五郎 所藏	関西学院 史学8号 史4 様中
52	摂津 川辺	槻並	文禄3年9月21日	摂津川辺郡三倉三村御後地帳	田島別	○	4	×	歩	○			×	田島別	合計	文禄3年9月5日	舟越五郎 右衛門			写	田中眞夫 文書	関西学院 史学8号 史4	
53	摂津 川辺	木津	文禄3年拾月吉日	摂津河辺郡多田庄内木津村御後地帳	田島別	○	×	歩	○				×	田島別	合計	文禄3年拾月吉日	舟越五郎 右衛門尉 栗屋(花)	52上 紙共		本	肥儿三千三 史4 文書	猪名川町 史4	
54	河内 丹南	北野	文禄3年拾月吉日	河内国丹南郡北野田村御後地帳	田島混合 屋敷別	○	3	間半	歩	○	地名		×	合計	合計	文禄3年11月16日	長束大藏 (花押)	57上 紙共	13 右之外 (8)3筆 あり	写	井上正文 文書	堺市史続 巻四 史4	
55	河内 丹北	鳥泉	文禄3年11月4日	河内丹北郡之内嶋泉村御後地帳	田島混合 屋敷別	○	3	間半	歩	○	地名		×	合計	合計	文禄3年11月9日	河州錦部郡波方村御後地帳			写	中野賢史 文書	富田林市 史第四卷	
56	河内 錦部	波方	文禄3年11月9日	河州錦部郡波方村御後地帳	田島混合	○	3	間半	歩	○	地名		×	合計	合計	文禄3年11月27日	河州錦部郡錦部村御後地帳			写	田中政雄 文書	富田林市 史第四卷	
57	河内 錦部	錦部	文禄3年11月27日	河州錦部郡錦部村御後地帳	田島混合	○	3	間半	歩	○	地名	今ハ	×	合計	合計	文禄3年11月10日	富田林市 富田林市史第四卷			写	西川吉次 文書	富田林市 史第四卷	
58	河内 錦部	板持		河内国錦部郡板持村御後地帳	田島混合	○	4	×	歩	○	地名		×	合計	合計	文禄3年11月10日	富田林市 富田林市史第四卷			写	長谷川正彦 文書	富田林市 史第四卷	
59	河内 丹北	城連	文禄3年11月15日	河内丹北郡雷田之内城連寺村御後地帳	田島屋敷 敷別	○	3	間半	歩	○	地名		×	合計	合計	文禄3年11月10日	長束大藏 大輔正家 (印)(花押)	54(裏) 表紙	15 屋敷除 地除 地書正	原	長谷川正彦 文書	富田林市 史第四卷	
60	河内 丹北	我堂	文禄3年11月5日	河内丹北郡布忍郷之内我堂村御後地帳	田島屋敷 敷別	○	3	間半	歩	○	地名		×	合計	合計	文禄3年11月10日	長束大藏 大輔正家 (印)(花押)	64	37 (25)	原	田中啓二文 書	松原市史 第四卷	
61	河内 丹北	更地	文禄3年11月9日	河内丹北郡布忍郷内更地村御後地帳	田島屋敷 敷別	○	3	間半	歩	○	地名	カウラ 屋敷	×	合計	合計	文禄3年11月10日	長束大藏 大輔正家 (印)(花押)	64	11 (4)	原	田中啓二文 書	松原市史 第四卷	
62	河内 丹北	真田	文禄3年11月9日	河内丹北郡布忍郷内真田井村御後地帳	田島屋敷 敷別	○	4	間半	歩	○	地名		×	合計	合計	文禄3年11月10日	長束大藏 大輔正家 (印)(花押)	34	17 (7)	原	山田英雄文 書	松原市史 第四卷	
63	河内 丹北	河合	文禄3年11月19日	河内之内八上郷河合村御後地帳	田島屋敷 敷別	○	3	間半	歩	○	地名	屋敷カ ニ始メ ズ	×	合計	合計	文禄3年11月19日	松原市史 第四卷			写	岡田善一文 書	松原市史 第四卷	
64	河内 丹北	岡	文禄3年11月吉日	河内国丹北郡松原郷内面村御後地帳	田島屋敷 敷別	○	3	間半	歩	○	地名		×	合計	合計	文禄3年11月10日	木下与右衛門(花押)	23	65 (31)	写	上山昭則文 書	松原市史 第四卷	
65	河内 交野	宇山	文禄3年11月9日	河内国丹北郡松原郷内面村御後地帳	田島屋敷 敷別	○	4	×	歩	○	地名		×	合計	合計	文禄3年11月12日	木下与右衛門(花押)			写	林藤兵衛 文書	河内長野 史第七卷	
66	河内 交野	宇山	文禄3年11月9日	河内国丹北郡松原郷内面村御後地帳	田島屋敷 敷別	○	4	×	歩	○	地名		×	合計	合計	文禄3年11月12日	木下与右衛門(花)	126		写	山年真 文書	河内長野 史第七卷	
67	河内 交野	招提	養紙次		田島混合 屋敷別	○	4	×	歩	○	地名	山年真	×	合計	合計	文禄3年11月	木下与右衛門(花)	146		写	中部よし子 文書	河内長野 史第七卷	
68	河内 交野	星田	文禄3年11月11日	河内国丹北郡星田村御後地帳	田島混合 屋敷別	○	6	×	歩	○	地名		×	合計	合計	文禄3年11月	木下与右衛門(花)			写	中部よし子 文書	河内長野 史第七卷	
69	河内 錦部	向野	文禄3年11月12日	河内国錦部郡内河向野村御後地帳	田島屋敷 敷別	○	4	間半	歩	○	地名		×	合計	合計	文禄3年11月12日	林藤兵衛 (花押)	33上 紙共		写	注野宗家文 書	河内長野 史第七卷	
70	河内 錦部	原	文禄3年11月10日	河内国錦部郡原村御後地帳	田島混合 屋敷別	○	3	間半	歩	○	地名		×	合計	合計	文禄3年11月10日	舟越五郎 右衛門尉 重口(花押)			写	中尾二郎文 書	河内長野 史第七卷	
71	河内 錦部	河合	文禄3年11月吉日	河州錦部郡河内村御後地帳	田島混合	○	3	×	歩	○	地名		×	合計	合計	文禄3年11月吉日	舟越五郎 右衛門尉 重口(花押)	36		原	福田ウニ文 書	河内長野 史第六卷	

72	河内 錦部	天野山	文禄3年 11月19日	河内国錦部郡内 天野山御検地帳 字	増田石齋 門打口平 井井四郎 丹波新右 増田石齋 門打口平 田小左衛 田助、牛野	田嶋混合 屋敷別	○	3	間半	敏歩	○		地目別 面積分 米	合計	×	文禄3年 10月19日	×	上 郷の けて	正保3 年写	写	金剛寺文書 河内長野 市史第六 巻
73	河内 志紀	光明寺	文禄3年 10月19日	河内国志紀郡内 光明寺	(増田か)	屋敷・田 畠混合	○	4	間半	敏歩	○		地目別 面積分 米	合計	×	文禄3年 10月19日	×	81上 郷の 中		写	光明寺天満 宮文書
74	河内 志紀	小山	表紙欠			屋敷・田 畠混合	○	3	間半	敏歩	○		地目別 面積分 米	合計	×	文禄3年 10月19日	×	53上 郷の 中		写	小泉家文書 藤井寺市 史第六巻
75	河内 安宿	玉手	文禄3年 11月	河内国安宿郡 之内玉手村御検 地帳	宮木藤左 衛門	混合	○	4	×	敏歩	○		地目別 面積分 米	合計	×	文禄3年 11月	×	53上 郷の 中		写	安田敬介文 書
76	河内 赤川	竹洲	文禄3年 11月	河内国赤川郡竹 洲村御検地帳		田嶋屋敷 混合	○	4	×	敏歩	○		地目別 面積分 米	合計	×	文禄3年 11月	×	元和元 年写か		写	埴川文書 八尾市史 史料編 守北坂頭倉 報告書
77	河内 茨田	大枝	文禄3年 11月	河内国茨田郡十七ヶ 所小高瀬之内大 枝村御帳		田嶋屋敷 混合	○	3	×	敏歩	○		地目別 面積分 米	合計	×	文禄3年 11月	×	八嶋久兵 衛尉		写	

慶長三年越前国検地帳とも全検地帳の必須項目であることをすでに

指摘したが、文禄三年摂河泉検地帳でも同様であるとみられる。⑧は、
村内の家数とその中で夫役負担を課される家数を記載している。

これらの記載項目から検地帳の奥書を分類すると、I型からVI型と
なる(表3)。

I型：①地目別面積分米②斗代③面積合計④分米合
計⑤年月日⑥奉行名⑦紙数⑧家数

これは検地奉行長東大蔵大輔正家の場合の型で、①⑧全項目を記
載する。紙数が記載されないものが見られるが、前述したように大和
や越前の惣国検地では、紙数の記載が必須項目と見られることから、
何らかの事情で記載されなかったものと見られようか。ただし、原本
とみられる検地帳でも記載がないことから摂河泉検地帳では、紙数が
必須ではなかった可能性はある。摂河泉の検地帳記載項目の特徴のひ
とつに家数記載があるが、これは長東正家・石川久五郎・片桐市正を
検地奉行とする検地帳のみに見られる項目であり、長東正家の検地帳

ではかならず見られる。

II型：①地目別面積分米②斗代③面積合計④分米合
計⑤年月日⑥奉行名

この型は、I型から紙数が除いた記載となっている。II型のなか
で検地奉行長東正家の検地帳は⑤⑤⑤鳥泉村⑤⑤⑤城連寺村の二つがあ
る。原本とみられる⑤⑤⑤では表紙にも奥書にも紙数記載が見られな
い。⑤⑤⑤も同じく紙数が表紙でも奥書部分でもないものの、裏表紙に
記載される。このように紙数が裏表紙に書かれる場合があり、⑤⑤⑤
も裏表紙にあった可能性が高いとみられ、長東正家検地帳の場合は、
すべての帳簿に紙数記載があることになる。原本の残る検地帳であっ
ても表紙が、欠損する場合があります、補修され新しい表紙に替えられる
場合もあり、この時裏表紙の紙数がなくなり、紙数そのものの記載が
確認できなくなる。この想定から見れば、長東以外の検地奉行の検地
帳も裏表紙に紙数記載があったとすれば、やはり紙数は必須項目とし
て検地帳に記載されると言えよう。そうすればII型は、独立した型で

はなくⅠ型に吸収されることになる。

Ⅲ型…①地目別面積分米②面積合計③分米合計④年月日⑤奉行名⑥紙数

この型はⅠ型から家数と斗代項目を除いた記載となっている。③長滝荘（奉行八嶋）④向野村、⑤道明寺村（奉行増田）の三事例と数は少ない。

Ⅳ型…③面積合計④分米合計⑤年月日⑥奉行名⑦紙数⑧家数

この型はⅢ型からさらに地目別項目を除いた記載となっている。二二事例と一番多くの事例を示す。様々な奉行たちの検地帳であり、摂河泉検地帳では一般的ともいえようか。

Ⅴ型…④分米合計⑤年月日⑥奉行名⑦紙数

この型はⅣ型からさらに総面積項目を除いた一番シンプルな記載となっている。やはり、記載項目でみると、唯一項目がなくならないのは分米合計であり、検地帳作成の目的は村毎の分米合計＝村高の確定であることが改めて確認される。

(2) 「奥書」記載項目の特徴 1 地目と面積・分米合計

面積分米の集計部分に注目すると次の四類型となる。

集計A型…①地目別面積分米②面積合計③分米合計(↓Ⅰ型・Ⅱ型・Ⅲ型 一一)

集計B型…①地目別面積分米④分米合計(↓なし)

集計C型…③面積合計④分米合計(↓Ⅳ型 一二)

集計D型…④分米合計のみ(↓Ⅴ型 一〇)

表3 「奥書」項目整理表

分類	奉行名	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	冊数	
		地目	斗代	面積	分米	年月	奉行	紙数	家数		
Ⅰ	長束正家①	○	○	○	○	○	○	○	○	3	3
	1 長束正家②								○	2	
Ⅱ	1 秋野治部卿①	○	○	○	○	○	○	×		1	5
	2 山岡如軒								×	1	
	浅野長政①									1	
Ⅲ	八嶋久兵衛①	○	×	○	○	○	○	○	×	1	3
	増田長盛						×			2	
	1 石川光元①								○	2	
Ⅳ	石川光元②									1	22
	浅野長政②							○		3	
	2 長束直吉	×	×	○	○	○	○		×	1	
	舟越景直									8	
	八嶋久兵衛②									4	
	3 浅野長政②							×		1	
	4 石川光元③								○	2	
Ⅴ	1 片桐且元								○	2	10
	2 秋野治部卿②	×	×	×	○	○	○	○	×	1	
	桑原貞也									4	
	宮木藤左衛門									3	
										43	43

【史料5】の場合は集計A型である。惣高として全田畠屋敷面積の合計と全田畠屋敷分米の合計を最初に記載して、その内訳として地目別の面積分米高を記載し、田面積分米の総計と畠屋敷面積分米総計をそれぞれ記載する。もつとも詳しい集計項目を持つが、摂河泉検地帳では、①地目別面積分米記載の事例が越前検地帳や大和検地帳の事例と比較すると少ない特徴を示す(全事例の約4/1である)。また、集計B型の事例はひとつもない。表2の奥書面積欄で、「田畠別」とあるのは田畠別面積のそれぞれ合計と両方を合わせた面積総計を記載する事例である。一方、「合計」を記載するのは、田畠別のそれぞれ

れ合計がなく、面積総計が記載されるのみの事例である。また、「田畠別のみ」とあるのは田畠別の面積合計は記載されるが、面積の総計を記載しない事例である。面積記載の方法としては、a 田畠別面積＋面積総計「田畠別」、b 田畠別面積のみ「田畠別のみ」、c 面積総計のみ「合計」に分類できる。この記載方法の違いの理由は不明確である。

次に【史料5】の①地目別面積分米斗代の地目に注目しよう。この場合、上田・中田・下田・下々田・上畠・中畠・下畠・下々畠・屋敷となり上中下々四区分となっているが、基本的には田畠とも上中下の三区分が一般的である。

全体六五事例の中で三区分は一八事例、三区分に上々田畠または下々田畠が加わり四区分となるのは、三三事例でこのうち上々田が一〇事例、下々田が二事例、上々畠が二事例、下々畠が一事例ある。また、三区分に上々田畠と下々田畠の両方が加わり五区分となるのが七事例で、さらに下々の下に下々下田畠が加わる六区分が二事例ある。〈50〉川辺郡山田村（石川久五郎）では、上田の上上々田（斗代一・四）、下田の下に下々田（斗代〇・六）があるだけでなく、更に下に下々下田（斗代〇・四）、畠でも上々畠（斗代〇・九）、下々畠（斗代〇・二）となり、上々・上・中・下・下々・下々下の六種類品目の存在する唯一の事例となっている。

(3) 「奥書」記載項目の特徴2 地目と斗代と村位別石盛制

前述したように、①項目を記載する検地帳は事例が多くないことから（I型・II型のみ検地奉行では長束正家・浅野長政・秋野治部卿・山岡如軒の事例に限定される）、本文から斗代を計算した事例も合わ

せて示したのは表4である。さらに田の上中下斗代の事例を集計したのが表5であり、畠の上中下斗代の事例を集計したのが表6である。

上田斗代では、一石七斗（以下斗代は一・七のように表す）、「一・六」、「一・五五」、「一・五」、「一・三三」、「一・二五」、「一・二二」、「一・〇六」の八種類が存在し、中田斗代では「一・四」、「一・三三」、「一・二一」、「一・一五」、「一・〇五」、「一・二二」、「一・〇八」、「一・〇八」の八種類があり、下田では「一・二二」、「一・二二」、「一・〇九」、「一・〇八」、「一・〇六」の五種類ある。田斗代上中下の組み合わせとしては、「一・五、一・三三、一・二二」の組み合わせが事例中の過半数を示し、「一・三三、一・二二、一・〇九」が五事例となるが、他の組み合わせは二事例と散発的である。典型事例は、検地条目の第二項目の田斗代規定と一致するが、他の組み合わせ事例の多さは、規定が必ずしも守られてないことを示唆する。また、担当検地奉行による特別な傾向も見出させない。これは検地条目規定を基準としながらも、村状況に応じた検地奉行の裁量に任せられたと推定される。

上畠斗代では「一・五」、「一・三三」、「一・二五」、「一・二二」、「一・二二」、「一・〇九」、「一・〇八」、「一・〇七」と八種類が、中畠では「一・二二」、「一・〇五」、「一・二二」、「一・〇九」、「一・〇八」、「一・〇七」、「一・〇六」、「一・〇五」の八種類が、下田では「一・二二」、「一・〇九」、「一・〇八五」、「一・〇八」、「一・〇七」、「一・〇六」、「一・〇五」、「一・〇四」の八種類が存在する。畠斗代上中下の組み合わせでは、K型「一・二二、一・〇〇、一・〇八」が一事例と最多の数となり、次に多いのはS型「一・〇〇、一・〇八、一・〇六」の組合せが八事例となる。その他の事例は多くても三事例で田と同様に分散的な状況を示して、担当奉行による傾向も見られない。佐藤満洋氏は、摂河泉でも村位別石盛制

表4 斗代一覧

国名	郡名	村名	奉行	田					畠					屋敷	出典	
				上々	上	中	下	下々	上々	上	中	下	下々			
1	和泉	日根	土丸	宮木		1.5	1.3	1.1	0.6		1.2	1	0.8	0.35	1.2	新修泉佐野市史第7卷
2	和泉	日根	長滝庄	八嶋		1.5	1.3	1.1	0.6		1.2	1	0.8	0.35	1.2	新修泉佐野市史第7卷
3	和泉	日根	中庄	浅野		1.5	1.3	1.1	0.6		1.1	0.9	0.7	0.25	1.1	新修泉佐野市史第7卷
4	和泉	日根	瓦屋	長束直	1.7	1.5	1.3	1.1	0.6		1.2	1	0.8	0.4	1.2	新修泉佐野市史第7卷
5	和泉	日根	嘉祥寺	秋野		1.5	1.3	1.1	1		1.2	1	0.8		1.2	田原町史歴史編
6	和泉	南	岸和田	宮木		1.5	1.3	1.1	0.6		1.2	1	0.8	0.35	1.2	岸和田市史第六卷
7	和泉	南	春木	桑原	1.6	1.5	1.3	1.1			1.2	1	0.8		0.5	岸和田市史第六卷
8	和泉		窪田													貝塚市史第三卷
9	和泉		横山谷	宮木		1.3	1.2	1.1	0.6		1.1	0.9	0.7	0.5	1.1	和泉市史第二卷
10	和泉	大鳥	神野庄	舟越	1.65	1.5	1.2	0.8			1.2	1	0.8	1.2		堺市史続編第四卷
11	和泉	大鳥	片蔵釜室	石川		1.3	1.2	1.1			1	0.9	0.8			堺市史続編第四卷
12	和泉	大鳥	和田谷	木下												堺市史続編第四卷
13	摂津	豊島	能野田	片桐	1.2	1.5	0.8	0.6		1	0.8	0.6	0.4		1	豊中市史史料篇4
15	摂津	豊島	平尾	舟越		1.5	1.3	1			1.1	1	0.7		1.1	箕面市史史料編4
16	摂津	豊島	西小路			1.5	1.3	1			1.1	1	0.7		1.1	
17	摂津	芥川	天川	石川		1.4	1.2	1	0.7		1.2	1	0.8		1.2	高槻市史史料編Ⅱ
18	摂津	芥川	東天川													高槻市史史料編Ⅱ
19	摂津	芥川	柱本	舟越		1.5	1.3	1.1	1	1.5	1.3	1.2	1.1	0.8	1.3	高槻市史史料編Ⅱ
20	摂津	芥川	富田	浅野	1.8 1.7	1.5	1.3	1	0.6	1.4	1.3	1.1	0.7		1.2	高槻市史史料編Ⅱ
21	摂津	芥川	土室	速水		1.4	1.2	1	0.8		1	0.8	0.6		1.2	高槻市史史料編Ⅱ
22	摂津	太田	吹田	宮木		1.7	1.4	1.2	0.8		1.3	1	0.8		1.3	吹田市史第六卷
23	摂津	大田	味舌下	八嶋	1.5	1.3	1.1	0.9	0.7	1.4	1.3				1.2	摂津市史史料編一
24	摂津	大田	庄屋	八嶋	1.5	1.3	1.1	0.9			1.4				1.2	摂津市史史料編一
29	摂津	芥川	高浜	秋野	1.4	1.3	1.15	0.8	0.6		1.2	1	0.8		1.2	島本町史史料篇
30	摂津	能勢	平野	桑原		1.5	1.3	1.1			1.2	1	0.8		1.2	能勢町史第三卷
31	摂津	能勢	上杉	桑原		1.5	1.3	1.1			1.2	1	0.8		1.2	能勢町史第三卷
32	摂津	能勢	天王畑	桑原		1.5	1.3	1.1					0.8		1.2	能勢町史第三卷
33	摂津	八部	西尻池	浅野		1.25	1.15	0.8	0.5		1.1	1			1	兵庫県史史料編近世二
34	摂津	川辺	山田	石川	1.4	1.2	1	0.8	0.6	0.9	0.9	0.5			0.9	兵庫県史史料編近世二
35	摂津	河辺	稚堂	舟越	1.6	1.5	1.3	1.1			1.2	1	0.4		1.2	尼崎市史第五卷
36	摂津	河辺	岡院	山岡	1.6	1.5	1.3	1.1			1.2	1	0.8		1.2	尼崎市史第五卷
37	摂津	河辺	額田	×	1.55	1.3	1.1				1.2	1	0.8	0.4	1.2	尼崎市史第五卷
38	摂津	武庫	发行	速水		1.4	1.2	1			1	0.8	不定	不定	1.2	尼崎市史第五卷
39	摂津	武庫	守部	速水		1	0.8	0.6			0.8	0.6	0.4		0.8	尼崎市史第五卷
40	摂津	武庫	浜田	八嶋	1.6	1.4	1.2	1			1.2				1.2	尼崎市史第五卷
41	摂津	河辺	出在家	舟越		1.5	1.3	1.1			1.2	1	0.8		1.2	川西市史第五卷
42	摂津	河辺	坂根	×		1.5	1.3	1.1			1.2	1	0.8		1.2	川西市史第五卷
43	摂津	河辺	西畦野	速水	1.4	1.4	1.1	1	0.7		1	0.8	0.6		1	川西市史第五卷
44	摂津	川辺	佐曾利	石川		1.25	1.05	0.9	0.6		0.7	0.5	0.4		1.2	宝塚市史第五卷
45	摂津	河辺	中山寺	浅野		1.25	1.05	0.8			1	0.8	0.6			宝塚市史第五卷
46	摂津	河辺	中筋	浅野		1.25	1.05	0.8			1	0.8	0.6	0.2		宝塚市史第五卷
47	摂津	河辺	山本	舟越		1.4	1.2	1			1	0.8	0.6		1	宝塚市史第五卷
48	摂津	有馬	山田	石川	1.5	1.5	1.3	1.1			1.2	1	0.8		1.2	三田市史第四卷
49	摂津	川辺	木器	石川		1.3	1.2	1	0.6 0.7		0.8	0.6	0.5	0.3	1.2	三田市史第四卷
50	摂津	八部	白川	八嶋	1.4	1.2	1.0	0.8		1.0	0.8	0.6	0.4		1.0	神戸市文献史料第一卷
52	摂津	川辺	棚並	舟越	1.4	1.3	1.2	1	0.9		0.9	0.8	0.6		0.9	猪名川町史4
53	摂津	川辺	木津	舟越		1.3	1.1	0.9			0.9	0.7	0.5			猪名川町史4
54	河内	丹南	北野田													堺市史続編第四卷
55	河内	丹北	島泉	長束	1.43	1.25	1.05				1.25	1.5	0.8		1.2	羽曳野市史第五卷
56	河内	錦部	波方			1.5	1.3	1			1.2	0.9	0.8		1.2	富田林市史第四卷
57	河内	錦部	錦部	増田		1.5	1.3	1.1	0.8		1.2	1	0.8	0.5		富田林市史第四卷
58	河内	丹北	城連寺	長束		1.4	1.2	1			1.2	1	0.8 1.1		1.2	松原市史第四卷
60	河内	丹北	我堂	長束	1.45	1.25	1.05				1.25	1.05	0.85		1.3	松原市史第四卷
61	河内	丹北	更池	長束	1.3	1.1	0.9				1.1	0.9	0.7	0.2	1.1	松原市史第四卷
62	河内	丹北	裏田井	長束	1.4	1.2	1	0.8			1.2	1	0.8	0.4	1.2	松原市史第四卷
63	河内	丹北	河合			1.5	1.3	1.1			1.2	1	0.8		1.2	松原市史第四卷
64	河内	丹北	岡			1.5	1.3	1.1	0.4		1.3	1.1	0.9	0.7	1.3	松原市史第四卷
65	河内	交野	宇山	木下		1.5	1.3	1.1	0.5		1.5	1	0.8	0.6	1.2	枚方市史第七卷
67	河内	交野	招提	林		1.5	1.3	1	0.6		1.3	1.1	0.77		1.3	枚方市史第七卷
69	河内	錦部	向野	増田打口		1.5	1.3	1.1	0.8		1.2	1	0.8	0.5	1.3	河内長野市史第七卷
70	河内	錦部	原	増田打口		1.4	1.3	1.1			1.2		0.8		1.3	河内長野市史第七卷
71	河内	錦部	河合寺	舟越	1.4	1.3	1.1	0.9	0.7		1	0.8	0.6		1.3	河内長野市史第六卷
72	河内	錦部	天野山	増田		1.5	1.4	1.1	1		1.2		1	0.8	1.3	河内長野市史第六卷
73	河内	志紀	道明寺	増田打口		1.4		0.8 1.1			1.2	0.6	0.4	0.3	1.2	藤井寺市史第五卷
74	河内	志紀	小山			1.5	1.3	1.1			1.2	1	0.8		1.5	藤井寺市史第六卷
75	河内	安宿部	玉手	宮木		1.5	1.3	1.1	0.8		1.2	1	0.9	0.6	1.2	柏原市史第五卷
76	河内	洪川	竹渚		1.3	1.2	1	0.9		1.3	1.2	1	0.7		1.3	八尾市史史料編
77	河内	茨田	大枝	八嶋												守口市文化財調査報告書

表5 田方斗代一覧

分類	上	中	下	片桐	船越	石川	桑原	浅野	速水	宮木	八嶋	木下	長束正	秋野	長束吉	石田	増田	一柳	川村	山岡	不明		
A	1.7	1.4	1.2							1													1
B	1.5	1.2	0.8		1																		1
C	1.55	1.3	1.1																			1	1
D	1.5	1.4	1.1														1						1
E	1.5	1.3	1.1		3	1	4	1		3	1	1		1	1		2			1	4	23	
F	1.5	0.8	0.6	1																			1
G	1.3	1.15	0.8											1									1
H	1.3	1.1	0.9		2						2		1										5
I	1.25	1.15	0.8					1															1
J	1.25	10.5	0.9			1																	1
K	1.25	1.05	0.8					2															2
L	1.2	1.0	0.8			1					1												2
M	1.2	1.0	0.9																			1	1
N	1.0	0.8	0.6						1														1
				1	6	3	4	4	1	3	4	1	1	2	1	0	3	0	0	0	1	6	41

表6 畠方斗代一覧

	上	中	下	片桐	船越	石川	桑原	浅野	速水	宮木	八嶋	木下	長束正	秋野	長束吉	石田	増田	一柳	川村	山岡	不明		
A	1.5	1.0	0.8									1										1	
B	1.3	1.2	1.1		1																	1	
C	1.3	1.1	0.9																		1	1	
D	1.3	1.1	0.8																		1	1	
E	1.3	1.1	0.7					1														1	
F	1.3	1.05	0.85										1									1	
G	1.3	1.0	0.8							1												1	
H	1.25	1.05	0.8										1									1	
I	1.2	1.0	0.8 1.1		1								1									2	
J	1.2	1.0	0.9							1												1	
K	1.2	1.0	0.8			2	3			2	1		1	2	1		2			1	4	19	
L	1.2	1.0	0.7																		1	1	
M	1.2	1.0	0.4		1																	1	
N	1.2	0.9	0.8																		1	1	
O	1.2	0.6	0.4														1					1	
P	1.1	1.0	0.7		1																1	2	
Q	1.1	0.9	0.7			1				1			1									3	
R	1.0	0.9	0.8			1																1	
S	1.0	0.8	0.6		3			2	3													8	
T	0.9	0.7	0.5		1																	1	
U	0.8	0.6	0.5		1																	1	
V	0.8	0.6	0.4	1					1		1											3	
W	0.7	0.5	0.4			1																1	
				1	9	5	3	3	4	5	2	1	5	2	1	0	3	0	0	0	1	9	54

を想定しているが、検地条目での斗代である村落事例が多いが、一方で条目規定から外れる事例も多く、更には多様な組合せの存在がみられ、村位差としての斗代差「一斗」「二斗」を証明することは難しいと思われる。

(4) 「奥書」記載項目の特徴3 年月日と奉行

和泉国では月日のわかる検地帳で、日根郡畠中村・窪田村の八月五日が一番早く、大鳥郡日置荘西村の十一月一六日が一番遅い。この期間に検地が行われたことを示している(表1)。八月五日の日付けは摂河泉文禄検地の全体での初見でもあり、検地が和泉国から開始されたことがわかる。和泉国では大鳥郡北野田村のが十月、大鳥郡日置荘西村の十一月十六日の事例を除くと、その他の事例は八月に集中している。和泉国では、基本的には八月に検地が行われ、十月や十一月の事例は何らかの理由で八月中に実施できなかった村落での補足調査として、例外的にこの時期に実施されたといえよう。

摂津国での検地帳の日付は、西成郡大道村の九月五日が一番早く、芥川郡土室村が十一月十六日で一番遅い。十一月の事例は芥川郡以外には事例がなく、九月・十月の事例が摂津国全域にわたって多くを占めることから、同国は基本的には和泉国の検地終了後に九月～十月に実施されたとみられるのである。

河内国検地帳の日付では、茨田郡小山村の十月十九日(検地奉行は不明)の日付が一番早く、交野郡招堤村が日付けは不明の十二月が一番遅いことになる。十月の事例は少なく、十二月の事例は前掲の一事例しかないことから、同国の検地は、基本的には十一月に実施された

とみてよい。つまり、摂津国での検地終了後に河内国に検地が行われ、十一月末には、摂河泉惣国検地は終了したのである。

次に年月日記載の特徴についてみてみよう。年月日は「表紙」と「奥書」の両方に記載される場合が一般的であるが、両方で月日が相違する事例がいくつか見られる。列挙すると次の通りである。

〈13〉熊野田村(片桐) 表紙 九月二十三日 奥書 十月七日

※二冊で構成されるが、一冊目の本文中に、「九月廿三日 熊野田村牧次右衛門うち口」、「九月廿四日 熊野田村分」、「九月廿四日 次左衛門うち口」、「九月廿四日 小左右衛門うち口」と二冊目本文中に、「九月廿三日 熊野田村 安喜兵衛打口」、「九月廿四日」との記載がある。

〈14〉長興寺村(片桐) 表紙「九月廿四日」 奥書「十月六日」

〈23〉味舌下村(八嶋) 表紙「拾月十八日」 奥書「九月廿六日」

〈25〉鮎川村(片桐) 表紙「九月吉日」 奥書「拾月吉日」

〈26〉十一村(片桐) 表紙「九月二十七日」 奥書「十月九日」

〈47〉山本村(舟越) 表紙「九月吉日」 奥書「拾月吉日」

〈51〉山田谷上村(片桐) 表紙「九月十一日」 奥書「九月廿三日」

〈55〉島泉村(長東大蔵) 表紙「十一月四日」 奥書「十一月十六日」

〈59〉城連寺村(長東大蔵) 表紙「十一月十五日」 奥書「十一月十日」

一般的には、年月日は検地が終わった日付として理解されているように思われるが、何の日付けなのかは明確ではない。表紙と奥書での違いは、「表紙」よりも「奥書」の年月日が後である場合が多いことからみれば、違いがある場合、各村落での検地開始日と終了日との理解が正しいようにも思われる。ところが〈23〉〈59〉のように逆の事例も

みられ、必ずしも正しいとはかぎらない。検地奉行片桐市正の検地帳には、奥書に村落名の宛名が記載される。この点から見れば、検地帳を奉行から村落に下し置いた日というのが正しいように思われる。また、〈13〉の場合、本文中の月日は、「九月廿三日」「九月廿四日」と検地が打口ごとに実施日と記載されたとみられ、奥書が少し離れて「十月七日」とされることは、この日は検地終了日ではなく、実施内容が帳簿に整理されて帳簿が村に下置かれた日とする可能性が高いのである。しかし、前掲のように逆日付けがあることから、単純にはいかない。表紙の日付の方があとの場合は、検地が終了した以降に日付を表紙に記載したことになるうか。検地帳の日付の位置づけは大きな課題である。

検地奉行としては、次の一八人が確認できた〔大和・越前はそれぞれの検地において検地奉行としても名が見える者〕。

- ①山岡如軒 馬廻
- ②八嶋久兵衛 馬廻
- ③宮木藤左衛門 鉄砲大将
- ④増田長盛 五奉行
- ⑤舟越五郎左衛門景直 淡路国地侍、鉄砲組大将
- ⑥一柳越後 秀吉馬廻
- ⑦山口玄蕃宗永
- ⑧速水甲斐守久守久 近習組頭
- ⑨長束大蔵大輔正家 五奉行
- ⑩長束次郎兵衛直吉 馬廻組頭
- ⑪桑原次右衛門貞也 馬廻組頭

⑫木下与右衛門(周防守) 延重 鉄砲組

⑬川村久馬 馬廻頭

⑭片桐市正直盛(且元)

⑮石田治部少輔三成 五奉行

⑯石川久五郎光元 馬廻

⑰浅野弾正長吉 五奉行

⑱秋野治部卿

この中で「打口」と記載されるのは、長束正家と増田長盛に限定される。打口とは検地奉行の下で実際に検地をおこなった検地役人とみられ、文禄四年大和検地帳では多くの事例がみられた。撰河泉ではこの二人の事例であり、しかも、長束の場合は検地役人名を記載しないので、実際の検地役人名が確認されるのは、検地奉行増田長盛だけとなる。大和検地帳でも指摘したが、のち五奉行となるような秀吉重要側近では、検地奉行が在地での実際の検地を実施したのではなく、家臣の検地役人が実行したのである。増田打口として検地役人として記載されるのは、〈72〉錦部郡天野山では、「平井弥四郎・丹治新右衛門」〈69〉錦部郡向野村では「真斉・岡田小兵衛」、〈70〉錦部郡原村では「門田茂右衛門・郡源七」と六人の検地役人名が確認される。このうち平井弥四郎は、大和国検地帳でも見られる検地役人である。また、〈69〉「真斉」が「喜齋」の誤記とすると、大和国検地帳の散見される「河橋喜齋」と同一人物とみられる¹⁴⁾。

大和国検地帳では、表紙の検地奉行・検地役人名と奥書署判との関係から分類すると、次のような分類をおこなった。

署判Ⅰ型：「表紙」に検地奉行名のみ 「奥書」に検地奉行署判または印↓ほとんど

署判Ⅱ型：「表紙」に検地奉行十役人（打口）名

Ⅱ―Ⅰ型：「奥書」に検地奉行署判または印↓増田長盛の事例

Ⅱ―Ⅱ型：「奥書」に検地役人署判 ↓木下延重打口林藤兵衛の事例のみ

署判Ⅲ型：「表紙」に検地役人名 ↓なし

Ⅲ―Ⅰ型：「奥書」に検地奉行署判 ↓なし

Ⅲ―Ⅱ型：「奥書」に検地役人署判 ↓なし

前述したように打口記載の事例が、大和国検地帳に比べると長束正家と増田長盛にほぼ限定されることから様々な署判の類型が存在しなく、署判Ⅲ型はまったく存在しなく、署判Ⅰ型が一般的である。増田の打口があっても検地役人が奥書に署判する事例は確認されていない。唯一例外的なのは、〈67〉錦部郡招堤村の検地帳である。奥書署判に「林藤兵衛」と検地奉行ではない人物の花押がある。この検地帳は原本であるものの表紙を欠損していることから、検地奉行名が確認できないが署判Ⅱ―Ⅱ型ないしは署判Ⅲ―Ⅱ型の事例と推定される。「招提寺内興起後聞記并年寄分由緒実録」（『枚方市史』第六巻）には「文禄二癸巳八月下旬より一円御検地御奉行木下周防守 検地高七百二拾石二斗、翌年甲午十二月帳面被下置、勘定頭林藤兵衛印形也」とあり、招提村の検地奉行が「木下周防守」＝木下与右衛門延重であり、その勘定頭が林藤兵衛であったことがわかる。表紙が欠損する前の記録だとすると、奥書には奉行名がないことから表紙には木下周防守名があったことは確実であり、署判Ⅱ―Ⅱ型に位置付くことにな

る。

（5）「奥書」記載項目の特徴4 家数・その他

奥書には「家数」が記載される帳面がある。^⑤和泉国事例はなく撰津・河内国事例は、次のようなものである。

〈13〉撰津国熊野田村（検地奉行片桐）「家 三拾壹間」「家 四拾間」

〈17〉撰津国天川村（石川）「一、七拾四間 家数」

〈30〉撰津国河辺郡山田村（片桐）「家 廿七」

〈40〉撰津国佐曾利村（石川）「一、四拾壹間 家数」

〈44〉撰津国有馬郡山田村（石川）「一、家数 貳拾四間」

〈45〉撰津国木器村（石川）「一、貳拾七間 家数」

〈47〉撰津国谷上村（片桐）「家数四十三間」

〈51〉河内国島泉村（長束）

「右之外

七畝十四歩 庄屋七右衛門 六畝十歩 たうちやう

九畝 ありき五郎三郎

家数拾三家之内八人夫やく」

〈54〉河内国城連寺村（長束）

「一、家数十五間内 八間 夫役

五間 万用不立

右外屋敷方四畝御除 一間 庄や

同二畝六歩御除 一間 あるき」

〈55〉河内国我堂村（長束）「家数卅七間此内夫役廿五間」

〈56〉河内国更池村（長束）「家数十一間此之内四間夫やく」

表8 家数記載一覧表

	国名	村名	検地奉行	屋敷筆数	家数	夫役数
13	摂津	熊野田①	片桐市正	31	31	×
		熊野田②	片桐市正	40	40	×
30	摂津	山田	片桐市正	26	27	×
47	摂津	谷上	片桐市正	41	43	×
40	摂津	佐曾利	石川久五郎	×	41	×
44	摂津	山田	石川久五郎	24	24	×
45	摂津	木器	石川久五郎	39	27	×
17	摂津	天川	石川久五郎	47	74	×
51	河内	島泉	長東大蔵	14	13	8
54	河内	城連寺	長東大蔵	14(7)	15	8
55	河内	我堂	長東大蔵	37(26)	37	25
56	河内	更池	長東大蔵	11(4)	11	4
57	河内	東田井	長東大蔵	18(8)	17	7
59	河内	岡	長東大蔵?	64	65	31

屋敷筆数の()は、肩書に「夫」とある数

〔57〕河内国東田井村(長束)「家数十七間内七間夫やく」
〔59〕河内国岡村(長束か)

「家数六拾五間内
右之外屋敷

式敵廿歩 御除 壹人 庄や

廿四歩 御除 一人 あるき

一間 道場

三拾壹間 用二不立

三拾一間 夫

「家数」項目が記載される検地帳は、検地奉行片桐市正・石川久五

郎・長東大蔵大輔の三人に限られている。片桐検地帳の三ヶ村の場合
は、惣都合として村高が記載されたあとに「家数」のみが記載される。

この家数と検地帳本文中の屋敷筆数と比べてみるとほぼ同数である
ことがわかる。〔30〕〔47〕では数は相違するがわずかな相違であり、こ
れは誤記と言えようか。家数とは、検地帳本文の屋敷筆数の合計とみ
られる。石川検地帳の四ヶ村の事例でも、惣高のあとに家数が記載さ
れる。〔44〕山田村の事例では屋敷筆数と一致するが、〔17〕天川村では
家数七四、屋敷筆数四七と〔45〕木器村では家数二七、屋敷筆数三九と
大幅な相違が見られる。この相違の理由はよくわからない。

長束検地帳では、家数だけでなく夫役数が記載されるのが特徴であ
る。六ヶ村の事例を見ると家数と屋敷筆数ほぼ一致して、相違があつ
てもはわずかに過ぎない。〔51〕島泉村〔54〕城連寺村〔59〕岡村の事例
では、家数の内訳が具体的に記載される。〔54〕の場合、家数一五間
のうち夫役は八間で残り七間の中で「万用不立」五間、庄屋・あり
きがそれぞれ一間である。他の事例からも「庄屋」「ありき」「道場」
は除地として年貢免除地としてされ、夫役も免除されていた。〔54〕
の屋敷名請人には肩書きが記載され、筆数一四のうち七筆には「夫」
とあり、これが夫役負担者であることがわかるが、その他、「後家」「か
たハもの」「こしぬけ」の肩書きがあり、夫役負担には適さぬ名請人
であったのである。〔55〕の場合、家数の内訳は奥書に記載されない
が、本文の屋敷方名請人の肩書きから内訳が推定できる。屋敷方名請
人総数は三七筆で、内訳は「夫」二六、「後家」二六、「うは」一、「子
共てならい所」^{〔16〕}一、「おや」一、「道場」一、「庄屋」一、「ありき」一、

肩書きなし三となつてゐる。家数の三七と筆数は一致するが、夫役数は名請人数の方が一多くなつてゐる。これは名請人で「夫」記載のある宗兵衛は、「はしり」との注記があり、実際には、我堂村から逃亡して村にはいなかったたのであり、これを除くと「奥書」記載の夫役数二五と一致することになる。

どうして家数（屋敷名請人の総計）が記載されているのかは不明である。内訳としての夫役数の記載から役屋掌握との関連が想定されるが、宮川氏が指摘するように検地帳は石高掌握の帳簿であり、同時に夫役数の掌握を行ったとは見ながた。これは、家数や夫役数といった項目が検地条目になく、また、すべての検地帳に家数が記載されないことから理解されよう。だとすれば、家数の記載は検地奉行人の個別的な裁量で、個別的な目的で行われたと見るしかない。

「検地条目」第七条にある小物成の記載はほとんどみられなく、次の三例のみである。

〈6〉岸和田の「一、貳拾五貫文 浜役錢十二月兩度二」

〈7〉春木村の「一、六百參拾文ツ、但一ヶ月分 三月より十月迄 浦錢」

〈62〉招提村の「二斗 山年貢」

「検地条目」第一条には、検地帳を百姓に写させて、検地奉行は花押を据えて、百姓から請状をもらつた上で検地帳を百姓に渡すことが示されている。〈13〉30×47などの片桐検地帳は、末尾は次のような記載になつてゐる。〈30〉川辺郡山田村では、

「今度御検地帳面高頭右之分相究候、但百姓にちやうをうつさせ候間、高頭之儀相違有間敷候、万一帳之内百姓下にて斗代付替せんさくの時は、御代官御給人本帳可相渡候条、其帳面証文たるへく候也、

文禄三年九月晦日

山田村百姓中

片桐市正（花押）

検地帳が「検地条目」にあるように、百姓が検地帳の原本を写し取り副本を作成して手元に置いた経緯が示されている。検地奉行片桐の署判は、写本として正しいことを証明する意味を持ち、宛名が記載されることで検地奉行から「渡置」かれたことを示している。また、後に何らかの理由で斗代変更が必要なきには、検地帳が代官や給人への証文となつてゐる。

おわりに

摂河泉三ヶ国の検地帳は、一見すると統一性が見られるものの、むしろ様々な点での多様性が特徴的であるといえる。検地帳（奥書）記載の唯一の一致項目といふべきなのは、田畠屋敷分米高の合計つまり村高記載である。この点から見れば、当然ながら検地目的とは、村高の統一的な検地実施による掌握であつたのである。和泉国検地条目は、同年の伊勢国検地条目とほぼ同文であり、文禄三年検地条目は、間竿六尺三寸、一反〓三〇〇歩、斗代などの太閤検地の原則を示すものとして評価されている。この原則が、実際の検地実施に際して厳守されたかを見るならば、必ずしも原則通りとはいえない事例が多くみられるのである。検地条目とは、検地奉行に示された検地原則および厳守項目ではあるが、いくつかの箇条でみられる「見はからい」に注目すべきではなからうか。「見はからい」とは、予めの原則をそのまま適用するのではなく、実見にしたがつて決定するという意味と実見者つまり検地奉行の判断に従うという意味も含まれてゐると考

えられる。検地奉行は、条目の原則と先例（前代の検地帳）を前提としながらも、「見はからい」という裁量権が条目によって承認されることによつて検地を実施した。裁量権の承認は、在地との癒着による不正が行われることが懸念され、検地条目には在地と検地奉行・検地役人との礼銭などによる結びつきを厳しく取り締まる内容が明記されることになる。一方、この検地奉行への裁量権承認こそが、検地帳の多様性として反映されたといえるのであろう。¹⁷⁾

注

- (1) 大阪府史編集専門委員会『大阪府史』第5巻近世編Ⅰ（一九八五年）の高尾一彦執筆「太閤検地と農民」で、府域全体の太閤検地の整理が行われている。一方、兵庫県域の摂津国部分については、兵庫県史編集専門委員会『兵庫県史』第3巻（一九七八年）の今井林太郎執筆「太閤検地の実施」がある。個別論文としては、宮川満「太閤検地について―北摂における封建制の展開―」（『近世史研究』第二巻第一一・一二号、一九五六年のち『宮川満著作集』5 増補改訂太閤検地論第Ⅱ部）第一書房、一九九九年に所収）、中口久夫「文禄三年摂州太田郡吹田村検地帳の分析」（『吹田の歴史』四、一九七六年）、森杉夫「和泉国の太閤検地」（一）（七）『大阪経大論集』一九四〇二〇〇号（一九九〇〜一九九一年）など。
- (2) 拙稿「慶長三年越前国太閤検地帳の基礎的研究」（獨協中学高等学校『研究紀要』第二九・三〇合併号、二〇一六年）、「文禄

四年大和国太閤検地帳の基礎的研究」（獨協中学高等学校『研究紀要』三三、二〇一九年）。

(3) この検地帳については、宮川満「初期太閤検地の性格―天正十一年河内加納村水帳について―」（『魚澄先生古稀記念国史学論叢』一九五九年）分析がある。

(4) この史料の位置づけについては、八木哲浩「近世初期における摂津の領有」（『地域史研究』一一三、一九七二年）、同「摂津一国高御改帳の年代考証」（『地域史研究』三十三、一九七四年）、落合重信「摂津一国高御改帳の年代考証に関連して」（『地域史研究』四一、一九七四年）を参照のこと。

(5) 紀伊国太閤検地については、井戸佳子・藤本清二郎「紀州における太閤検地と石高制の成立」（『和歌山地方史研究』七、一九八四年）を参照。

(6) 秋澤繁「天正十九年豊臣政権によるの御前帳徴収について」（中世の窓同人編『論集中世の窓』吉川弘文館、一九七七年）。秋澤氏は、前掲の「摂津一国高御改帳」についても天正十九年の御前帳の関連史料と位置付ける。

(7) 『かりそめのひとりごと』については、泉大津市教育委員会編『泉大津市史紀要』第五号（一九八〇年）の解題を参照。

(8) 慶長三年越前国の検地条目の第十条に口米についての規定がある。

(9) 中左近言上状は、熊取谷（大阪府熊取町）の支配をめぐる中左近家の盛吉と中左太夫家の盛豊との相論に際して、左近盛吉が主張を記したものである。内容が似ているもう一通も存

在する（中家文書『熊取町史』史料編Ⅱ）。

(10) 和泉国検地条目については、いくつかの写しが残されているが、その中で【史料3】【史料4】よく引用される写しである。

関西大学図書館鬼洞文庫（『泉大津市史』第一巻下に写真掲載）や和泉市堤家文書（『泉大津市史』第三巻）にも写しがある。前者では①から⑬のすべての箇条が揃っている点や年月日の下に「御印」とあり、秀吉の朱印状であったことがわかる。後者は①～⑬ヶ条があることは同様であるが、発給年月日が「文禄三年八月三日」となっている。

(11) 一反Ⅱ二五〇歩制については、朝尾直弘「二百五十歩Ⅱ一反の太閤検地」『日本歴史』二五三（一九六九年）。前掲注（1）森杉夫「和泉国の太閤検地」や森杉夫「和泉の文禄検地と高石地方」『高石市史』第一巻、一九八九年）を参照。

(12) 伊勢国の検地については、大石学「伊勢国文禄検地の基礎的研究」（『徳川林政史研究所研究紀要』昭和五七年度、一九八三年）を参照。また、検地条目など関係史料は、松阪市史編さん委員会『松阪市史』第四巻史料篇検地帳（1）（一九七八年）に所収。

(13) 村別石盛り制については、佐藤満洋「太閤検地における村別石盛り制の研究」（『大分県地方史』五八・五九・六一・六二・六三、一九七〇年～七二年のち藤野保編『九州近世史研究叢書 1 九州と豊臣政権』国書刊行会、一九八四年所収）。

(14) 拙稿「文禄四年大和国太閤検地帳の基礎的研究」注（2）。

(15) 宮川前掲論文注（1）に家数に関する評価がある。検地帳で

の役屋掌握理解への批判がある。

(16) 「子共てならい所」は文字通り、村落内の教育施設だとすると、確認される最初の事例であると思われる。庶民の教育施設としての寺子屋が普及するのは、江戸時代後期である。

(17) 奉行裁量については、谷口央「太閤検地の奉行裁量と検地帳——伊勢国太閤検地関連の新出史料紹介を兼ねて——」（『人文学報』四一五、歴史学編三七号、二〇〇九年のち『幕藩制成立期の社会経済史研究』校倉書房に所収）。

表1 文禄3年摂津・河内・和泉国大關検地実施村落一覧

番号	年月	国	郡	村名	現地名	奉行人	現存	史料(所蔵)	出典
1	1	文禄3	和泉	日根	鳥取庄	阪南		寛文4年口上書	阪南
2	2	文禄3、8	和泉	日根	嘉祥寺	田尻	5	池井家	田尻
3	3	文禄3、8、12	和泉	日根	瓦屋	泉佐野	4	佐治家	泉佐野
4	4	文禄3、8	和泉	日根	中庄	泉佐野	3	新川家	泉佐野
5	5	文禄3、8、6	和泉	日根	長瀧	泉佐野	2	喜多家	泉佐野
6	6	文禄3、8	和泉	日根	土丸	泉佐野	1	大阪歴史博物館	泉佐野
7	7	文禄3	和泉	日根	櫻井	泉佐野	○	250 櫻井部落の歴史	櫻井
8	8	文禄3	和泉	日根	熊取谷	熊取	250	慶長9指出帳	高石
9	9	文禄3、8	和泉	日根	宮のかいと	熊取	○	250 中家	熊取
10	10	文禄3、8	和泉	日根	窪	熊取	○	250 中家	熊取
11	11	文禄3、8	和泉	日根	大垣内	熊取	○	250 中家	熊取
12	12	文禄3、8	和泉	日根	野田	熊取	○	250 中家	熊取
13	13	文禄3、8、11	和泉	南	春木	岸和田	7	慶長9指出帳	高石
14	14	文禄3	和泉	南	額原	岸和田		慶長9指出帳	高石
15	15	文禄3	和泉	南	包近	岸和田		慶長9指出帳	高石
16	16	文禄3	和泉	南	中	岸和田		慶長9指出帳	高石
17	17	文禄3	和泉	南	藤井	岸和田		慶長9指出帳	高石
18	18	文禄3	和泉	南	加守	岸和田		慶長9指出帳	高石
19	19	文禄3	和泉	南	吉井	岸和田		慶長9指出帳	高石
20	20	文禄3	和泉	南	磯上	岸和田		慶長9指出帳	高石
21	21	文禄3	和泉	南	大路	岸和田		慶長9指出帳	高石
22	22	文禄3	和泉	南	箕土器	岸和田		慶長9指出帳	高石
23	23	文禄3	和泉	南	中井	岸和田		慶長9指出帳	高石
24	24	文禄3	和泉	南	小松里	岸和田		慶長9指出帳	高石
25	25	文禄3	和泉	南	下池田	岸和田		慶長9指出帳	高石
26	26	文禄3	和泉	南	大町	岸和田		慶長9指出帳	高石
27	27	文禄3	和泉	南	荒木	岸和田		慶長9指出帳	高石
28	28	文禄3	和泉	南	西之内	岸和田		慶長9指出帳	高石
29	29	文禄3	和泉	南	別所	岸和田		慶長9指出帳	高石
30	30	文禄3	和泉	南	土生	岸和田		慶長9指出帳	高石
31	31	文禄3	和泉	南	中村	貝塚	250	慶長9指出帳	高石
32	32	文禄3	和泉	南	阿間河滝	岸和田	250	慶長9指出帳	高石
33	33	文禄3	和泉	南	八田	岸和田	250	慶長9指出帳	高石
34	34	文禄3	和泉	南	極楽寺	岸和田	250	慶長9指出帳	高石
35	35	文禄3	和泉	南	畑	岸和田	250	慶長9指出帳	高石
36	36	文禄3	和泉	南	神須屋	岸和田	250	慶長9指出帳	高石
37	37	文禄3	和泉	南	塔原	岸和田	250	慶長9指出帳	高石
38	38	文禄3	和泉	南	相川	岸和田	250	慶長9指出帳	高石
39	39	文禄3、8	和泉	南	岸和田	岸和田	6	250 慶長9指出帳	高石
40	40	文禄3	和泉	泉	辻	泉大津	250	村々大概書	高石
41	41	文禄3	和泉	泉	虫取	泉大津	250	村々大概書	高石
42	42	文禄3	和泉	泉	宮(三十郎方)	泉大津	250	村々大概書	高石
43	43	文禄3	和泉	泉	穴田	泉大津	250	村々大概書	高石
44	44	文禄3	和泉	泉	宮(儀平方)	泉大津	250	村々大概書	高石
45	45	文禄3	和泉	泉	池浦	泉大津	250	明細帳	泉大津
46	46	文禄3	和泉	泉	長井	泉大津	250	明細帳	泉大津
47	47	文禄3、8、5	和泉	日根	窪田	貝塚	8	要家	貝塚
48	48	文禄3、8、5	和泉	日根	畠中	貝塚	○	要家	貝塚
49	49	文禄3	和泉	泉	王子	和泉	250	慶長9指出帳	高石
50	50	文禄3	和泉	泉	太	和泉	250	慶長9指出帳	高石
51	51	文禄3	和泉	泉	中	和泉	250	慶長9指出帳	高石
52	52	文禄3	和泉	泉	上代	和泉	250	慶長9指出帳	高石
53	53	文禄3	和泉	泉	尾井	和泉	250	慶長9指出帳	高石
54	54	文禄3	和泉	泉	富秋	和泉	250	慶長9指出帳	高石
55	55	文禄3、8	和泉	泉	横山谷	和泉	9	250 池辺家	高石
56	56	文禄3、8	和泉	大鳥	綾井高石	高石	250	名寄帳	高石
57	57	文禄3	和泉	大鳥	塚	片桐且元	250		高石
58	58	文禄3	和泉	大鳥	畑	片桐且元	250		高石
59	59	文禄3	和泉	大鳥	逆瀬川	塚	250		高石
60	60	文禄3	和泉	大鳥	田中	塚	250		高石
61	61	文禄3	和泉	大鳥	小代	塚	250		高石
62	62	文禄3、8、17	和泉	大鳥	深井	塚	○		高石
63	63	文禄3	和泉	大鳥	塚九間町	塚	○	覚応寺	塚
64	64	文禄3、8	和泉	大鳥	神野荘	塚	10	北村家	塚
65	65	文禄3	和泉	大鳥	草部	塚		片桐且元	塚
66	66	文禄3、11、16	和泉	大鳥	日置荘西村	塚	○	太田家	塚
67	67	文禄3	和泉	大鳥	八田寺	塚		木下与右衛門	塚
68	68	文禄3、8	和泉	大鳥	和田谷	塚	12	和田家	塚
69	69	文禄3	和泉	大鳥	土師	塚		石川久五郎	塚
70	70	文禄3、8	和泉	大鳥	和田	塚		石川久五郎	塚
71	71	文禄3、8	和泉	大鳥	榎	塚		石川久五郎	塚
72	72	文禄3、8	和泉	大鳥	豊田	塚	250		塚

番号	年月	国	郡	村名	現地名	奉行人	現存	史料(所蔵)	出典	
73	73	文禄3、8、15	和泉	大鳥	鉢峯寺	堺	石川久五郎	○	250	堺
74	74	文禄3、8	和泉	大鳥	富蔵	堺	石川久五郎		250	堺
75	75	文禄3、8、18	和泉	大鳥	大庭寺・太平寺	堺	石川久五郎	○	250	堺
76	76	文禄3、8、15	和泉	大鳥	釜室・片蔵	堺	石川久五郎	11	250	奥野家
1	77	文禄3	摂津	住吉	杉本	住吉				大阪
2	78	文禄3	摂津	住吉	山内	住吉	木下与右衛門			大阪
3	79	文禄3	摂津	住吉	住吉	住吉	片桐且元			大阪
4	80	文禄3	摂津	住吉	平野庄	平野				大阪
5	81	文禄3	摂津	東成	舎利寺	生野	石川久五郎			大阪
6	82	文禄3	摂津	東成	東今里	東成				大阪
7	83	文禄3	摂津	東成	大今里	東成				大阪
8	84	文禄3	摂津	東成	深江	東成				大阪
9	85	文禄3	摂津	東成	左専道	城東				大阪
10	86	文禄3	摂津	東成	今福	城東				大阪
11	87	文禄3	摂津	東成	蒲生	城東				大阪
12	88	文禄3、8	摂津	東成	東郡戸	天王寺	浅野長吉	○		比売許曾神社
13	89	文禄3	摂津	東成	小橋	天王寺	浅野長吉			大阪
14	90	文禄3	摂津	東成	天王寺	天王寺				大阪
15	91	文禄3	摂津	西成	曾根崎	北				大阪
16	92	文禄3	摂津	西成	木津	南				大阪
17	93	文禄3	摂津	西成	川崎	北				大阪
18	94	文禄3	摂津	西成	木寺	淀川				大阪
19	95	文禄3	摂津	西成	国分	南				大阪
20	96	文禄3	摂津	西成	北野	北				大阪
21	97	文禄3	摂津	西成	本庄	北				大阪
22	98	文禄3	摂津	西成	下三番	東淀川				大阪
23	99	文禄3	摂津	西成	福島	福島				大阪
24	100	文禄3	摂津	西成	稗島	西淀川				大阪
25	101	文禄3	摂津	西成	大和田	西淀川				大阪
26	102	文禄3	摂津	西成	野里	西淀川				大阪
27	103	文禄3	摂津	西成	佃	西淀川				大阪
28	104	文禄3	摂津	西成	三屋	西淀川				大阪
29	105	文禄3	摂津	西成	南方	東淀川				大阪
30	106	文禄3	摂津	西成	小嶋	淀川				大阪
31	107	文禄3	摂津	西成	乗師堂	東淀川				大阪
32	108	文禄3	摂津	西成	堀	淀川				大阪
33	109	文禄3	摂津	西成	南宮原	淀川				大阪
34	110	文禄3	摂津	西成	原					大阪
35	111	文禄3	摂津	西成	北宮原	東淀川				大阪
36	112	文禄3	摂津	西成	芝島					大阪
37	113	文禄3	摂津	西成	大道	東淀川				大阪
38	114	文禄3	摂津	西成	新家	東淀川				大阪
39	115	文禄3	摂津	西成	塚本	東淀川	山岡如軒			大阪
40	116	文禄3	摂津	西成	堀上	東淀川	宮木藤右衛門			大阪
41	117	文禄3	摂津	西成	大仁	西淀川	石川久五郎			大阪
42	118	文禄3	摂津	西成	野田	北	石川久五郎			大阪
43	119	文禄3	摂津	西成	浦江	西淀川	石川久五郎			大阪
44	120	文禄3	摂津	西成	海老江	福島	石川久五郎			大阪
45	121	文禄3	摂津	西成	西		舟越五郎左衛門			大阪
46	122	文禄3	摂津	西成	北方		舟越五郎左衛門			大阪
47	123	文禄3	摂津	西成	東寺		舟越五郎左衛門			大阪
48	124	文禄3	摂津	西成	蒲田	東淀川	舟越五郎左衛門			大阪
49	125	文禄3	摂津	西成	淡路庄	東淀川	舟越五郎左衛門			大阪
50	126	文禄3	摂津	西成	下新庄	東淀川	桑原治右衛門			大阪
51	127	文禄3	摂津	西成	上新庄	東淀川	桑原治右衛門			大阪
52	128	文禄3	摂津	西成	三番	東淀川	桑原治右衛門			大阪
53	129	文禄3	摂津	東成	大今里	東成		○	林家	平凡
54	130	文禄3	摂津	西成	光立寺	東淀川	片桐且元			大阪
55	131	文禄3	摂津	西成	浜	東淀川	片桐且元			大阪
56	132	文禄3	摂津	西成	橋口	東淀川	片桐且元			大阪
57	133	文禄3、9、19	摂津	西成	江戸	東淀川	片桐且元	○	羽間家	大阪
58	134	文禄3、9、16	摂津	能勢	平野	能勢	桑原次右衛門	30		能勢
59	135	文禄3、9、16	摂津	能勢	上杉	能勢	桑原次右衛門	31		能勢
60	136	文禄3、9、17	摂津	能勢	天王	能勢	桑原治右衛門	32		能勢
61	137	文禄3、10、吉	摂津	豊島	平尾	箕面	舟越五郎右衛門	15	平尾家	箕面
62	138	文禄3	摂津	豊島	上止々呂美	箕面	木下与右衛門			箕面
63	139	文禄3、9、22	摂津	豊島	西小路	箕面	舟越五郎右衛門	16		箕面
64	140	文禄3	摂津	豊島	小曾根	豊中	宮木藤左衛門			豊中
65	141	文禄3	摂津	豊島	北条	豊中	宮木藤左衛門			豊中
66	142	文禄3	摂津	豊島	長島	豊中	宮木藤左衛門			豊中
67	143	文禄3	摂津	豊島	寺内	豊中	宮木藤左衛門			豊中
68	144	文禄3	摂津	豊島	浜	豊中	宮木藤左衛門			豊中
69	145	文禄3	摂津	豊島	石蓮寺	豊中	宮木藤左衛門			豊中

番号	年月	国	郡	村名	現地名	奉行人	現存	史料(所蔵)	出典
70	146	文禄3	撰津	豊島	桜塚	豊中	石川久五郎		豊中
71	147	文禄3	撰津	豊島	原田村梨井	豊中	石川久五郎		豊中
72	148	文禄3	撰津	豊島	畑田村角	豊中	石川久五郎		豊中
73	149	文禄3	撰津	豊島	原田村中倉	豊中	石川久五郎		豊中
74	150	文禄3	撰津	豊島	原田村南町	豊中	片桐市正		豊中
75	151	文禄3	撰津	豊島	轟木	豊中	片桐市正		豊中
76	152	文禄3	撰津	豊島	新免	豊中	片桐市正		豊中
77	153	文禄3	撰津	豊島	南刀根山	豊中	片桐市正		豊中
78	154	文禄3	撰津	豊島	北刀根山	豊中	片桐市正		豊中
79	155	文禄3	撰津	豊島	柴原	豊中	片桐市正		豊中
80	156	文禄3、9、24	撰津	豊島	長興寺	豊中	片桐市正	14	豊中
81	157	文禄3、10、1	撰津	豊島	少路	豊中	片桐市正	○	豊中
82	158	文禄3、10、8	撰津	豊島	内田	豊中	片桐市正	○	豊中
83	159	文禄3、9、23	撰津	豊島	熊野田	豊中	片桐市正	13	大阪大学 豊中
84	160	文禄3、9	撰津	豊島	神田	池田	片桐市正		池田
85	161	文禄3、9	撰津	豊島	畑	池田	浅野弾正	○	池田
86	162	文禄3、9	撰津	大田	吹田	吹田	宮木藤左衛門	22	早田家 吹田
87	163	文禄3、10	撰津	大田	奈良	茨木	八嶋久兵衛	○	松本家 写真 茨木
88	164	文禄3	撰津	大田	下穂積	茨木	舟越三郎四郎		延宝検地帳 茨木
89	165	文禄3、10	撰津	大田	茨木	茨木	浅野弾正	○	西田家 茨木
90	166	文禄3、10	撰津	大田	耳原	茨木	浅野弾正	28	関西大図書館 茨木
91	167	文禄3、9	撰津	大田	福井	茨木	浅野弾正		真福寺寺中高帳 茨木
92	168	文禄3、9	撰津	大田	福久庄	茨木	木下与右衛門	○	鳥羽区有 茨木
93	169	文禄3	撰津	大田	粟生(岩坂)	茨木	速水甲斐守		茨木
94	170	文禄3、9	撰津	大田	佐保	茨木	木下与右衛門延重	○	茨木
95	171	文禄3、9	撰津	大田	鮎川	茨木	舟越五郎右衛門	25	井上正紀文書 茨木
96	172	文禄3、9、27	撰津	大田	十一	茨木	片桐市正		馬場村本中村家 茨木
97	173	文禄3、9	撰津	大田	倍賀	茨木	舟越五郎右衛門	26	森脇元宏家 茨木
98	174	文禄3	撰津	大田	道祖本	茨木		○	茨木
99	175	文禄3	撰津	大田	二階堂	茨木		○	茨木
100	176	文禄3	撰津	大田	鳥飼	撰津	木下与右衛門		撰津
101	177	文禄3、9、26	撰津	大田	庄屋	撰津	八嶋久兵衛	24	表紙写真 撰津
102	178	文禄3、10、18	撰津	大田	味舌下	撰津	八嶋久兵衛	23	表紙写真 撰津
103	179	文禄3、11、16	撰津	芥川	土室	高槻	速水甲斐守	21	吉田家 高槻
104	180	文禄3、11、6	撰津	芥川	郡家	高槻	速水甲斐守	○	高槻
105	181	文禄3、11、1	撰津	芥川	服部	高槻	速水甲斐守	○	高槻
106	182	文禄3、10	撰津	芥川	富田	高槻	浅野弾正	20	高槻市役所 高槻
107	183	文禄3、10、吉	撰津	芥川	唐崎	高槻	舟越五郎右衛門	○	高槻
108	184	文禄3、10、吉	撰津	芥川	柱本	高槻	舟越五郎右衛門	19	葉間家 高槻
109	185	文禄3、10、28	撰津	芥川	靈仙寺	高槻	速水甲斐守	○	高槻
110	186	文禄3、10、10	撰津	芥川	真上	高槻	片桐市正	○	高槻
111	187	文禄3、10、3	撰津	芥川	天川	高槻	石川久五郎	17	森田家 高槻
112	188	文禄3、10	撰津	芥川	東天川	高槻	欠	18	森田家 高槻
113	189	文禄3、9	撰津	芥川	高浜	島本	秋野治部卿	○	島本
114	190	文禄3、9、23	撰津	川辺	木器	三田	石川久五郎	49	木器区有 三田
115	191	文禄3、9	撰津	有馬	松山庄山田	三田	石川久五郎	48	福男氏所蔵 三田
116	192	文禄3	撰津	有馬	三田	三田	石川久五郎		三田藩領禄高帳 三田
117	193	文禄3	撰津	有馬	寺村	三田	石川久五郎		三田藩領禄高帳 三田
118	194	文禄3	撰津	有馬	四手原	三田	木下与右衛門		三田藩領禄高帳 三田
119	195	文禄3	撰津	有馬	尼寺	三田	木下与右衛門		三田藩領禄高帳 三田
120	196	文禄3	撰津	有馬	小野	三田	木下与右衛門		三田藩領禄高帳 三田
121	197	文禄3	撰津	有馬	乙原	三田	木下与右衛門		三田藩領禄高帳 三田
122	198	文禄3	撰津	有馬	母子	三田	木下与右衛門		三田藩領禄高帳 三田
123	199	文禄3	撰津	有馬	上青野	三田	木下与右衛門		三田藩領禄高帳 三田
124	200	文禄3	撰津	有馬	下青野	三田	木下与右衛門		三田藩領禄高帳 三田
125	201	文禄3	撰津	有馬	東末	三田	木下与右衛門		三田藩領禄高帳 三田
126	202	文禄3	撰津	有馬	西末	三田	木下与右衛門		三田藩領禄高帳 三田
127	203	文禄3	撰津	有馬	東山	三田	川村久馬		三田藩領禄高帳 三田
128	204	文禄3	撰津	有馬	井草	三田	川村久馬		三田藩領禄高帳 三田
129	205	文禄3	撰津	有馬	西安	三田	川村久馬		三田藩領禄高帳 三田
130	206	文禄3	撰津	有馬	東向	三田	川村久馬		三田藩領禄高帳 三田
131	207	文禄3	撰津	有馬	須磨田	三田	川村久馬		三田藩領禄高帳 三田
132	208	文禄3	撰津	有馬	大音所	三田	川村久馬		三田藩領禄高帳 三田
133	209	文禄3	撰津	有馬	幡尻	三田	川村久馬		三田藩領禄高帳 三田
134	210	文禄3	撰津	有馬	岩倉	三田	川村久馬		三田藩領禄高帳 三田
135	211	文禄3	撰津	有馬	曲	三田	川村久馬		三田藩領禄高帳 三田
136	212	文禄3	撰津	有馬	波田	三田	川村久馬		三田藩領禄高帳 三田
137	213	文禄3	撰津	有馬	広野	三田	木下与右衛門		三田藩領禄高帳 三田
138	214	文禄3	撰津	有馬	井沢	三田	木下与右衛門		三田藩領禄高帳 三田
139	215	文禄3	撰津	有馬	加茂	三田	木下与右衛門		関西学院大学 三田
140	216	文禄3	撰津	有馬	東野上	三田	石川久五郎	○	三田藩領禄高帳 三田
141	217	文禄3	撰津	有馬	福嶋	三田	石川久五郎		三田藩領禄高帳 三田
142	218	文禄3	撰津	有馬	大原	三田	石川久五郎		三田藩領禄高帳 三田

番号	年月	国	郡	村名	現地名	奉行人	現存	史料(所蔵)	出典	
143	219	文禄3	摂津	有馬	川除	三田	石川久五郎		三田藩領禄高帳	三田
144	220	文禄3	摂津	有馬	三輪	三田	石川久五郎		三田藩領禄高帳	三田
145	221	文禄3	摂津	有馬	深田	三田	石川久五郎		三田藩領禄高帳	三田
146	222	文禄3	摂津	有馬	貴志	三田	石川久五郎		三田藩領禄高帳	三田
147	223	文禄3	摂津	有馬	下内神	三田	桑原次右衛門		三田藩領禄高帳	三田
148	224	文禄3	摂津	有馬	沢谷	三田	桑原次右衛門		三田藩領禄高帳	三田
149	225	文禄3	摂津	有馬	上内神	三田	桑原次右衛門		三田藩領禄高帳	三田
150	226	文禄3	摂津	有馬	小屋寺	三田	桑原次右衛門		三田藩領禄高帳	三田
151	227	文禄3	摂津	有馬	市原	神戸兵庫	桑原次右衛門		三田藩領禄高帳	三田
152	228	文禄3	摂津	有馬	麩	神戸兵庫	桑原次右衛門		三田藩領禄高帳	三田
153	229	文禄3	摂津	有馬	日西原	神戸兵庫	桑原次右衛門		三田藩領禄高帳	三田
154	230	文禄3	摂津	有馬	上大沢	神戸兵庫	桑原次右衛門		三田藩領禄高帳	三田
155	231	文禄3	摂津	有馬	深谷	神戸北	宮木藤左衛門		三田藩領禄高帳	三田
156	232	文禄3	摂津	有馬	屏風	神戸北	宮木藤左衛門		三田藩領禄高帳	三田
157	233	文禄3	摂津	有馬	付物	神戸北	宮木藤左衛門		三田藩領禄高帳	三田
158	234	文禄3	摂津	川辺	波豆川	三田	石川久五郎		麻田藩村高覚	三田
159	235	文禄3	摂津	川辺	槻瀬	三田	石川久五郎		麻田藩村高覚	三田
160	236	文禄3	摂津	川辺	高平	三田	石川久五郎		麻田藩村高覚	三田
161	237	文禄3	摂津	川辺	差組	猪名川	桑原治右衛門貞也			猪名川
162	238	文禄3	摂津	川辺	下肝川	猪名川	桑原治右衛門貞也			猪名川
163	239	文禄3	摂津	川辺	上野	猪名川	速水甲斐守			猪名川
164	240	文禄3	摂津	川辺	紫合	猪名川	速水甲斐守			猪名川
165	241	文禄3	摂津	川辺	下原	猪名川	速水甲斐守			猪名川
166	242	文禄3	摂津	川辺	下阿古谷	猪名川	舟越五郎右衛門景直			猪名川
167	243	文禄3	摂津	川辺	上阿古谷	猪名川	舟越五郎右衛門景直			猪名川
168	244	文禄3、10	摂津	川辺	木津	猪名川	舟越五郎右衛門景直			猪名川
169	245	文禄3、9、21	摂津	川辺	槻並	猪名川	舟越五郎右衛門景直	53		猪名川
170	246	文禄3	摂津	川辺	木間生	猪名川	舟越五郎右衛門景直	52		猪名川
171	247	文禄3、10	摂津	川辺	久代	川西	舟越五郎右衛門景直			川西
172	248	文禄3	摂津	川辺	加茂	川西	舟越五郎右衛門景直			川西
173	249	文禄3	摂津	川辺	寺畑	川西	舟越五郎右衛門景直			川西
174	250	文禄3、9、吉	摂津	川辺	栄根(坂根村)	川西	舟越五郎右衛門景直	42		川西
175	251	文禄3	摂津	川辺	小花	川西	舟越五郎右衛門景直			川西
176	252	文禄3	摂津	川辺	小戸	川西	舟越五郎右衛門景直			川西
177	253	文禄3	摂津	川辺	火打	川西	舟越五郎右衛門景直			川西
178	254	文禄3	摂津	川辺	荻野	川西	舟越五郎右衛門景直			川西
179	255	文禄3、10、吉	摂津	川辺	出在家	川西	舟越五郎右衛門景直	41		川西
180	256	文禄3	摂津	川辺	滝山	川西	舟越五郎右衛門景直			川西
181	257	文禄3	摂津	川辺	満願寺	川西	舟越五郎右衛門景直			川西
182	258	文禄3	摂津	川辺	赤松	川西	桑原治右衛門貞也			川西
183	259	文禄3	摂津	川辺	石道	川西	桑原治右衛門貞也			川西
184	260	文禄3	摂津	川辺	多田院	川西	一柳越後・山口玄蕃	○		川西
185	261	文禄3	摂津	川辺	東多田	川西	舟越五郎右衛門景直			川西
186	262	文禄3	摂津	川辺	平野	川西	舟越五郎右衛門景直			川西
187	263	文禄3、9、19	摂津	川辺	西畦野	川西	速水甲斐守守久	43		川西
188	264	文禄3	摂津	川辺	東畦野	川西	桑原治右衛門貞也			川西
189	265	文禄3	摂津	川辺	見野	川西	桑原治右衛門貞也			川西
190	266	文禄3	摂津	川辺	一庫	川西	速水甲斐守守久			川西
191	267	文禄3	摂津	川辺	黒川	川西	速水甲斐守守久			川西
192	268	文禄3、9	摂津	川辺	中(中筋)	宝塚	浅野弾正	46		宝塚
193	269	文禄3、10、5	摂津	川辺	中山寺	宝塚	浅野弾正	45		宝塚
194	270	文禄3、9、吉	摂津	川辺	山本	宝塚	舟越五郎右衛門	47		宝塚
195	271	文禄3	摂津	川辺	切畑村	宝塚	石川久五郎			宝塚
196	272	文禄3	摂津	川辺	玉瀬村	宝塚	石川久五郎			宝塚
197	273	文禄3	摂津	川辺	境野村	宝塚	石川久五郎			宝塚
198	274	文禄3	摂津	川辺	波豆村	宝塚	石川久五郎			宝塚
199	275	文禄3	摂津	川辺	大原野村	宝塚	石川久五郎			宝塚
200	276	文禄3	摂津	川辺	長谷村	宝塚	石川久五郎			宝塚
201	277	文禄3、9、23	摂津	川辺	佐曾利村	宝塚	石川久五郎	44		宝塚
202	278	文禄3、9	摂津	八部	西尻池	神戸	浅野弾正	33		神戸
203	279	文禄3	摂津	八部	多井畑	神戸	秋野治部卿	○		神戸
204	280	文禄3	摂津	八部	白川	神戸	八嶋久兵衛	50		神戸
205	281	文禄3、9、12	摂津	八部	藍名	神戸	長束正吉	○		神戸
206	282	文禄3	摂津	八部	中村	神戸	長束正吉	○		神戸
207	283	文禄3	摂津	八部	小部	神戸	片桐且元	○		神戸
208	284	文禄3、9、11	摂津	八部	谷上	神戸	片桐且元	51	関西学院史学8	神戸
209	285	文禄3	摂津	八部	西須磨村	神戸須磨				西宮
210	286	文禄3	摂津	八部	大手村	神戸須磨		○		西宮
211	287	文禄3	摂津	八部	奥平野村	神戸兵庫				西宮
212	288	文禄3	摂津	八部	花熊村	神戸中央				西宮
213	289	文禄3	摂津	菟原	味泥村ミドロ	神戸灘				西宮
214	290	文禄3	摂津	菟原	五毛村	神戸灘				西宮
215	291	文禄3	摂津	菟原	御影村	神戸東灘				西宮

番号	年月	国	郡	村名	現地名	奉行人	現存	史料(所蔵)	出典
216	292	文禄3	摂津	菟原	中野村	神戸東灘			西宮
217	293	文禄3	摂津	川辺	御願塚	伊丹	○		伊丹
218	294	文禄3	摂津	川辺	萩野	伊丹			伊丹
219	295	文禄3、9、晦	摂津	川辺	山田	伊丹	34		伊丹
220	296	文禄3	摂津	川辺	寺本	伊丹			伊丹
221	297	文禄3	摂津	川辺	昆陽	伊丹			伊丹
222	298	文禄3	摂津	川辺	伊丹郷	伊丹			伊丹
223	299	文禄3	摂津	川辺	大鹿	伊丹			伊丹
224	300	文禄3	摂津	川辺	岩屋	伊丹			伊丹
225	301	文禄3	摂津	川辺	中村	伊丹			伊丹
226	302	文禄3	摂津	川辺	小坂田	伊丹			伊丹
227	303	文禄3	摂津	川辺	尾浜村	尼崎			尼崎
228	304	文禄3	摂津	川辺	別所村	尼崎			尼崎
229	305	文禄3	摂津	川辺	西難波村	尼崎			尼崎
230	306	文禄3	摂津	川辺	握ヶ島村	尼崎			尼崎
231	307	文禄3、9	摂津	川辺	額田村	尼崎	37	田中文書	尼崎
232	308	文禄3	摂津	川辺	瀬江村 潮江?	尼崎			尼崎
233	309	文禄3	摂津	川辺	上坂部村	尼崎			尼崎
234	310	文禄3	摂津	川辺	岡院村	尼崎	36		尼崎
235	311	文禄3	摂津	川辺	万多羅寺村	尼崎			尼崎
236	312	文禄3	摂津	川辺	善法寺村	尼崎			尼崎
237	313	文禄3	摂津	川辺	猪名寺村	尼崎			尼崎
238	314	文禄3	摂津	川辺	富田村(トウダ)	尼崎			尼崎
239	315	文禄3、10	摂津	川辺	稚堂村	尼崎	35	門田文書	西宮
240	316	文禄3、10	摂津	川辺	山本村	宝塚			西宮
241	317	文禄3、9	摂津	川辺	米谷村	宝塚			西宮
242	318	文禄3	摂津	川辺	安場村	宝塚			西宮
243	319	文禄3	摂津	武庫	守部村	尼崎	39		尼崎
244	320	文禄3、10	摂津	武庫	浜田村	尼崎	40		西宮
245	321	文禄3	摂津	武庫	東新田村	尼崎			西宮
246	322	文禄3	摂津	武庫	友行村	尼崎	38		西宮
247	323	文禄3	摂津	武庫	常吉村	尼崎			西宮
248	324	文禄3	摂津	武庫	小林村オバヤシ	宝塚			西宮
249	325	文禄3	摂津	有馬	名塩村	西宮			西宮
250	326	文禄3	摂津	有馬	中野村	西宮			西宮
251	327	文禄3	摂津	有馬	上山口村	西宮			西宮
252	328	文禄3	摂津	有馬	下山口村	西宮			西宮
253	329	文禄3	摂津	有馬	名米村	西宮			西宮
254	330	文禄3	摂津	有馬	生瀬村	西宮			西宮
255	331	文禄3	摂津	有馬	船坂村	西宮			西宮
1	332	文禄3	河内	丹北	東瓜破	平野		延宝検地帳	大阪
2	333	文禄3	河内	丹北	六反	平野	○	小枝家	大阪
3	334	文禄3	河内	渋川	四条	生野	○		大阪
4	335	文禄3、12	河内	交野	招提	枚方	67	片岡家	枚方
5	336	文禄3	河内	交野	宇山	枚方	65・66	上山家	枚方
6	337	文禄3	河内	交野	野村	枚方		名寄帳	枚方
7	338	文禄3	河内	交野	甲斐田	枚方		木下与右衛門	枚方
8	339	文禄3	河内	交野	片鉾	枚方		元禄4年明細帳	枚方
9	340	文禄3	河内	茨田	三矢	枚方		元禄4年明細帳	枚方
10	341	文禄3	河内	茨田	出口	枚方		延宝検地帳	枚方
11	342	文禄3	河内	茨田	枚方	枚方		石川久五郎	枚方
12	343	文禄3	河内	茨田	伊加賀	枚方		石川久五郎	枚方
13	344	文禄3	河内	茨田	泥町	枚方		速水甲斐守	枚方
14	345	文禄3	河内	茨田	茄子作	枚方		速水甲斐守	枚方
15	346	文禄3、11	河内	交野	牧ノ内川島	枚方	○	森家	枚方
16	347	文禄3	河内	茨田	塩野	枚方		片桐市正	枚方
17	348	文禄3	河内	茨田	蕪島	門真		片桐市正	枚方
18	349	文禄3	河内	茨田	桑才	門真		片桐市正	枚方
19	350	文禄3	河内	茨田	門真一番	門真		片桐市正	枚方
20	351	文禄3	河内	茨田	門真二番	門真		片桐市正	枚方
21	352	文禄3	河内	茨田	三番	門真		片桐市正	枚方
22	353	文禄3	河内	茨田	四番	門真		片桐市正	枚方
23	354	文禄3、11、10	河内	丹北	富田之内城連寺	松原	59	長谷川家	松原
24	355	文禄3、11、10	河内	丹北	布忍郷之内我堂	松原	60	西川家	松原
25	356	文禄3、11、5	河内	丹北	布忍郷之内更池	松原	64	田中家	松原
26	357	文禄3、11、10	河内	丹北	布忍郷内東田井	松原	61	山田家	松原
27	358	文禄3、11、19	河内	丹北	八上郷河合	松原	62	岡田家	松原
28	359	文禄3、11、10	河内	丹北	松原郷内岡村	松原	64	不明	松原
29	360	文禄3、11、16	河内	丹北	三宅	松原	○	長東正家	松原
30	361	文禄3、11、16	河内	丹北	別所	松原	○	中之島図書館	松原
31	362	文禄3、11、4	河内	丹北	嶋泉	羽曳野	55	吉村家	羽曳野
32	363	文禄3、10	河内	丹南	北野田	堺	54	石田三成	堺
33	364	文禄3	河内	丹南	南島泉	羽曳野			羽曳野

番号	年月	国	郡	村名	現地名	奉行人	現存	史料(所蔵)	出典	
34	365	文禄3	河内	丹南	西川	羽曳野			羽曳野	
35	366	文禄3	河内	丹南	丹下	羽曳野			羽曳野	
36	367	文禄3	河内	丹北	東大塚	羽曳野			羽曳野	
37	368	文禄3	河内	古市	誉田	羽曳野			羽曳野	
38	369	文禄3、11、19	河内	古市	羽曳野		○		羽曳野	
39	370	文禄3、11、4	河内	丹南	郡戸こおづ	羽曳野	○		羽曳野	
40	371	文禄3	河内	古市	駒ヶ谷	羽曳野			羽曳野	
41	372	文禄3	河内	丹南	伊賀	羽曳野			羽曳野	
42	373	文禄3	河内	古市	碓井	羽曳野			羽曳野	
43	374	文禄3	河内	古市	西浦	羽曳野			羽曳野	
44	375	文禄3、11、9	河内	彼方	富田林		56	中野家	富田林	
45	376	文禄3、11、27	河内	錦部	錦郡	富田林	増田・平井弥四郎・丹治新右衛門	57	田中家	富田林
46	377	文禄3、11	河内	錦部	板持	富田林	宮木藤左衛門	58	土井家	富田林
47	378	文禄3	河内	錦部	甘山	富田林			明細帳	富田林
48	379	文禄3	河内	石川	富田林	富田林			明細帳	富田林
49	380	文禄3、11	河内	渋川	竹淵	八尾		76	元和元年写	八尾
50	381	文禄3、11	河内	安宿	玉手	柏原	宮木藤左衛門	75	安田家	柏原
51	382	文禄3、11	河内	交野	星田	交野	木下与右衛門	68		交野
52	383	文禄3	河内	錦部	滝畑	河内長野	増田右衛門		狭山藩明細帳	河内長野
53	384	文禄3	河内	錦部	石見川	河内長野	舟越五郎右衛門		狭山藩明細帳	河内長野
54	385	文禄3	河内	錦部	小深	河内長野	舟越五郎右衛門		狭山藩明細帳	河内長野
55	386	文禄3、11	河内	錦部	河合寺	河内長野	舟越五郎右衛門	71	福田家	河内長野
56	387	文禄3、11、12	河内	錦部	向野	河内長野	増田長盛打口	69	辻野家	河内長野
57	388	文禄3、11、19	河内	錦部	天野山	河内長野	増田長盛打口	72	金剛寺	河内長野
58	389	文禄3、11、10	河内	錦部	原	河内長野	増田長盛打口	70	中尾家	河内長野
59	390	文禄3、10、晦	河内	志紀	道明寺	藤井寺	増田長盛打口	73	道明寺天満宮	藤井寺
60	391	文禄3、10、19	河内	志紀	小山	藤井寺	欠	74		藤井寺
61	392	文禄3、11	河内	茨田	葛原村	寝屋川		○	上堀家	平凡
62	393	文禄3、11	河内	茨田	小高瀬内大枝村	守口	八嶋久兵衛	77	中村家	守口
63	394	文禄3、11、28	河内	茨田	東村	守口	石川久五郎		名寄帳	守口
64	395	文禄3	河内	茨田	守口	守口	片桐市正			守口
65	396	文禄3	河内	茨田	土居	守口	片桐市正			守口
66	397	文禄3	河内	茨田	南寺方	守口	片桐市正			守口
67	398	文禄3	河内	茨田	北寺方	守口	片桐市正			守口
68	399	文禄3	河内	茨田	橋波	守口	八嶋久兵衛		明細帳	守口
69	400	文禄3	河内	茨田	二番	守口	片桐市正		明細帳	守口
70	401	文禄3	河内	茨田	七番	守口	片桐市正			守口
71	402	文禄3	河内	茨田	八番	守口	片桐市正		明細帳	守口
72	403	文禄3	河内	茨田	九番	守口	片桐市正		明細帳	守口
73	404	文禄3	河内	茨田	南十番	守口	片桐市正		明細帳	守口
74	405	文禄3	河内	河内	今米	東大阪	長東次郎兵衛		明細帳	東大阪
75	406	文禄3	河内	河内	芝	東大阪	長東次郎兵衛		明細帳	東大阪
76	407	文禄3	河内	河内	出雲井	東大阪	長東次郎兵衛		明細帳	東大阪
77	408	文禄3	河内	河内	草賀(日下)	東大阪	長東次郎兵衛	○	天理図書館	平凡
78	409	文禄3	河内	河内	横小路村	東大阪		○	山川家	平凡

表の現存欄の数字は表2の番号(刊本に所収されるもの)、○は現存するが刊本になっていないもの。「250」は1反=250歩の検地
【出典】田尻…『田尻町史』歴史編(2006)、熊取…『熊取町史』本文編(2000)、阪南…『阪南町史』上巻(1983)、泉佐野…『新修泉佐野市史』第二巻(2009)、榎井…『榎井部落の歴史』、貝塚…『貝塚市史』第一巻通史(1955)、高石…『高石市史』第一巻本文編(1989)、和泉…『和泉市史』第二巻(1965)、泉大津…『泉大津市史』第一巻下本文編Ⅱ(1999)、堺…『堺市史』続編第一巻(1971)、大阪…『新修大阪市史』第三巻(1989)、藤井寺…『藤井寺市史』第二巻通史編二近世(2002)、羽曳野…『羽曳野市史』第二巻本文編2(1998)、松原…『松原市史』第一巻(1985)、河内長野…『河内長野市史』第二巻本文編近世(1998)、富田林…『富田林市史』第二巻本文編Ⅱ(1998)、柏原…『柏原市史』第三巻本文編Ⅱ(1972)、八尾…『八尾市史』前近代本文編(1988)、東大阪…『東大阪府史資料』第六集河内国内郡村明細帳(1976)、交野…『交野市史』交野町略史復刻編(1981)、守口…『守口市文化財調査報告』第六冊古文書検地編(1990)、枚方…『枚方市史』第三巻(1977)、島本…『島本町史』本文編(1967)、摂津…『摂津市史』(1977)、茨木…『茨木市史』(1969)、吹田…『吹田市史』第二巻、高槻…『高槻市史』第一巻本文編1(1977)、豊中…『豊中市史』第二巻(1959)、池田…『新修池田市史』第二巻近世編(1999)、箕面市…『箕面市史』第二巻(1966)、能勢…『能勢町史』第一巻(2001)、猪名川…『猪名川町史』第一巻(1987)、川西…『川西市史』第二巻(1976)、三田…『三田市史』第四巻(2006)、伊丹…『伊丹市史』第二巻(1969)、尼崎…『尼崎市史』第二巻(1968)、西宮…『西宮市史』第二巻(1960)、宝塚…『宝塚市史』第二巻(1976)、神戸…『新修神戸市史』歴史編Ⅲ近世(1994)、平凡…『日本歴史地名大系28大阪府の地名』平凡社(1986)

C線上のリアVSオンラインの国のリア

国語科 柳本 博

本来ならば、生身で行う演劇。2020年夏の全国高校演劇大会も高知県で行われる予定が、オンライン開催となった。本校の関係でも、春4月の俳優座劇場も新入生歓迎会も、7月・中学私学大会もすべて中止となり、秋10月の地区大会はようやく上演。ただしマスク着用の非公開（審査員だけの無観客）、文化祭も同じ作品をアレンジして動画のオンライン配信となった。12月、冬私学こそは、と意気込み、二年目の十文字高校での東京私立中高演劇発表会をもうろんだわけだが、これも秋口に都内の感染状況が悪化し、風前の灯となった。そこで、実行委員長として、この大会も配信によって上演する決心をした。題して「オンライン私学大会」である。

第一章 大会まで

●11月24日時点での実行委員長としての私の文書

東京私立中学高等学校演劇発表会 開催方法について

日頃の私どもに対する甚大なるご協力に感謝申し上げます。

さて、2020年12月末に予定しております「東京私立中学高等学校演劇発表会（日韓友好）OSMOドラマフェスタ」は、新型コロナウイルスに関する現今の感染状況悪化ならびに今後本格的な冬を迎えるにあたり更なる困難が予想されるという社会情勢も概観し熟考したうえで、会場校・関係諸団体と協議し、実行委員会として通常の開催は難しいという結論に達しました。よって、今回の通常開催は断念し、リモートによる「オンライン開催」とさせていただきます。関係各位のご了解を賜りたくお願い申し上げます。

「オンライン開催」は今夏の高校演劇全国大会でも行われている方式ではございますが、開催に関してはなにごん知識も技能も乏しく、新たな問題も山積しております。本来、演劇はその場で生身の人間が演じるものであります。それでも、60年以上続く本大会の継続を、年々移り変わる生徒諸君の過去から未来へのバトンをつなぐべく模索してまいった結果、今回の結論に至った次第です。急な決定で戸惑われる方も多いかと存じますが、変わらぬご協力とご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

今回のオンライン大会形式(案)

- ① 今回の大会にメ切までに参加を申し込んできた約20校にはすべて参加を呼びかける(抽選などの選別はしない)。
- ② 本来、大会にて上演しようと考えていたものをインターネット上に期日限定にてアップし、観覧できるものとする。
- ③ よって、45分以内の上演を期日までに提出してもらい、数日(1週間程度)の日程を決めてウェブ上に公開する。場所は上演の模様であれば当該校でも別施設においてでもよく、各校に委ねる。カメラの台数・撮影方法などは自由。とにかく今回上演しようと思っていた演劇部公演を撮影したものを提出してもらおう。
- ④ すでに11月末を迎えている。準備の都合もあるだろうから提出メ切は年明けとしたい。集約して1月中旬に公開することで開催としたい。理由としては、今後の感染状況悪化により、期末試験後、冬休みの部活動が制限される学校が出てくることも考えられるためである。年末年始の社会情勢も現時点では読めない。従来の上演(12月末)までには撮影を済ませてもらいたいと考えてはいるが、多少の猶予も必要となろう。ただし、大会としての公開は1月中旬にはすべて終えたい。
- ⑤ オンラインの方法(アップの仕方・観覧方法など)については、ノウハウを知る実行委員がウェブ上で指導を行う。
- ⑥ 審査員には既に従来どおりについてはお願いを済ませている。別途改めてお願いをして講評もコメントの形で頂戴し、合議により例年の各賞も決めて表彰する(表彰の有無・形式などは未定)。台本はこうなったためデジタルで確認を行いたいが、審査員によつてはプリントアウトしたものを求めてくるかもしれないので提出いただくことになる可能性が高い。
- ⑦ 生徒同士もネット上という形式ではあるものの交流を深めるべく感想コメントを広く語れるような場をネット上に設けたい。ただし、期間限定し、発言には責任を持ってもらう。本来の趣旨とは異なるため、本年は生徒審査員賞は設けない。
- ⑧ 著作権(ならびに音楽著作権)には従来どおり遵守し、肖像権も含め、その取り扱いには十分に注意する。
- ⑨ 限定された関係者(IDを知る者)のみが観覧できるものとするが、一度映像として流出してしまうと困難な問題が生じかねないため、取り扱いには十分に注意する。著作権・肖像権について実行委員会で全面的に責任は持ちかねる。この点については提出する学校にはご了承いただく。
- ⑩ 上演時間は厳守してもらうものの、最後の5分でアピールや役者紹介・学校紹介などを入れてもよいこととする。この点は映像という機能を存分に活かし、実際の交流ができない点を補いたい。
- ⑪ 従来のパフレットはデジタルのものにしたい。
- ⑫ 参加費については金額を替える可能性はあるものの(従来より少額とするか)、提出していただくことになる。審査員料や照明はすでに発注しておりプラン代がかかる。写真はキャンセルとさせていただく。
- ⑬ 指定した期日にzoomなどの機能で全校が一堂に会する開会式・閉会式を開くことも考えたい。

以上、ご意見ご質問をお寄せください。よりよい方法を模索中です。

紆余曲折を経て下記のようなになる。

●12月5日時点の文書

第62回東京私立中学高等学校演劇発表会

(TOKYO ドラマフェスタ)

2020年度オンライン開催について(第5案)

①【趣旨】

60回以上の歴史を持つ今大会は、今年は残念ながらリアルな大会ではないが、オンラインでつながる。新型コロナウイルスに負けず、演劇の炎を燃やす東京私学演劇部の力を結集する。

②【方法】

本来、大会にて上演しようと考えていた作品をインターネット上に下記の期日限定にてアップし、観覧できるものとする。

③ 45分以内の上演を期日までに撮影してもらい下記に提出。日程を決めてウェブ上に公開する。場所は上演の模様であれば当該校内でも別施設においてもよく、各校に委ねる。カメラの台数・撮影方法なども自由。とにかく今回上演しようと思っていた演劇部公演を撮影したものを提出してもらおう。

準備の都合もあるため提出メ切りは年明け1月8日(金)とする。集約して1月12日(火)から19日(火)まで観覧。12日(火)開会式、20日(水)閉会式。以上の日程で公開することで開催したい。理由

④ 生徒同士もネット上という形式ではあるものの交流を深めるべく感想コメントを広く語れるような場をネット上に設ける。こちらにも川合先生の文書を参照のこと。ただし、期間は限定し、発言には責任を持ってもらう。本来の趣旨とは異なるため、本年のみ生徒審査員賞は設けない。

⑦

著作権ならびに音楽著作権は従来どおり遵守し、肖像権も含め、

としては、今後の感染状況悪化により、期末試験後、冬休みの部活動が制限される学校が出てくることも考えられるためである。年末年始の社会情勢も現時点では読めない。従来の上演(12月末)までには撮影を済ませてもらいたいと考えてはいるが、多少の猶予も必要となろう。ただし、大会としての公開は上記日程ですべて終えたい。提出は別添のファイルにあるサイトまで。

④ オンラインの方法(アップの仕方・観覧方法など)については、ノウハウを知る実行委員がウェブ上で指導を行う。別添(関東第一・川合先生)からの文書「TOKYOドラマフェスタに向けて(pdf)」を参照のこと。

⑤ 審査員(4名の予定)には既に従来どおりについてはお願いを済ませている。別途改めてお願いをして講評もコメントの形で頂戴し、合議により例年の各賞も決めて表彰する(米本一夫賞Ⅱ最優秀賞、東京私立中高協会賞、特別賞5校、その他は優秀賞となる。送付の都合があるので今年度は優秀賞のみ小さい盾は割愛する)。

⑥ 台本はこうなつたためデジタルで確認を行いたい、審査員がプリントアウトしたものを求めてくる可能性が高いためご提出いただく。

⑦ 生徒同士もネット上という形式ではあるものの交流を深めるべく感想コメントを広く語れるような場をネット上に設ける。こちらにも川合先生の文書を参照のこと。ただし、期間は限定し、発言には責任を持ってもらう。本来の趣旨とは異なるため、本年のみ生徒審査員賞は設けない。

⑧ 著作権ならびに音楽著作権は従来どおり遵守し、肖像権も含め、

その取り扱いには十分に注意する。許諾のないものはアップできない。

- ⑧ 限定された関係者（IDを知る者）のみが観覧できるものとするが、一度映像として流出してしまうと困難な問題が生じかねないため、映像の取り扱いには十分に注意する。著作権・音楽著作権・肖像権について実行委員会が全面的に責任は持ちかねる。この点については提出する学校にはご了承ください。脚本の著作権についても12月19日までに確実にご承りいただき、ご提示願いたい（メールでも可）。劇件においても、既成の楽曲を使うのは遠慮いただき著作権フリー素材の楽曲のみ使用とすることを原則とする。例外をどう認めるか詳細について、劇中で歌を歌う場合はどうか、という点は現在JASRACに確認中。確定次第、追って伝達する。
- ⑨ 45分の上演時間は厳守してもらい、加えてプラス5分（最後）でアピールや役者紹介・学校紹介などを入れてもよいこととする。この点は映像という機能を存分に活かし、実際の交流ができない点を補いたい。
- ⑩ 従来のパンフレットはデジタルのものにしたい。後藤先生への送付に加え、各校の上映の扉（川合先生の文書「TOKYOドラマフェスタに向けて(pdf)」）にも入力する。全体は一望できるものを集約する。
- ⑪ 参加費は従来二万円だったが今回は特別に五千円とする。審査員料のほかに各種準備（郵送・賞品その他）や照明はすでに発注済みでありプラン代がかかる。写真はキャンセルとさせていただきます。

⑫ その他の詳細は当初の大会申込書に準じるものとする。不十分な案内になっている部分があるかもしれないが、このような非常時における初めての試みだからこそ、どうかご協力願いたい。

⑬ 【日程】 1月8日(金)提出×切。

1月12日(火)から19日(火)まで観覧。

12日(火)16時半ごろ 開会式、20日(水)16時半ごろ 閉会式にて発表、表彰。

⑭ 参加校…(略) 21校のうち、趣旨に賛同する学校

●参加のために必要なもの

12月10日×切 出場の可否について柳本までメールする。質問事項も同様に。

申込用紙 前回提出のものから変更がなければそのまま。

作品名変更、アピール文などは19日までにサイトならびに後藤先生にも。

19日×切 ①出場費 五千円 銀行振込

(今回は非常事態のため、既存の柳本宛銀行口座に緊急避難的に振り込みをお願いします。大会後、全体に会計報告を行う)

⑮ 台本 4冊 表紙に学校名、作者名、作品名を明記すること。ホチキスまたは紐できちんと製本。12月19日の×切までに 下記に

送付(審査員に送付するので例外は認められない。正午必着)

〒112-0014 文京区関口3-8-1 獨協高校 柳本博宛

1月8日 映像提出×切

【日程】

翌週、早い時期までに賞状、トロフィー送付。昨年受賞の京華学園と日大二高にはそのままお持ちいただいておいて、該当校に送っていただく（金銭的負担は実行委員会）。

今後の感染状況、社会情勢により、変更される可能性はある。その場合は、メールの一斉送信にて伝達する。

審査については

【審査員講師】 敬称略

菊池 准（演劇集団JOKO・演出家）、オーハシヨースケ（TAICHI KIKAKU 主宰）、

岩田廣明（舞台監督）、浅野鼓由希（北区AKT STAGE・女優）

【審査方法について】

申し込みの全校は、芝居45分プラス役者紹介（または学校か部活紹介）5分の制限時間50分で上演。そのもようを映像としてアップしてあります。固定カメラもあれば、映像作品のようになっているところもあり、比較は難しいかもしれませんが、演劇作品にカメラワークを持ち込むのはどうかという意見もありましたが、映像を固定単独カメラで見るのはなかなか苦痛になる場合もあるため、撮影方法は自由としています。マスク着用のまま上演している学校もあります。場所も稽古場のところもあれば講堂や劇場のように整備されたところもあります。とにかく、通常の上演が例年どおりの（普通の大会の学校公演）

で行われているであろうことを想定してご判断ください。

十点法の採点法で、全校つけていただき集計します。10（最上位）↓1（最下位）の順でお願いします。9↓2まではどの点を何校につけてもいいですが、10と1はそれぞれ必ず1校ずつつけていただきます。これはできるかぎり差をつけるための措置です。集計して得点の上から順に授賞作を決めます。

最優秀賞（米本一男賞） 一校

東京私立中学高等学校協会賞 一校

特別賞 五校（〇〇の面で、とコメントをつける）

残りの学校にはすべて、一律参加賞として「優秀賞」を授与します。

同点の場合や、コメント内容などはまた相談します。

講評は全校に50～100字程度ずついただき、後日、まとめて全校に流します。

オンライン 上映期間 2021年1月12日～19日

一緒に添付しました文書のサイトの部分をクリックしていただくと、デジタルパンフレットならびに上演の様子がご覧いただけます。ただし、まだ試行段階であり1月8日がメ切で、12日からは正式なものとなります。

審査 この用紙を19日までにご返送ください。アドレス

gekisa9@yahoo.co.jp

発表 1月20日の閉会式にて。

●12月8日付けで同じ顧問の長谷川先生と連名で保護者には連絡した。

さて、残念ながら連絡をさせていただきます。

先日、ご案内しました年末の私学大会（東京私立中学高校演劇発表会）TOKYOドラマフェスタですが、その後の感染状況の広がり会場校から懸念が表明され、「オンライン開催」となることが決定しました。よって、12月27、28日の大会はなくなりました。生徒諸君は文化祭もオンラインのための動画を懸命に作り、成果をあげてくれました。次の大会も同様の形式で中高合同の次回作「リア獣VSリア王」を校内で上演して撮影することになります。それでも、オンラインながら出場各校と協力して大会を盛り上げてもらいたいと切に願っております。

つきましては、冬休み前後の日程も新しくさせていただくことになります。もう数日で詳細を決めますので決まりましたらご連絡いたします。新しいオンライン日程は1月中旬の1週間ほどの観覧になるかと存じます。こちらは保護者の皆様も他校の公演も含めご覧いただくと存じます。

現状では、冬休み中の練習も制限されることになりかねません。先行きの見えない不安な昨今ではありますが、文化祭のための奮闘努力を今後も継続させ、オンラインの動画撮影、ならびに次なる公演である春休みの「俳優座劇場ハイスクールドラマスペシャル」に向けて頑

張ってもらいたいと思っております。保護者の皆様におかれましては、今後ともご協力のほど何とぞよろしくお願い申し上げます。

そして、各方面ならびに実行委員の協力により、開催にこぎつける。3校が出場辞退となったものの、18校という当初の12月末の二日開催でも制限オーバー気味の出場校が出揃った（その後、当初の会場校であった十文字が感染状況により学校から出場を止められてしまい、17校となった）。

●ごあいさつ

第62回東京私立中学高等学校演劇発表会

(TOKYOドラマフェスタ VOL.12)

実行委員長 柳本 博（獨協中学・高等学校）

60年以上の歴史を持つ本大会は、今年はオンラインでつながります。2019年の大会直後、次年度のこの事態を誰が想像したことでしょう。ところが、いまや口にするまでもない非日常。夏の中学大会は中止となり、冬私学も危ぶまれました。そんな中、主催の東京私立中学高等学校協会をはじめ、多くの実行委員、照明・審査員講師などの関係各位、そして何より、参加を表明してくれた出場校の熱意のおかげで、大会を継続することができます。演劇は「いま、ここ」の空間を共有するのがベスト。しかし、できうるかぎりネクスト・ベストとなるべく、各校は工夫を凝らしているはずです。ネット上での鑑賞は「愛の不時着」には負けるかもしれませんが、コロナウイルス

には負けません。演劇に心の炎を燃やす都内私学演劇部の力を結集しましょう。どうか温かい目で見てやってください。

第二章 シェイクスピア・シリーズの最後

これまで勉強会のつもりで毎年一本シェイクスピアを上演してきました。昨年の自校パンフにある文書から。

獨協中学・高等学校シェイクスピア・シリーズ第五輪弾（註Ⅱ第五弾と翌年の五輪をかけた、いまとなつては虚しいかぎり。2020年を前にはしゃいでいたのだ）をお届けします！ いつも演劇のことに考えてないのに、じつは演劇のことをまったく知らないことに気づいたの。そこで、少し勉強を始めちゃった。グループに分かれて、同じ戯曲の（ほぼ）同じシーンをどのように料理・演出するかの勝負。いつもウチが夏合宿でやっている方式よ。

これまでの勉強

第1弾（2015年）「ベニスの使用人——ベニスって何？」（作・

演出 獨協太郎）

第2弾（2016年）「君の縄。シンロミオ」（作・演出 複写太郎）

第3弾（2017年）「日本ハムレット——メジャーに行くべきか行かざるべきか、それが！」（作・演出 小谷翔平）

第4弾（2018年）「マクを下ろすな！——平成最後の二刀流マクベス半端ないって言ってんじゃねーよ、そだねー、もぐもぐ」

（作・演出 祝大阪万博なおみ）

第5弾（2019年）「白か黒か？オセローだよ！全員集合（ワン

チーム）」（作・演出 祝東京五輪まゆみ）

年末の風物詩、と勝手に呼んでいたため、その年の「流行・風俗」を惜しげもなくつぎ込んできた。いかにも寒気するタイトル群。ほとんどが瞬間流行的な趣向のため、現在から近過去を振り返ると、恥ずかしさにいたたまれなくなる。ただ、毎年喜んでもらってきた。京華女子高を会場としてきた2018年までは、ものすごい数の観客が押し寄せてきていたものだった。講堂内には容易には入れず、通路をつぶし、ありつただけの椅子を並べた。最後の年など、絶対に入場できない人が出るということで、わざわざ椅子でなくマット敷きにして、敷敷をつくり、観客をさばいたものだった。

そして今年は、四大悲劇のラスト「リア王」である。前年、講評のとき、当時の近藤部長が「来年は」の声に応えた作品である。

デジタルパンフにはこう書いた。

さようなら。誰にお願いされたわけでもなく始めたものですが、長年やってきたシェイクスピア・シリーズは今年で打ち止めにしたいと考えます。でもこの間、僕たちは「ベニスの商人」がHな売り物ではなく、「ロミオとジュリエット」が僕たちには無理で、「ハムレット」が日本ハムとは無関係で、「マクベス」がヘビメタバンドではなく、「オセロー」がゲームでないことも知ることができました。有難うご

ございました。来年からはチェーホフ・シリーズをお届けします。

また、幻となった当日パンフの原稿はこうなる。

部長の言葉

人の影響ってすごいですねえ。いやまあ私事なのですが、とある人に「○○○っていうゲームやってるんですよ」って言われてからその原作を見てアニメに興味をもっているんなものを見ました。え？

どうでもいい？いや、もし私がああ超有名タレントだったら……どうします？肩書きで判断する我々が一番の鬼なのかもしれませんね。

(鈴木 晴斗)

作者の言葉

我が鈴木班は真面目にやる……でも思ったか。いつまでも大橋班のトカゲの尻尾などやるわけにはいかない。そんな思いを持ち鈴木班は巣立ちました。この鈴木班も大橋班に負けず、劣らず、笑いあり、涙あり、皆さんご存じ女装ありの豪華な仕様になっています。テンションだけは常に強火です。引かずに見てください。

(鈴木藩幹部補佐 大西 和弥)

我が高一の日記のメモ曰く、意味の無い事は進んでやるが、味気のない事はやるに値しない。獨協演劇のシェイクスピアシリーズなるものは粉うことなく前者である。この台本が固まったのが高二の十二月、共学ならばオナゴドモと戯れる繁殖期だがパソコンと私が戯れて作ったものは大橋藩の台本であった。

(大橋藩藩主 大橋 建斗)

第二章 そして戯曲

日韓友好TOKYOドラマフェスタ

獨協中学・高等学校2020上演台本

リア獣VSリア王

2020・12・15

第7稿

いのち
祈和久珍おおい

登場人物

キャスト

リア王&炭治郎 鈴木 晴斗

リーガン 是枝 大

ゴネリル 大西 和弥

コーデイリア 吉井 隆

オールバニ 喜早 健太

エドガー 木村 一輝

大木喬建斗ハク伯 大橋 建斗

王冠&グロスター伯&善逸 松本 錬

エドガー&コーデイリア 吉村 嶺

リーガン&エドマンド 北村 直一

リア王&ジョーカー 柏倉 紘

ブルーライト 井上 考太郎
オールバニ 西谷 宗之

スタッフ

作・演出 折和久珍おおい

音響 清水 晶友

音効 会津 良幸

特別協力

川下 大成 石崎 哲士

黒佐 佳生 大野 暁春

石本 雄大 坂本 和俊

近藤 陸 澁谷 新生

高木 洋明 波田野 大佑

高橋 開成 小林 蓮

中山 雄暉 塩澤 優希

内田 悠嗣 土屋 龍斗

古田 匠 長谷川 美奈

柳本 博

PROLOGUE

幕開くと、松本と大橋、見事な殺陣。

是枝が介入し、松本の勝利。
歓声。

音楽！

きらびやかに。

いつもの役者紹介。

演出家の晴斗がにこやかな笑顔で登場。

晴斗 (髪の毛をぼりぼりかきむしり、指にまつわりつく毛を吹

きながら) はーっはっはっ。今年も快調。いい出だしじゃ

ないの。

大橋 そうですかね。

晴斗 いいよ、いいよ。きみもね。

松本 はい、ありがとうございます。

晴斗 ズバーツとね、思い切つてやればいいから、それで。

松本 ハイ。

晴斗 あれ、きみたちどうしたのかな。

大相撲協会のような癒着の激しい最上級生に比べ、下級生は必死な
のだ。

吉村 先輩、僕たち納得いきません。

大西 納得してません。

晴斗 何が。あれ、どーしたの、ジョーカー柏倉、暗い顔して。
ジョーカー おかしいと思うんです。

是枝 何が。

松本 どこが。

北村 これってリア王ですよ。

晴斗 そうだよ。

ジョーカー ど、どこが！

是枝 だからアレだよ、年末恒例のシェイクスピアシリーズ
究極の第6弾。今年はいよいよ

松本 リア王に挑戦！

吉村 それもうやめるって言ってますでしたっけ。

北村 お言葉ですが、僕はちゃんとした演劇をやるうと思っ
て入部したんです。

吉井 これって。ねえ。

北村 ああ。

ジョーカー ふぬーっ、ふぬぬぬぬー。

晴斗 何をそんな。興奮することなんかないって。

是枝 そうだよ。あれ、新入生のみんなもどーしたんだい？

新入生たちも中国首脳部の独裁に反対する香港市民のようになっ
ていた。

新入生 変だ、変だ。

井上 聞いてください。ほんとにいいんですか、このままで。

北村 そうです！

木村 すべての演出は、パワハラとどう違うんですか。

松本 パワハラ？

吉井 まともな芝居がやりたい。そういつて、大西先輩は死

んでいきました。

大西 え、俺ここにいるよ。

喜早 ホントだ。

木村 いるいる。

北村 僕もそうです、晴斗さん。ちゃんとした芝居がしたい。
必然性のある殺陣がしたい。すぐ脱げといわれるけど、
ちゃんと意味をもって脱ぎたい。それが僕の願いなん
です。

晴斗 その言葉が胸に迫る。

晴斗 願い、か。

松本 ぬぬぬ、ここまで言われてどうする、晴斗。

是枝 おまえだけが頼りだ。晴斗。

晴斗 よし！

大橋 晴斗！

晴斗 よしわかった。私こと文字晴斗。ここに声を上げる。
今年こそ、今年こそまともなやろう。年末恒例、シェ
イクスピアシリーズ。

大橋・是枝 ありがとう、晴斗。

晴斗 (髪をかきむしりながら) どちらがいいか選んでもらおう。

リア王 入れ。

大橋 そう、これは我々が夏合宿でやってる試演会方式。古

ゴネリル、リーガン、コーディリア出てくる。

今東西の名作戯曲を一つ選び、ひとチーム十分で同じ

テーマの同じシーンをいかに演出、

コーディリア おはようございます。お父様。

松本 料理するか。

リーガン お父様。

晴斗 その勝負。

ゴネリル お父様。

吉村 合宿の時は競うのです。そしていちばんいいチームを

リア王 おはよう。それでは、遺産相続の話をしよう。

選ぶのです。選ばれたチームが行くのはそれこそ

全員 天国！

喜ぶゴネリルとリーガン。

全員、しばらく天使のように宙を舞う。

リア王 しかし、そうも言っていない情報が入ってきたのだ。

大西 選ぶのは、

ゴネリル (舌打ち)

全員 (客席へ指を突きつける) あなたです。

リア王 今だれか舌打ちした？

鈴木 まずは僕の班。

ゴネリル あり得ません。

吉井 よーい、アクション！

リア王 そうか…。

リーガン そんなことより、その情報と言うのは？

鈴木班

リア王 そうだよ。コーディリアがフランス王と密会していた

OP 初めての領土

のだ。しかもよりによって、我が屋敷のあまり使われていない多目的室で。清純系だと思っておったのに、

とんだビッチではないか。

リア王出てくる。同時にノック音。

コーディリア そんな、違います。

リア王 この愚か者めが、ビッチに領土など与えると思っただか。

恥を知れ。貴様には今日にでもここを出てもらおう。他のものに異論は認めん。今すぐ出ていけ。

コーディーリア黙ってうなづく。

コーディー わかりました。それがお父様のお気持ちなら従います。でも覚えていてください。たとえ追放されても私は貴方のことを愛しています。あと、私はビッチなどではございません。

コーディーリア去る。

リア王 ではそなた等に領土を半分ずつ相続しよう。

オールバニ公出てくる

オールバニ 大変です。エドガーが謀反を企てているとの情報が入りました。

リア王 何だと。エドガーを探しここに連れてこい。

オールバニ は。

オールバニ公去る。

リア王 ゴネリル、リーガンよ。私を一月毎にお前たちの城に

泊めてはくれんか？

ゴネリル わかりました。ではまず私の方で部屋を用意させていただきます。

リア王 感謝する。

リア去る。

S1 女の裏つて怖いよね

ゴネリル ああ、マジあのかそ親父うごくね？未だにあの傲慢さはマジばねーわ。

リーガン それな。

ゴネリル というかさ、コーディーリア追放したのは驚いたわ。分かる。ちゃんと言い分も聞かずにね。

ゴネリル しかも追放の理由がビッチだからつてのはまずいわね。そうね。私たちも追放されかねないわ。

リーガン ならいつそお父様を苛め抜いてこの国から追い出しましょうか。

リーガン 何するの？

ゴネリル 自殺ギリギリまで追いつめて精神病ませるのよ。こわ。怖すぎてちびるかと思っただんですけど。

ゴネリル えー。そんなに怖かった？シヨックなんですけど。ピエン。まあいいや。じゃあ作戦は後で伝えるからヨロ

タのフォーエバー。

リーガン　り。じゃ、またあとでねー。
ゴネリル　ん。

リーガン去る。

S2 悪女

リア出てくる。

ゴネリル　ようこそ。お父様。

リア王　うむ。よろしく頼むぞ。

リア去る。

ゴネリル　何が、うむ、だよ。腹立つなー。

リア出てくる。

リア王　どうした。早く部屋に案内しろ。

ゴネリル　喜んでー。

リア王、ゴネリル去る

S3 悪男

エドガー出てくる。

エドガー　一体どうなってるんだ？　散歩から帰ったら、傭兵に
追いかけられたんだけど。

舞台袖から兵士が叫ぶ。

エドガー　まずい、もう疲れて足が動かない。

エド去る。

S4 後半に畳みかけるな

リア王、ゴネリル出てくる。

ゴネリル　それにしても無駄に多い護衛達ですわね。お父様。

リア王　そうか？ 彼らはこれまで尽くしてくれた良き兵たち
じゃ。無駄ということはないかな。

ゴネリル　でもこの中には使い物にならない老害のごく潰しもい
ますわよね。さすが私といたしましてもこの数を招き
入れるのには抵抗がございます。せめて数を50に減
らしていただけないですか？

リア王　それは出来ん。彼らは同志だ。しかもそれを老害だの
ごく潰しだのというか。

ゴネリル 事実ではありませんか。だってあそこに立っているお

じいさんなんか今まで活躍したとこ見たことないので、祝勝会の時一番食べているではありませんか。

リア王 ぐっ。

ゴネリル もつと言えばあそこに座って腹書してる爺はお父様との会合すっぽかしてインスタにあげる写真撮りに行ってましたわ。これのどことが同志なんですか？

リア王 何だとそれは事実か？

ゴネリル ええ。証拠の投稿もここにございます。

リア王 なんと…。この四角い鏡はなんだ？私が移るのではな

く全く身に覚えのないものが移っているのだが…。

はぁ？ スマホも知らないの？お父様。あり得ない。そんな時代に取り残された爺泊めるわけにはいかないわ。

リア王 それはこっちのセリフだ。時代の最先端が至高だと思っ

ている小娘に泊めてもらおうなどとは思わん。

ゴネリル 珍しく意見が合いましたね。出て行って下さい。

リア王 言われんでも出て行ってやる。早く車を出せ。行先は

リーガンの所だ。ええいもたもたするな。はよせい。

リア王 去る。

ゴネリル ああ、うぜー。まあとりあえず私もリーガンの所に行

くかな。

ゴネリル 去る。

S5 また一方で

オールバニ公出てくる。手紙を持っている

オールバニ この手紙はなんだ？あて先は…書かれていないか。仕

方ない中身を見ているか。えー何々？「今日はライ

ンがメンテナンス中なので手紙を書かせていただきます

わ。今日もお邪魔させていただきますね。」これはいっ

たい何の暗号だ。だが何故だか嫌な予感がする。具

体的にはエドマンズの反乱の予感が…。まずい。急がな

ければ。

オールバニ公去る。

S6 もう限界…

リア王 出てくる。

リア王 おい、リーガン、開けてくれ。

扉が開く音。リーガン、ゴネリル出てくる

リーガン あら、聞いていたより早かったですね。お父様。

リア王 出てくるのが遅いぞ。早く部屋に入れろ。そうでなければ風邪を引いてしまう。

リーガン うっせえなー。風邪ひいてくたばれよ。くそ親父が。

リア王 え？ 今何か言った？

リーガン いえ何も言っておりませんわ。

リア王 そうか…。最近幻聴が多くてな。

リーガン さようですか。ではこちらに耳の悪い老害用の部屋をご用意させていただいてます。

リア王 え？ 今老害って…

リーガン 幻聴です。

リア王 そうか。

リーガンとリア王、舞台上を一周回って止まる。

リーガ この部屋になります。

扉を開ける音。

ゴネリル リーガン、遅い。いつまで待たせるのよ。

リア王 な、何故お前がここにいる？

リーガン お姉様はただ私の所に遊びに来ただけですわ。

リア王 何だそんなことか。ならば、早くこやつを外に出して

私を中に入れてくれ。

リーガン それはたつた今できなくなりましたわ。

リア王 なぜだ？

リーガン この部屋はたつた今お姉様のお部屋になりました。そんな理由になるか。なら他の部屋を用意しろ。

リーガン それもできません。

リア王 何故だ？

リーガン 護衛の数が多すぎます。こんな生きているだけで地球温暖化を進行させるだけの地球の敵が泊まれるだけの広さのある部屋はここしかございませんの。だからせめて50に減らしていただかないと。

リア王 お前までそのようなことを申すか。あり得ん。何ならゴネリルよりも酷いことを言われた。

リーガン あり得ないのはそちらですわ。こちらは譲歩したというのに、泊めていただく立場でそのような傲慢なことをよく申せますわね。

ゴネリル そうですわ。私なら25でなければ許せません。

リーガン 私は本来ならば10でも多いと思っておりますわ。

ゴネリル いやいやそれなら5でも多いわよ。

リーガン だったら1で十分ではないかしら。

リア王 ええい、黙れ。無駄に張り合うでない。もうよい。こんなことならコーデイリアの所に行かせてもらおう。

リア去る。

ゴネリル やつと行ったわね。

リーガン ええ。これで邪魔者は消えたわ。

ゴネリル というかあいつ調子がいいわね。あれだけ迫害し
てよくあんな軽くお世話になろうなんて言えるわね。

リーガン そうね。

電話の音。

ゴネリル あ、エドモンド様だわ。もしもし。

リーガン は？エドモンド様？ どういうことよ。

ゴネリル ちょっと、やめてよ。

リーガン あんたエドワード様に手、出したの？それは私の物よ。
ゴネリル はあ？何言ってるのよ？私の物よ。手、出したのはそ
ちでしょ。

リーガン あり得ない。あの方は私が好きだと。

ゴネリル あっそう。そうなのね。全部嘘だったのね。

小刀を出すゴネリル。

ゴネリル これで全部終わりにするわ。

リーガン 待ちなさい。それはだめよ。

ゴネリル 黙れー。

ゴネリル、リーガンを刺す、そして去る。

S7 ますい…

オールバニ公出てくる。

オールバニ 最近ゴネリルが夜に部屋から出て行っているが何を
しているのだろう。まさか、ダイエツトのために散歩
もしているのか？このところ太ったーって煩かったか
らいいか。

ノック音。

オールバニ 誰だ？

謎の兵士 お伝えします。ゴネリル様が自室で首を吊っている
が見つかりました。

オールバニ そんな。あいつそこまで太ったことを思い詰めていた
か。

謎の兵士 あと、死体のそばの机に遺書らしきものが置いてあり
ました。

オールバニ 何と書いてあった？

謎の兵士 「エドモンド様の裏切り者ー」と書いてありました。

オールバニ 何？やはり、エドモンドは王を嵌めようとする裏切り
者だったのか。にしても、よくあいつが知っていたな
もうよい。下がれ。

謎の兵士

は。

オールバニ とりあえずエドモンドに会わなければ。

オールバニ公去る。

S 8 オー終い

リア王、コーディリア出てくる。リア王座り込む。

リア王 あの女共が私の娘だと…。

コーディ 落ち着いてください。

リア王 お前はコーディリアに似ているが、誰だ？

コーディ 私です。コーディリアです。

リア王 そんなことないコーディリアはもつと声が高いはずだ。

コーディ そりゃ、今まで声変わりなどしたことございませんもの。

リア王 あくまでコーディリアのふりをするか、偽物め。

コーディ いえ、偽物ではなく本物です。

リア王 いや、あいつはビッチだ。そんな清楚な格好はせん。

コーディ いいえ。お父様が見ていたと思われるのは、私の偽物です。

リア王 なら声はどう説明する？

コーディ 幻聴です。実際声の高さも違いますし。

リア王 そういうことか。ならお前が本物ということか。

コーディ そうでございます。

リア王 ならお前はフランス王と密会などしていないのだな？

コーディ いえ、それはしました。

リア王 何だと？

コーディ でもそれは婚約をするためです。

リア王 そうだったのか。

遠くから兵士の声。

コーディリア ここでは戦に巻き込まれてしまいます。あの森に行

きましよう。

リア ああ。そうしよう。

コーディリア、リア王去る。

ED これで何テイク目？

オールバニ公出てくる。

オールバニ エドガーが見つからん。さて、どうしたものか。

エドガー出てくる。

エドガー ぎゃー。捕まる。つて、オールバニ公。

オールバニ おお。ようやく見つかった。エドガー協力してほしい。

力を合わせてエドマンドを倒そう。

エドガー おお。私を信じてくれるか。

オールバニ さあ、奴を倒しに行こう。

エドマンド、エドガー去る。同時にラッパ。コーディネリア出てくる。

コーディネィ まさか、森で待ち伏せしていたエドマンドに捕まって捕虜になって2か月あんな仕打ちを受けるなんて、もういつそ死んでしまいたい。

謎の兵士出てくる。そしてコーディネリア刺される。

コーディネィ ええ？

コーディネリア倒れる。謎の兵士去る。リア出てくる。

リア王 そんな、コーディネリア。どうしてお前が死んでおるのだ。

リア王発狂する。そして息絶える。

オールバニ出てくる。

オールバニ この後、私がプリテンの王位を継承したことはまた別

の機会にお話ししましょう。(間) こうしてリア王と三人の娘の死をもってこの悲劇は終幕となります。しかしこのような終わり方は納得いきません。なので少し時を戻し、次の大橋班に譲りましょう。

大橋藩

大橋出てくる。

大橋 ある王国がありました。その国の王リアは娘達を呼び

こんな事を言い出しました。

他の役者 positioning につく。

リア王 俺の財産を分けるぞい。

王冠 王冠分かれませう。

王冠3つに分かれる。

大橋 まず長女のゴネリルに、

王冠 王冠乗ります。

大橋 次に次女のリーガン、

王冠 王冠乗ります。

大橋 そして三女のコーディネリア、

王冠 王冠乗れない！王冠届きません！

リア王 お前は身長が高いから相続権は無ああい！

三女 そんなー

大橋 一番優しい三女は追放されたのです。酷いねえ。

リア王 お前もだ大橋建斗伯！

大橋 えええ？！

リア王 我が娘達よ！泊めてくれ！

長・次女 やだ。

王冠 オラとつとと出てけや馬鹿野郎テメエは王でも何でも

ねえんだよ馬鹿野郎

リア王 何だお前はあつ！

王冠 王冠です。

リア王 しらねえよ！

リア王、迫るが弾き飛ばされる。

大橋 かくして王は娘達に見放され荒野を彷徨うなんて言う

のは正直どうでもいい。肝心なのはリア王の重臣、グ

ロスター伯とその息子達のお話。

グロスター 大橋

この人はいい人。

エドガー エドガーです。

大橋 こいつもいいやつ。

エドモンド エドモンドです。

大橋 そう！こいつ！この見るからに全身カビだらけみたい

な奴が悪者なのです！

エドモンド わはははは。

大橋 はてさて、リア王だけでなく周りの重臣達にもその暗

い影法師が迫る！どうなることやらというのはお楽し

…

王冠 王冠です。

大橋 うるせえ！

王冠、後ろへ。

オールバニ 私の紹介は

大橋 今言うなて！

オールバニ あ、長女の夫のオールバニ公です。

大橋 (咳き込む)大橋建斗班のリア王的なもの、始まり始ま

り。まずはエドモンドが兄、エドガーを陥れようとするところからのことの顛末。

エドモンドとエドガー以外全員去る。

S 1

エドモンド なあ兄さん！

エドガー どうした弟よ。

エドモンド　ーム飽きてきてない？

エドガー　確かにPS5もできるものはやり尽くしたしね。

エドモンド　そこでさ、VRゲームつくったんだよ。

エドガー　凄いなお前つい一週間前まで万葉集の研究してたじゃねえか。

エドモンド　古文研究しててもプログラミングできる時代なんだよ。

エドモンド、エドガーに刀を渡す。

エドモンド　それリモコン。

エドガー　はいはい

エドモンド、グロスターを連れてくる。

エドガー、刀を振りまわし近づく。

グロスター　わー！何ということだ！国王の三女様が追放されたと思ったらリア王まで城に入れなくてみたいなこんなクソ忙しい時に俺の息子は！

エドモンド、グロスターを端に連れていく。

エドモンド　兄上は今父上の命を狙っておられたのです！

グロスター　何だと？！

エドモンド　今すぐ！追放して下さい！

グロスター　お、おう！

エドモンド、エドガーを蹴って去らせる。

オールバニ公出てくる。

グロスター　オールバニ公！

オールバニ　何の騒ぎだ！

エドモンド　お気になさらず！

オールバニ　実は私の奥さんから、

エドモンド　リア王の長女、ゴネリル様から、何か？

オールバニ　グロスター伯、君がフランス王国と繋がっているということが判明した

グロスター　ええっ？！

オールバニ　よって死ぬまでブルーライトを浴び続ける刑だ。

オールバニ公とエドモンド、サングラスをつける。
舞台上。

ブルーライト出てきてグロスター伯の目をつぶす。

エドモンド　流石ゴネリル様！現代社会に対する痛烈な皮肉まで一つの刑罰に含めるとは！

グロスター　あ！お前！エドモンド！

エドモンド　追放だゴラー！

グロスター、蹴られて去る。

オールバニ これでもいいのだろうか。

エドモンド 大丈夫ですって問題ないですって。

オールバニ そうだ、ゴネリルがお前をグロスター伯爵に任命するつ

て言ってた。

エドモンド ありがたき幸せ。

オールバニ公去る

掃除屋出てくる。

エドモンド 全て、上手くいったぞ……これで邪魔者は消えた。こ

の計画を知るものは誰もいない！

掃除屋と目が合う。

掃除屋 あっどうも秘密のシークレット秘密クリーンサービス

です。

エドモンド、無言で掃除屋を蹴り出す

S 2

リア王出てくる

道化

お前はもう王ではない。毎年必死こいて書いた年賀状も今年は一通がくるだけだ……差出人は日本郵便！

リア王 おお！いつもすぐ側にある！あのグループが書かれた年賀状しか来ないというのか！？

道化 残念だったなあ悲しいなあ。

リア王 ぎゃーっ！

道化 みろ、お前を包み込もうと青い光が近づいてくるぞ！

リア王 ぎえええ！

グロスター その声！そのお声は！

グロスター、ブルーライトを伴いよろめきながら出てくる。

グロスター リア王！

リア王 ロブスター！

グロスター グロスターにございます！

リア王 何故そのような歩き方をしている……まるでザリガニのようだぞ。

グロスター だからロブスターじゃないって

リア王 ……目が、見えぬのか

グロスター 陛下の長女であらせられるゴネリル様の処罰にござい
ます

リア王 確かにそれは大阪王将と餃子の王将だな。

グロスター どういうことですか？

大橋建斗伯出てくる。

大橋　グロスター伯爵！ご無事でしたか？！

グロスター　この声はケント伯ではございませんか！

大橋　違います。

グロスター　へ？

大橋　私はケント伯ではなくて大橋建斗伯です。

グロスター　いや、ケント伯じゃん

押し問答する大橋とグロスター。

傍で訳の分からない舞を踊るリア王。

グロスター　わかった、わかったから。それより何故王はあの様な

事になっているのだ？誰と話しておいでなのだ。

大橋　実は荒野を彷徨ううちに頭のネジが数本落ちてしまっ
てずっと道化師と話している幻覚を見る阿呆になっ
てしまったのです。

エドガー　父上！

エドガー出てくる。

エドガー　父上！どうなされたのですか！

グロスター　ゴネリル様が、私の目に死ぬまでブルーライトを当て
続ける刑を実行なされたのだ……

エドガー　なんて酷いことを。

大橋　エドガー殿、実は私ここに来る前に清掃業者に化けて

としてある場所に潜入していたのです。

エドガー　どういふことですか。

大橋　取り敢えず！手を貸して下さい。私はグロスター伯爵

の城に向かいます。ドゥヴァーにある城に味方が集まっ
ていますのでそこに向かつて下さい！

雷鳴。雨音。

エドガー　皆様、雷雨がひどくなっております！お早く！

グロスター父子去る。

リア王　……。

大橋　陛下！

一際大きな雷鳴。

ベエートーヴェンの交響曲第九番第二楽章。

リア王　大橋建斗伯！

大橋　はっ！ここに

リア王　私は、何者だ。答えろ！
大橋　王にあらせられます。

リア王 本当にそうか？！

大橋 王の……過去の王の影法師にございます。

リア王 否！

雷鳴。

わずかに弱まる嵐。

リア王 私は、ドートルコーヒーのカプチーノにかかっている

シナモンだ！シナモンなのだ！

大橋 全くわかりません！

王、高笑い。

再び嵐が吹き荒れ、二人は去る。

S 3

曲はそのまま、エドモンド出てくる。

エドモンド (高笑い)

オールバニ公出てくる。

エドモンド、オールバニ公に気づき曲を止める。

オールバニ なんて悪趣味な遊びをしているのだ。

エドモンド 忘れてください！

オールバニ そんなことはどうでもいい。お前がゴネリルとできていると言う噂を聞いた！どういふことだ説明しろ！

エドモンド あ、そ、それはねえ。ねえ。うん。

オールバニ 何とかいったらどうだ！

エドモンド まずいバレた……話題を無理矢理にでも変えなければ

オールバニ 丸聞こえだよ

エドモンド ら！あそこ！ミカンが飛んでる！

オールバニ んなわけねえだろ

エドモンド あんな所にサンタが！

オールバニ フィンランドに帰れ！

エドモンド あんなところにフランス軍が！

オールバニ そんなまさか……あれ？

エドモンド 待つてくださいよまさか本当に来るとは

静寂。

オールバニ まずいまずい！！

エドモンド どうしますか？！

オールバニ お前はとにかくあの軍を打ち破つて来い！

エドモンド 承知しました。

オールバニ公去る。

エドモンド いや、もしやあの軍の中にリア王とコーデイリア姫がいるのでは？だとしたら……捕まえさえすれば生殺与奪全て思うが儘。

オールバニ 早く行け！

エドモンド去る。

S 4

エドガーとグロスター、ブルーライト出てくる。

エドガー しかし何故崖に行きたいなどと仰ったのです？

グロスター 自殺するんだよ！

エドガー お待ち下さい！

グロスター やだ！もう死ぬ！僕死ぬもん！

エドガー 早まらないでください父上！

グロスター エドガー！私を崖に突き落とせ！

エドガー 何ということ……

グロスター これが親孝行だと思ってくれ。

エドガー 分かりました。

ブルー ……いや、目が見えないなら嘘をつくことも可能だ！

エドガー お前喋るの！？

グロスター どうかしたか！

エドガー い、いえ。

ブルー ほら！はようせい！

エドガー 崖はもう目の前です！もう断崖絶壁です！あと一歩二歩です！

グロスター まじで？！もう！？

エドガー はい！しかしもし落つこちて死ななかつたらそれは阿呆の神が生かしたということ、天命を甘んじて受けましょう！

グロスター どのくらいの高さだ！？

エドガー フィヨルドみたいになつてます！マントル割れてます！マグマもう見えます！

グロスター そんなに！？よし、行くぞー！

グロスター、ジャンプ。

グロスター 落ちているか？！

エドガー 今、落ちきました！

グロスター 全然熱くないんだけど？！

エドガー ギリギリマグマの手前で浮遊してます！

グロスター 阿呆の神か！？

エドガー 間違えありません！

グロスター ならば仕方ない、自殺は諦めよう！

大軍の足音。

グロスター　なんか聞こえるぞ！

エドガー　あれは、フランス軍！コーデイリア様が軍勢を引き連れて王を救いに来たのです！

グロスター　まじで？！勝ってるのか？！

エドガー　今ぶつかります！あれ？

グロスター　どうした？！

エドガー　戦わないで逃げていきます！

グロスター　ええ？！

エドガー　いや、2人だけ残ってます！

グロスター　何者だ！

エドガー　コーデイリア様とリア王です！

静寂。リア王、エドマンドに引つ張られて出てくる。そのまま去る。

エドガー　捕まったああつ！

エドガー、去る。

グロスター　おい！エドガー！どこに行った！おい！

グロスター、彷徨い去る。

グロスター　おい！地面がないぞ！ぎゃー！

如何にも痛々しいポキツという音。

S 5

大橋、出てくる。

エドガー、出てくる。

大橋　あ！エドガー殿！ちよどいいところに！

エドガー　国王が捕まりました！

大橋　ええ。どうやらコーデイリア姫もそのようです。

エドガー　取り敢えずどうしましょう……

エドマンドの声が響く。

エドマンド　おい！誰か風呂掃除をしておけ！柚子も入れておけよ！

大橋　そうだ、風呂場だ！ちよつと風呂にいて下さい。

エドガー　風呂を沸かせばいいのですか？！

大橋　違います！

エドガー　風呂に浸かればいいのですか？！

大橋　違います！

エドガー　風呂掃除ですか？！

大橋　取り敢えず風呂に隠れてろってんだよ！

エドガー　掃除なんですか？！

大橋 早く行け！

いる地下牢へ向かえ！

大橋、エドガーを去らせる。

大橋、スピーカーを手渡し去る。

大橋 もうやだあ。

オールバニ エドマンド！エドマンド！

オールバニ公、出てくる。

エドマンド出てくる。

オールバニ 何してんの。

エドマンド 何事ですか。

大橋 あ！これはオールバニ公！

オールバニ これを聞け！

オールバニ お前ケント伯じゃないか！

またもや流れる録音。

一連の押し問答。

エドマンド これは誰が。

大橋 取り敢えずこれを聞いて下さい！

オールバニ それは言えん。
エドマンド いや待て、あの部屋に誰かいたのか？

オールバニ なになに？

音声。掃除屋の音声。

スピーカーを押す大橋。OPラストのエドマンドのセリフが流れる。

エドマンド あいつかあつ！

オールバニ まさか、あいつが全部仕組んだことなのか？！

オールバニ お前の悪事はもう隠すことはできんぞ……

大橋 あれだけでよく分かりましたね。

エドマンド こうなつては仕方無い。しかしこれを知るものは貴方と私と掃除屋のみ。消せばいい。しかし未来の国王様がまさか殺されてはこの国もどん底だろうなあ……

オールバニ ともかく、エドマンドを呼びつける！お前はリア王の

オールバニ公……決闘を申し込む！お前が相手だ！

エドモンド、手袋を投げる。

オールバニ公、手袋をキャッチ。

オールバニ いや、待て。

オールバニ公、袖に手袋を投げる。

エドガー お掃除終わりました！

ゴム手袋とバスマジックリンを持ったエドガー出てくる。

オールバニがキャッチした手袋、エドガーが受け取る。

エドガー 決闘ですか！？

オールバニ そう！お前の敵はあいつだ！

エドモンド エドガー兄さん！何故ここに！？というか何故バスマ

ジックリンを持つている？！

エドガー 「お前……父上の目を潰したらしいな？」

エドモンド いや、ブルーライトを浴びせ続けただけだ！

エドガー 同じだ馬鹿野郎！

ゴム手袋をエドモンドに向けて思いっきり投げつけるエドガー。

エドガー、バスマジックリンで攻撃。

オールバニ 凄い！今までまどつてきた心の汚れがバスマジックリ

ンで落とされていく！

心の汚れを落とされたエドモンド。

エドモンド 私は、なんてことを……

エドガー どうしたエドモンド

全身で謝罪を始めるエドモンド。

沈黙。

エドモンド あつまずい！消える！キエル！

オールバニ どういうことだ！

エドガー おそらく全身が汚れで出来ていたからバスマジックリ
ンによって浄化されつつあるのでしよう。

エドモンド はっ！

オールバニ どうした？

エドモンド 実は、私の部下に、リア王とコーディアアを殺すように
命令したのです。

エドモンド、消える。

エドガー 泡しか残ってない……

オールバニ そんな事より、地下牢に行くぞ！

エドガー お待ちください！

二人去る。

S 6

リア王、途方に暮れる。

大橋、出てくる。

大橋 リア王！この死骸は……

大橋、飛び退く。

大橋 ……これってあのお姫じゃないですよね……コーデイ

リア様は？！

リア王 むこう。

大橋、端を確認。

ブルーライト出てくる。

大橋 ほんとだ……どうなされたのです？何故悲しんでおい

でなのですか？生きておられるのですよ？！

リア王 玉ねぎ切ってるだけだ。

大橋 ……何だお前。

ブルー ブルーライトです。

大橋 明かり？

ブルー ええ。爆発とかもできますよ。

大橋 なにそれ。

ブルー しかし地下は暗いですねえ。明るくなりますね。

ブルーライト、光る。

大橋 うわ眩しい！

ブルーライト、蹴られて下手へ去る。

ブルー 爆発まで残り。

大橋 彘何？！

ブルー 0秒

爆発音。

そののち、大橋下手へ。

ブルーライト、戻ってくる。

大橋 やべえコーデイリア姫全身ブルーライトでローストさ

れてる！

ブルー 死んだねありゃ。

大橋 お前なんてことを！

大橋、ブルーライトをゆする。

ブルー やばい。揺れる。爆発する。

大橋 何!?

ブルー 残り1秒。

大橋、リア王を盾にする。

爆発。

リア王 ぎゃーっ!

リア王、死ぬ。

オールバニ公とエドガー出てくる。

エドガー これは

大橋 コーディアリア姫はブルーライトの爆発で全身ロースト

され、リア王はその爆発に悲しいことに全く人為的な
ことなくまたまたそこにいて巻き込まれてしまい……

お隠れになりました。

オールバニ ではこの均等にカットされた動物の死骸は!?

大橋 牛肉です……ただの牛肉です!

エドガー だから隣に玉ねぎがあるのか

大橋 オールバニ公!この国の王位をおつぎください。そし
てこのような不慮の事故を繰り返さぬように、未永く、

民を安んじて下さいませ。

エドガー 私からもお願いします。

オールバニ 王冠を。

王冠、出てくる。

王冠 王冠です

エドガー、王冠をオールバニ公の元へ持つていく。

王冠、オールバニ公に乗る。

オールバニ 私がこれより王となる!

ストップモーシヨン。

王冠動き出す。

王冠 かくして、王冠はオールバニ公に渡りました。それか

らの話は語る必要がないでしょう。この物語は、一人の
王とその家族や家来達の悲劇で幕を閉じるのです。

役者起き上がる。

王冠 しかし、我々が幕を閉じて忘れてはいけません。罪

を犯さないように注意しても罪を犯される可能性も十

分にあるということに

大橋 後ろからとかね。

王冠 そうそう。

大橋と王冠、ごちゃごちゃして次のEDへ。

epilogue

みんな終わって、ほっと一息。

木村と西谷、出てくる。

木村 さて、選んでいただきましたよ。

西谷 どうぞ！

カーテンコール。

大橋 まことに僭越ながら、役者紹介をさせていただきます。

ハルト ハルト班。(紹介する。以下同じ)

大橋 大橋班。

リーダー向き合う。

木村 どうしよう。

西谷 お客様、お願いします！

順に並べて拍手を強要する。

木村 ○○班がよかったと思う人(以下同じ)

勝った方を決める。

西谷 決まりましたね。

負けた方の班長 納得いかん！

敗北組が反旗。殴りかかる。

ストップモーション。

ハルト よーい、アクション！ 全集中！

全員、「鬼滅の刃」的殺陣が展開される(怪我注意)。

見事な動きからスローモーション。

刀さばきがバシッと決まって、

ひとりハルトがポーズ。

ハルト この剣裁きが僕から君へのお年玉さ！

ハルトの笑顔。

幕

2020年12月21日 撮影 鈴木晴斗が編集
2021年1月12日 公開 20日 閉会式にて特別賞受賞。小
ネタ満載の面で（公開は24日まで）

獨協への道（CDとかDVDでいえばボーナストラック）

この間に撮影した「通学路」画像（12月19日。公開は2021年1月）

鈴木「こんにちは。獨協中学高等学校演劇部部長の鈴木ハルトです。

演劇部では、現在、私学大会で上演するリア 獣VSリア王の練習
中です」

○ 室内

リア王 「獨協中学高等学校に行くのに、ふざかしい通学路はあるか」

三兄弟 「はい、父上」

リア王 「ほほう、言ってみよ。長男のゴネリル」

ゴネリル 「東京メトロ有楽町線の護国寺駅です、父上」

リア王 「ほほう、次男のリーガン、おまえは」

リーガン 「同じく東京メトロ有楽町線の江戸川橋駅です」

リア王 「そうかそうか、して、いちばん可愛い末っ子のコーディネリ
ア。おまえは」

コーディネリア 「……」

リア王 「どうした」

コーディネリア 「……私の口からは」

リア王 「言えないというのか」

ゴネリル 「父上、こいつには言えないんですよ」

リーガン 「俺たちが紹介するッ」

● 護国寺駅方面

護国寺駅（ナレーターと主演はリーガン）

SCENE No. # 1（以下、#）リーガン「池袋から地下鉄有楽町線で
二つ目、護国寺駅の6番出口。階段を二段おきに駆け上がると、地上。
少年マガジンでおなじみ、講談社。

新刊案内に見とれていると遅刻します。（「あっ」という顔のリーガ
ンチーム①）

2

「そのまま護国寺を背に、江戸川橋方向へひたすら歩きます。

よたつていると遅刻します。（よたつている②）

広い大通りを、ただひたすら進むこと3〜4分。

歯医者さんのところで曲がります。（ニツと笑って指さす③と④）

3

「坂が待っています。鳥のしっぽと書いて鳥尾坂といひます

みんな「わたしたちが鳥尾坂46です」。ひとしきりボケる。

リーガン（男らしく）ボケンでいいッ」

鳥尾坂46のみんな、とぼとぼと坂を登っていく。

4

リーガン「上がった坂のその先は、右手にカテドラル教会。

しめて7〜8分、坂の上の獨協、
一同「僕たちの獨協中学・高等学校です」

●江戸川橋駅方面

江戸川橋駅（ナレーターと主演はゴネリル）

#5

「地下鉄有楽町線、江戸川橋駅1a出口の階段を二段おきに駆け上がると、地上。

桜の名所、春には神田川にそれはそれはみごとなしだれ桜の嵐、新江戸川公園。

花に見とれていると遅刻します。（ポツカーンという顔のゴネリル・

チーム①）

#6

交番を目の端に、そのまま護国寺方向へひたすら歩きます。隣の駅ですからぬ。

迷っていると遅刻します。（キョロキョロしている②）

ただひたすら進むこと3〜4分。

最初の信号で左に曲がります。（ニツと笑って指さす③と④）

#7

「坂が待っています。目白駅へとつながる目白新坂です。

みんな「わたしたちが目白新坂46です」。ひとしきりボケる。

ゴネリル「男らしく」ボケるな〜」

みんな、のっしのっしと坂を登っていく。

#8

「上がった坂のその先は、左手にホテル椿山荘東京。
しめておよそ10分、坂の上の獨協、
僕たちの獨協中学・高等学校です。

目印は「椿山荘」

一同「ここが、僕たちの獨協中学・高等学校です」

#9

コーデイリア「いえいえ、他にもJR山手線の目白駅から都営バスに乗って10分、あるいは東西線の早稲田駅から歩いて15分、副都心線の雑司ヶ谷駅方面からも歩いて20分、という手もある。なぜなら、坂の上の獨協は東京の中心にあるのです」

リア王「そうじゃな。いろいろある。目印は（リーガン）「カテドラル教会」、（ゴネリル）「椿山荘」

コーデイリア「行き方はいろいろ、東京の中心、坂の上の獨協

一同「これが僕たちの獨協中学・高等学校です！ わーい」

みんな、はじける。

あとがき

シェイクスピアは一応、打ち止め。世界の名作戯曲にまた挑戦したい。流れてチエーホフなどとパンフに口走ってしまったが、どう責任をとればいいのだろうか。そして次こそ生身で上演できるのか。線上、薄氷、二度と戻らない、二度と取り返しつかない刹那の芸術に、胸が震えるばかりである。

真面目にやってください



リア
三人娘



王冠です！(以上 撮影 長谷川美奈)



役者紹介(含スタッフ)



△論文要旨▽

文禄三年撰津・河内・和泉国太閤検地帳の基礎的研究

則竹 雄一

太閤検地は豊臣秀吉によって全国的に実施された田畠の実地調査であり、百姓からの年貢収納システムである石高制の前提となる政策である。この中で文禄年間の伊勢国・和泉国・河内国・撰津国・大和国の検地は、太閤検地の原則を規定した検地条目に基づく典型的な検地として知られている。検地実施の結果の各村々の内容は、最終的に検地帳とよばれる帳簿に整理・記載されて、百姓の手に残されることになる。従来の検地研究は、検地帳の個別村落に分析に留まることが多く、検地全体を惣国レベルで分析することはほとんどなかった。本稿では、文禄三年撰河泉三国の検地帳を網羅的にみることで、惣国検地としての特徴を、帳簿の末尾に検地結果が記載される部分である「奥書」(寄せ)に注目して、そこから示される検地の特徴を明らかにした。当然ながら全「奥書」に記載される唯一の項目は、分米高合計＝村高であることが確認され、他の項目は、検地担当奉行による多様な記載方法がとられていたことが明確となった。多様性の理由は不明ながら、検地条目にある検地奉行による「見はからい」規定が影響したことは確かであろう。

スラムの機能——ニースにおけるケーススタディ

青木 輝 憲

現代社会においてスラムは解決すべき問題であるとされる。犯罪は住環境、社会における位置付けといった点から、スラムは解消・解体されるべきものとして、実際に施策されている。しかし、スラムは単なる劣悪な住居の集合体なのだろうか。貧困層に住居を提供するより他に、社会においてスラムが果たす機能はないのだろうか。

本稿ではフランス南東部ニースに1960年代から1970年代にかけて存在していたスラムに注目することで、スラムの問題点のみならず、移民がホスト社会であるフランスへの統合過程において調整機能があったのではないかとこの点を明らかにする。

教育現場におけるタスクに基づく言語指導法、その長所と短所

サミュエル・リリー

タスクに基づく言語指導法(Task Based Language Teaching: TBLT)とは何であるか。それにはどのような長所と短所があるのか。そして、生徒が英語で効果的にコミュニケーションをとる力を育むにあたり、指導現場でどのように活用すればいいのであろうか。本稿では、TBLTが生徒のコミュニケーション能力向上をどのように促進、あるいは阻害するのかを論じる。古今の幅広い研究論文や書籍を踏まえて、TBLTの指導現場における良し悪しを明らかにする。

△紀行文要旨▽

職を探して8000マイル

原田 淳

アメリカで教員をしていた2000年夏、滞在許可の期限が迫り、雇用主であるニューヨーク教育委員会から見捨てられた僕は、翌年もアメリカにとどまるため、最後の悪あがきに出た。それは、車で全米を回って別の職を探すというものだったが、外国人でもあり運転の下手な僕にはかなり無謀な挑戦であった。職探しが主目的でありながら、しつかり旅も楽しんだ2か月の体験を英文でつづつてみた。

Function of Slums – A Case Study in Nice

Terutoshi AOKI

Abstract

Slums are recognized as one of the most serious matters today. Without any doubt, they raise problems because of crimes, living environment, or social positions in host countries. In these viewpoints, they should only be torn down. It is true from macro aspects. However, they might have their own functions so that immigrants can start their lives, becoming chances for them to be integrated into host society. This paper examines the importance for immigrants as well as the problems. In order to show them, a slum in Nice is discussed.

Résumé

Les bidonvilles sont reconnus comme l'un des problèmes les plus graves aujourd'hui. Apparemment, ils posent des problèmes en raison de la criminalité, du milieu de vie ou des positions sociales dans les pays d'accueil. Dans ces points de vue, ils devraient seulement être détruits, suivant des points de vue macro. Cependant, ils peuvent avoir leurs propres fonctions afin que les immigrants puissent commencer leur vie, devenant des chances pour eux d'être intégrés dans la société d'accueil. Cet article examine l'importance pour les immigrants ainsi que les problèmes. Afin de les montrer, je discuterai un bidonville de Nice.

Keywords – Nice , immigrants , slum , la digue des Français

Mot-clé – Nice , immigrants , bidonvilles , la digue des Français

0. Introduction

In Western countries, buildings are modernized and become “clean” today. Cities have torn down, or in the least have tried to tear down, slums if they have them so that they can keep or make their environment clean. In France, for example, it was reported that a slum in Calais was ruined¹ and on the 28th of November in 2017, the city of Paris ruined the biggest slum in the 18th arrondissement. It is clear that there exist slums even in European counties today.

Slums these days are not necessarily closely related to immigrants, but in the least until 1975, people from former colonies of France lived in slums in Nice. There are sociological studies on immigrants in Nice like Aoki (2011, 2017) and Aoki (2016) examined the relationship between

1 *L'OBS*, 09 février 2016 , « Calais, Paris... Les bidonvilles n'ont jamais disparu. Leur éradication est un mythe »

immigrants and the tourism industry there. In historical study by RUGGIERO, dir (2006), the city's rapid development after the WWII and decolonialization of Algeria led to the immigrants' increase in Nice in the middle of 1950s (p.225) and SHOR, et al (2010) points out that Nice became a cosmopolitan city by immigrants' arrival from various countries.

There are many studies on immigrants, but comparatively few examined their individual cases or lives in Nice. This paper focused on a slum from 1960s to 1970s, named "*la digue des Français*", referring to data from ADAM (Archives des Alpes-Maritimes), mainly YOUSFI (2009). GASTAUT (2004) showed that immigrants were discriminated in the growth in "trente glorieuses", meaning glorious thirty years after the WWII, which is very clear even in today's French society. However, the situation has been more complicated because immigrants have been required and their start to live, especially in slums, seems necessary so that France becomes what she is today.

In the study of immigrants' living conditions in France, many have focused on HLM (Habitation à loyer modéré, or low rent apartment buildings) and political studies examine the problems in ZEP (Zone d'éducation prioritaire, or education action zone). It seems, however, that more studies are required like those on SONACOTRAL (Société nationale de construction de logements pour les travailleurs algériens, or national official of construction of buildings for Algerian workers), SONACOTRA (Société nationale de construction de logements pour les travailleurs, or national official of construction of buildings for workers) or Adoma, which this paper mainly discusses.

1. The Slum of "*la digue des Français*" and its development

1.1. What is "*la digue des Français*"

From 1963 to 1964, there were hovels beginning to be built along the Var, on the west side in Nice, and gypsies lived there. They lived their lives like the homeless from May to October, but they lived in such hovels from November to April. Twenty to Twenty-five families, composed of 180 to 200 gypsies stayed there. From May to October, some families of elderly people, female and children didn't move. Around the end of 1964 to the early 1965, Maghreb with passports for tourists began to arrive there, and started to work in France. Many Tunisian people tried to reach agreements with gypsies and built hovels there. In 1966, the slum of "*la digue des Français*" expanded rapidly and in 1967, the second wave of immigrants, most of whom were from Tunisia, followed by Algerians. The gypsies left there by the middle of 1967. One of them complained that "at first the Tunisians, and then the Algerians occupied the hovels."² This means the slum started by the gypsies, but the situation was changed after the Maghreb' arrival.

Most of the Maghreb who settled in the slum "*la digue des Français*" arrived in other regions in France. They had stayed in France for six months, or more than a year. They lived in

² ADAM, 207 W133, « *Le biconville de la digue Français à Nice, Population et structures* » Rapport SONACOTRA, 1974

cities other than Nice, and came to this slum because they were forced to leave the slums where they lived and could not find their apartment house in SONACOTRA in Saint-André-de-Nice. One of the interviewed answered, "When I think of people from the northern Africa who could not get permission to live in SONACOTRA, and who do not have places to take a rest, ... while there is a plan to decrease the slum, some Africans only have long-distance bus seats as their beds to find building constructing which would be possible for their rooms, we have no choice but to develop the slum named *la digue des Français*."³ This response shows that slums function as their accommodation when they cannot find rooms in SONACOTRA even though they hoped to. The normal hovels in the slum "were 6m² wide, 1.90m to the ceiling, had only one entrance. Houses for shops were 15m² wide and had one gate and two windows,"⁴ These houses were not adequate for people to live in because they were too small for more people than the appropriate number to live in, because there was not a good water supply facility in the slum.

The slum "*la digue des Français*", or the last slum and one of the biggest slums in France was removed on the 16th of May in 1976. The city of Nice planned to build three SONACOTRA to let the Maghreb residents live in, before they made them leave *la digue des Français*. However, some people in Nice expected the plan to be delayed or to be canceled gradually because they had fear about the construction of SONACOTRA. In the project to construct SONACOTRA in the Riquier district in Nice, more than 1,000 residents presented a petition to express their fear. Later, persons elected by the residents overtly reported that all the people living there were against immigrant labours' arrival. The residents preferred condition where immigrants were isolated from them, and said that "people in *la digue des Français* rush to their own north African island after their labor in the day. They enjoy their traditional circumstance, and struggle with the uncomfortableness. They feel happy about these, and they do not bother others. They won't come to our city. This is why less immigrants come to the beach, promenade, or the Avenue Jean Médecin. The police noticed and welcome this situation because they can easily control them."⁵ Moreover, the Nice city carries out some project to avoid poor hygiene because they had to prevent water pollution and to offer minimum hygiene to the African people. Five wells were installed. They put enough finance and workers in to realise the plan to have Maghreb immigrants to move into the slum. Nice city tried to keep the former group and social structure the immigrants formed in the slum, so as not to destroy them.

YOUSFI (2009) shows the increase of population in the slum by nations. "On the 12th of December, there were 125 hovels in which 404 Algerians, 45 Tunisians, and 10 Moroccans lived."⁶ "A survey was made on the 13th of August in 1969, there were 170 hovels where 329 Tunisians,

3 ADAM, 207 W133, Rapport au Préfet des Alpes-Maritimes, « *Bidonville de la digue des Français à Nice* » 12 septembre 1969

4 ADAM, 207 W 133, « *Description du bidonville de la Digue des Français à Nice* », Note de l'équipe d'intervention sur le bidonville de la Digue des Français. Juin 1974.

5 ADAM, 207 W 133, Rapport au Préfet des Alpes-Maritimes, « *Bidonville de la digue des Français à Nice* » 12 septembre 1969

6 ADAM, 207 W122, « *Inventaire des bidonvilles du département des Alpes-Maritimes* »

113 Algerians, and 4 Moroccans.”⁷ “In the end of 1973, 1980 people lived in the slum of *la digue des Français*, 60% of whom were Tunisians and the others were from Algeria.”⁸ “Before the gradual destruction in May in 1976, there were 1200 living in the slum, 65% of whom were from Tunisia and the others were Algerians.”⁹ The change in population from 1968 to 1969 was noticeable. Algerian immigrants decreased their number from 404 to 133, reducing to a quarter of their population, while Tunisian immigrants increased from 45 to 429, gaining eight times in the end. In 1971, the population of Tunisian people and that of Algeria was almost the same. In fact, the number of people who arrived in Provence-Alpes-Cote d’Azur around 1965 was changed and there were more Tunisians coming there than Algerians. Nice is located along the Mediterranean Sea, which is one of the main reasons why it is easier for African immigrants to arrive there. However, since immigrants not only arrive in Nice but so many has tried to stay there, it might be thought that Nice has other reasons why they have come to Nice, and this is the main theme on this paper because it seems to have some reasons other than push-pull factors which are mentioned in the discussions on immigrants. If Nice were just the place to arrive, they would leave for other parts in France or in other European countries.

1.2. Conditions or problems in the slum

According to officials, slums were an economically lawless zone. Various businesses had developed, without application, permission or regulation, where animals were slaughtered, sold off, uncontrolled or unsanitary. Slums were “a cover for prisoners and criminals”.¹⁰ “Prices in slums are three times more profitable for business owners, given that they are tax-free. In fact, the business owner has no control. Shop owners take the entire profit without tax or liability deductions.”¹¹

City officials described slums as a cause of crime, like that the various “economic activities” in slums were in constant competition. “... Conflicts in this area often lead to armed conflicts. Concessions increase hostility between different groups, such as Algerian and Tunisian Kabyle, resulting in weekly conflicts and balance settlements. ...”¹²

Some slum bar owners armed themselves to protect themselves and the store. “Conflicts dominate the region, and the group upon request causes trouble for rival bar owners and keeps employees out of work. These interventions usually lead to shootings. The group performing is paid for the given work. ...”¹³

7 ADAM, 207 W125, fiche signalétique de la digue des Français, 1^{er} mai 1971

8 ADAM, 207 W133, « *Le bidonville de la digue Français à Nice, Population et structures* » Rapport SONACOTRA, 1974

9 Nice Matin, 15 mars 1976

10 ADAM, 207 W 133, Compagnie de gendarmerie de Nice, « Bulletin de Renseignements », 9 juillet 1970.

11 ADAM, 207 W 133, « Le bidonville de la digue des Français à Nice, Populations et structures » Rapport SONACOTRA, 1974.

12 ADAM, 207 W 133, Rapport au Préfet des Alpes-Maritimes, « Bidonville de la digue des Français sur la rive gauche du Var » 30 juillet 1970.

13 A.D.A.M, 207 W 133, Compagnie de gendarmerie de Nice, « Bulletin de Renseignements », 9 juillet 1970.

On the 17th of August in 1971, the slum became the stage for conflicts between "aggressive visitors" and slum dwellers. Sixteen Tunisians from different parts of Nice came to the slum armed with pistols and axes in search of fights from their compatriots. In the conflict, four Tunisians were injured, three were slightly injured and one was seriously injured. According to police, the cause of the conflict was a family conflict.¹⁴

Nice daily, *Nice Matin*, picked up the conflict between the two North Africans. "Yesterday morning, a dispute arose between North Africans in the slum *"la digue des Français"* on Route 170 in Grenoble. B.M., born September 12, 1947 in Kebili, Tunisia, took out a pistol and threatened A.O., born May 15, 1941, in Kebili. Witnesses and the police arrived and abandoned weapons."¹⁵

For city officials, slums were not only a place of residence, but also a place to hide various suspicions that bother immigrants. It helps various criminals, whether short-term or long-term, to find a cover for them. Due to the complexity of land occupancy, the term "Cache" came up among residents as well as officials.

"Some slum vehicles have radios pre-tuned to the radio frequencies of police and gendarmerie. In addition, the slums are protected by a high-altitude lookout turret. These precautions make it difficult to intervene. Many criminals, prisoners, etc. look for covers there (in the slum). It is possible that the slum becomes signs of crimes in Nice because of the residents' high concentration."¹⁶

"I am convinced that it is not North African workers who steal and procure these small bikes. The theft definitely appears to be carried out by young Europeans led by older leaders working as resellers in the slum. Small bikes are dismantled and assembled in slums and sold to Maghrebs. ..."¹⁷ As this testimony shows, usually many bikes, especially small ones, legally acquired in some ways went through the slum. This was one of the examples of illegality in the slum and worked as the source of crimes.

Besides the problem of violence, slums also have health problems. "No hygiene measures have been taken. Prostitutes use a simple basin for their day's work. Only 6 to 7 of them receive regular medical visits. It seems that there were reports that many venereal diseases had appeared. There are virtually no hygiene regulations, and in many cases venereal diseases are really dangerous to the city of Nice as a whole. Waste and domestic waste are stored right next to the slums, and rodents breed, so the danger of an epidemic continues. ..."¹⁸ Poor water conditions in homes are worse than in their home countries. Those who moved to SONACOTRA or other cities judged and regretted the slum lives.

14 ADAM, 207 W 133, Police urbaine de Nice, Compte-rendu d'intervention, 17 août 1971.

15 *Nice-Matin*, 29 mai 1972.

16 ADAM, 207 W 133, Rapport au Préfet des Alpes-Maritimes, « *Bidonville de la digue des Français sur la rive gauche du Var* » 30 juillet 1970.

17 ADAM, 207 W 133, « *Description du bidonville de la Digue des Français à Nice* », Note de l'équipe d'intervention sur le bidonville de la Digue des Français. Juin 1974.

18 ADAM, 207 W 133, « *Description du bidonville de la Digue des Français à Nice* », Note de l'équipe d'intervention sur le bidonville de la Digue des Français. Juin 1974.

Prostitution in the slum was a profitable industry for both prostitutes and prostitute mediators. The market price for prostitution was 5 to 15 francs, and the amount of income was divided between the mediator and the owner of the cafeteria there. "The North African slum '*la digue des Français*' in Nice turned out to be the true center of prostitution and mediators. In fact, there are 28 to 30 prostitutes. In addition, teenagers living in Nice and the surrounding area sometimes prostitute here."¹⁹ The slum was a base and famous for prostitution in Nice, which is also an example of illegal customs in the slum.

Prostitution is the one of the forms in slums that women can earn in societies. The questions must be raised about the importance of prostitution in the lives of singles and those who are married and come alone. In reality, prostitution is perceived as merely the "purpose" of sexual satisfaction. There is thought to be no serious relationship other than in a purely sexual sense. However, prostituted women reduced the numbers by getting places and jobs where she was brought to slums. Prostitution can be a way for women to start in host countries.

2. Relationships in slums

2.1. Relationships on the way to a slum

Since slums were chaotic and out of law, there was no public institution to manage land use and it is difficult to examine them. Residents in slums lived their lives in groups, and closely related with one another, living in relatively highly concentrated groups in several buildings. Groups were formed with the same social attributes, and they were sometimes changed. Group formation was based on the actual situation in the new living environment, the area of origin of their village, and whether or not to emphasize vigilante and their culture of origin were important element to make particular groups.

The roster was taken by county officials to investigate Tunisians' slum entry and exit.²⁰ This list provides accurate information about their birthday, birthplace, family status, employer and place of employment. It can be seen that they came from all regions of Tunisia, but mainly they came from the southern and central eastern parts of Tunisia such as Kébili and M'saken. These two regions accounted for 68% of the Tunisians who came to the slum. Of the total of 329, more than half, 172, were from Kébili, and 54 from M'saken. The same roster says all Tunisians who came to the slum in 1969 are men. They didn't have any family or children. Most of them had been married in their place of origin, but they came alone. The age group was from 18 to 50 years old, with the majority being 20 to 35, accounting for 71% of Tunisian workers living in slums.

Slums were the first addresses for those who came to Nice. Individuals who came to the

19 ADAM, 207 W 133, Compagnie de gendarmerie de Nice, « *Bulletin de Renseignements* », 9 juillet 1970.

20 ADAM, 207 W 133, lettre du commissaire principal, chef adjoint de la sûreté urbaine au commissaire divisionnaire, commissaire central, 18 août 1969, objet : « *Nord-africains installés dans le campement de la digue des Français* ».

slum community did not come on their own initiative and responded to their requests. The earlier arrivals formed groups based on their nationalities, and the latter immigrants were absorbed into such groups. Group formation was basically determined by the affiliation of the family in the place of origin. 21 M'saken and 107 Kébili workers came to the slum to reunite with several brothers.

Some immigrants came to live in *la digue des Français*. When they left their hometown, they had more or less all the information about the slum. The river, the image of *la digue des Français*, was associated with Tunisia. Words from these slum dwellers were spread across the French border in their Tunisian hometowns. Even if he couldn't reunite with his family in Nice, he was convinced that new arrivals could rely on people such as acquaintances, neighbors and friends to live in the slum. According to Yousfi's interview, the slum was known to M'saken natives as the first place for them to meet in Nice.

"Before I went to France, I heard someone saying 'river (= *la digue des Français*) in Nice'. The name was known by the M'saken people. Such popularity led to them living in the slum. When I arrived at Nice Airport, I asked a group of four fellow citizens who seemed to know me to give me the exact address of the 'river'. This is why I believed I can live there. I met a person from Kébili, who lives in *la digue des Français*. Such connection with his fellow countrymen enabled him to arrive at the district of M'saken natives. I searched for M (E.K.)'s staggered house, an old acquaintance of M'sakin. This is the only person I know in Nice."²¹

The person saw E.K. and therefore shows what the houses there were like.

"I arrived in front of the hovel and knocked on a door made of thick wooden plywood. There was one small dark room in it that had a mixed smell of damp, closed air and night sweats. I lived together with E.K. and two other M'saken persons in the hovel. The first week of my arrival was very tough, especially as I haven't prepared for poor hygiene conditions such as dust, odors and mice. Gradually, I became accustomed to the house. After working a day, I got tired in the evening and went back to the slums and slept without worrying about the surroundings."²²

This person's interview shows immigrants' motivation, situation, and condition. It reveals the relationship among immigrants in host society and the place of origin. The immigrants in France provided the information about the slum like location, people there. Persons in France seems to tell the people in the place of origin about the image of the slum, but it does not necessarily cover all. This is why they did not get prepared to live in the slum before their leaving. They got accustomed to the life in the slum by not changing their life condition but getting tired and having no choice but to live there.

New immigrants to the slum meant not just population growth or compatriots' increase. "People from 'bled' (meaning the place of origin) brought the latest information about their homeland to the immigrants in Nice."²³ Newcomers, surrounded by friends or fellows, were asked about

21 M. H. De M'saken. Date de l'interview : 15 décembre 2007.

22 M. H. De M'saken. Date de l'interview : 15 décembre 2007.

23 M. H. De M'saken. Date de l'interview : 15 décembre 2007.

their home country like whether it had rained, olive harvesting, or what happened in the village of origin. They knew everything about their place of origin, so when immigrants in Nice listened to a lot of news they felt as if they were back home. As evidenced in this interview, they have the latest external information and newcomers were valuable sources of information. Information about their hometown was one of the most difficult but most interesting things for former immigrants to get. Information about their position in France is directly relevant to their subsequent lives. Stores in Nice were also effective for immigrants to exchange the information about Nice, its labour market, how to deal with difficulties in their lives, new administrative measures to immigrants and products and prices. They had some information sources to live in France. Daily lives were clearly one of them, because they had to make conversation among them to live, but new immigrants to the slum were necessary for former immigrants to feel relaxed by knowing about their home country.

For some immigrants, the arrival at slums marked a new step in the Alpes-Maritimes. One of the interviewees by YOUSFI was born in M'saken and came to France in 1968. He had shared a room with two Algerians for four years and came to Nice. For three months after his arrival in Nice, he lived around Ariane with a fellow countryman from Kébili. "I met two M'saken men at the construction site of the 'River' slum. They both lived there since they came to France, or it sounds like that to me, but both were happy with the slum, so I decided to move closer to a new acquaintance."²⁴ To some the arrival at the slums meant an arrival in France, while others came to know the slum through personal relationships, which led some immigrants to enter the slum.

The division of the slum groups was made by the society of origin. In fact, the collective attitude of slum social structure was influenced by the work and social rules of the migrants' hometowns. The slum was geographically and socially positioned in French ways, but they retained their close relationship with the place of origin and residence. Individuals were members of the slum group, and they also collectively shared values, attitudes, and interests. This element strengthened the sense of unity of the group and formed the basis of unity among the members.

On the other hand, people from M'saken thought they were of the same tribe and completely different from "other Tunisians". "I know everyone from M'saken who lives in the 'river' and live in the same place together. Slum alleys and stores accept workers from other parts of Tunisia as well, but groups in each region keep a distance from other Tunisian ones. We are gathered by village of origin. Tunisian people from M'saken live throughout the district, and Kébili's natives live elsewhere, and Tunisians from Kef, north western Tunisia, live elsewhere."²⁵ A slum was a safe and solid place for immigrants because they were from their former families, their own villages or their hometowns. In addition, living in a community provided people living there with basic daily services and avoided hostile contact with the outside world, but the slum itself as a whole had a limited openness to outsiders, so some kinds of orders and autonomy were required, forming a solidarity within M'saken groups.

24 B. C. De M'saken, Date de l'interview : 9 octobre 2007.

25 R. K. De M'saken. Date de l'interview : 21 décembre 2007.

How the slum gained dwellers was determined by their local affiliation as well as their national identity. Except for the commercial center occupied by Tunisian or Algerian staggered houses, there was a clear separation between districts of different nationalities. From south to north, along the central boulevard of the slum, the structure was as follows; first of all, Tunisian and Algerian districts, followed by a small Tunisian town, and then an Algerian town. And the northern half of the slum was mainly occupied by Tunisians. Unlike the Algerians, who lived in harmony regardless of their place of origin, immigrants were geographically segregated within the Tunisian community by their native region in Tunisia. Each district was divided by the community of each village in Tunisia. Such groups were completely separated geographically, usually based on kinship. In their village of origin, families maintained a relationship with each other. Similarly, in slums, a person could only belong to the same group of the same village of origin.

The staggered houses in the slum reflected social identity. 76% of Tunisians living in the slum lived together there, 61% with their parents and 15% with friends. These measures promoted relationships between groups of origin and clarify the placement of locations in the districts of the slum. This enabled all Tunisian hometown groups to be geographically located within the slum. The word community could not be applied to the Tunisians as a whole. Each group was an independent unit.²⁶ Different groups were formed by differences and gaps. Such organizing in the slum encouraged immigrants' unity and clarified the group locations geographically by belonging to the same socio-geographical groups.

In slums, groups represented relationships with other groups in social and geographical space, and in two ways: showing relationships between groups in social space and showed the global external community. The separation of residential areas between Algerians and Tunisians resulted in some sort of stigma, at least from Tunisians to Algerians. Moreover, the word "group" had different perceptions and definitions, according to testimony from the three Tunisians who moved into *la digue des Français*.²⁷ There may be a difference in sensation between the Algerian and Tunisian community. Interviewers made a clear distinction between the two national communities. "We Tunisians avoid problems and respect the law. Algerians tend to quarrel and force local governments to monitor our slum."²⁸ In the slum of *la digue des Français*, the Tunisian and Algerian dwellings were largely separated, and even among Tunisian immigrants, groups were divided according to their place of origin. In this way, they had an environment where values could be easily shared and obtained, and communication was facilitated smoothly. On the other hand, there was a great difference between groups, especially by nationality.

2.2. Commerce and relationships within the slum

Accommodation is the main economic activity in slums. In fact, while they are places of

26 20ADAM, 207 W 133, « *Le bidonville de la digue des Français à Nice. Populations et structures* » Rapport SONACOTRA, 1974.

27 YOUSFI, N.,(2009)

28 B. C. De M'saken, Date de l'interview : 9 octobre 2007.

life for many immigrants to prevent rain and wind, slums give, in a sense, good chances to economic activities. Only 40% of the buildings were for sale and 60% were for rent in the slum of *la digue des Français*. The first purchaser acquired slum land and then used land owners' rights. The hovels built in *la digue des Français* were resold to newcomers to the slum. The new owner would resell when moving to a new location in France or going back to his country of origin. In the latter half of 1973, prices were negotiated between FF500 and FF2000, depending on the construction method. In fact, the staggered houses were a true "trust" asset in commercial business, such as renting a hovel to a worker or a group of workers. The rent ranged from 30 to 100 francs, depending on the construction method. All Maghreb real estate owners could live on rent, other than in slums. One of them owned more than 10 staggered houses by themselves and lent them to 40 workers. On average, he asked to pay 60 francs per person, so he earned 2400 francs.²⁹

Besides the "housing industry", some economic activities developed in the slum. Some people in the slum business could earn their entire income solely from the profits of the business. In November 1973, there were 51 cafes, 21 grocery stores, 14 butchers, 15 clothing stores, 2 tailors, 4 barber shops, and 1 motorcycle repair shop. These slum businesses were carried out in Maghreb real estate. However, in the slum business, not only business owners but a group of workers tried to do business. There were also businesses by real estate owners of salaried workers who wanted to earn more income through commercial activities. These commercial activities were of interest not only to slum dwellers, but also to Maghreb people in other parts of Nice. Only one European beverage and grocery wholesaler delivered the goods to *la digue des Français*. He owned several commercial areas, bistro and grocery stores in the slum, leaving the management to Maghrebs. Many shops were open from 6am to 10pm. The clothing store was open only on Saturdays and Sundays, and people living outside the slum and those who came to shop could also come to the store.³⁰

Slums were not only places of residence for 2000 Maghreb workers, but also places of meeting and exchange for many other North African immigrants living in the Alpes-Maritimes. "I remembered and lived in a cultural atmosphere that I couldn't find anywhere else. I could feel traditional Arab markets, and exchanged information and discussed issues so that I could meet the cultural needs of immigrants."³¹ "Many stores were open on weekends, with Maghreb people from other parts of the city shopping and visiting parents and friends, which represented an Arab market feeling. The slum is now a gathering place for the entire Tunisian community."³² The only time everyone gets together in the slum is Saturday and Sunday. But "lately, our slum has become a

29 ADAM, 207 W 133, « Le bidonville de la digue des Français à Nice, Populations et structures » Rapport SONACOTRA, 1974.

30 25ADAM, 207 W 133, « Description du bidonville de la Digue des Français à Nice », Note de l'équipe d'intervention sur le bidonville de la Digue des Français. Juin 1974.

31 ADAM, 207 W 133, « Le bidonville de la digue des Français à Nice, Populations et structures » Rapport SONACOTRA, 1974.

32 ADAM, 207 W 133, lettre du commissaire principal, chef adjoint de la sûreté urbaine au commissaire divisionnaire, commissaire central, 18 août 1969, objet : «Nord-africains installés dans le campement de la digue des Français »

place for many non-Maghreb non-residents to walk and shop, and 'slum dwellers' are interested in shopping, distractions, and rarely sexual consumption."³³ "... on Sundays, the atmosphere becomes that on holidays. The cafeteria is busy, the guys play cards at their own hovels, many others walk down the main street, and girls prostitute themselves behind the store. Some men are drunk. Arab and European songs are played at the turntable. ..."³⁴ These activities show that they could maintain their lifestyle in their hometown by their lives in the slum. Their lives themselves were important element to keep what they were.

The expansion of commerce in the slum seems to be due to socialization and interaction with fellow citizens, rather than the economic function itself. Conversations with clerks are an excuse to "individualize" and socialize customers who recognized themselves to be isolated during their working hours. The reason for interacting with the merchants in their native language is to learn French after returning from the day's work, such as jargon that they were exposed to for six hours and did not understand. French is used by staff, field managers, orders and forcible refusals, and rarely in personal interactions, making workers feel alienated.³⁵

The presence of commerce serves as a security function in the immigrant community. Shops for friends, cousins, and brothers are places to stay, social places, places to meet and interact with people from the same country, and places to gather information. According to the testimony of slum dwellers, the cafe is a place of interaction for Tunisians of all origins. Various information was exchanged at such places. As mentioned above, they were also places where old immigrants could get information about outside the slum from new comers and know what they needed for their daily lives and labor in France.

3. Meaning of discussion on the slum "*la digue des Français*" in the field of social science

International sociology has examined the mechanism of immigration, such as push-pull factors through analysing individual immigrants' cases. Especially in America, sociologists have conducted their study by their fieldworks, examining in which of area minorities tend to live or from the viewpoints of segregation.

This paper does not clarify Tunisian immigrants' reasons for their emigration in each case, but most immigrants were male, so it can be estimated that they left their home country to earn money for their family by working as unskilled labourers. This kind of "push factor" is not new in the new immigrants's study.

33 ADAM, 207 W 133, « *Description du bidonville de la Digue des Français à Nice* », Note de l'équipe d'intervention sur le bidonville de la Digue des Français. Juin 1974.

34 ADAM, 207 W 133, Gendarmerie nationale, Compagnie de Nice, Rapport du chef d'escadron, commandant de la compagnie au Lieutenant-Colonel, commandant du groupement de Gendarmerie des Alpes-Maritimes, Nice, le 3 mars 1969.

35 ADAM, 207 W 133, « *Le bidonville de la digue des Français à Nice, Populations et structures* » Rapport SONACOTRA, 1974.

Three perspectives are essential for the slum "*la digue des Français*". (1) The perspective of the slums from the outside world, like that of referring to city officials and how the media reported. (2) The perspective against Algerian immigrants from the perspective of Tunisian immigrants. (3) The perspective of being among Tunisian immigrants.

A brief summary of the former studies seems to be necessary. CUTLER, GLAESER and VIGDOR (1997) classifies the ghetto as racial segregation (PP. 475 – 477). Slums and ghettos have similarities in that they are both segregated by socio-economic indicators in specific areas.

The idea of "Port of Entry" shows that ghettos function so that new comers are assimilated into new environments in the host society. Immigrants try to rebuild social circumstances like finding goods in their home country, which can be realized through making a racial group in an area. According to this thought, a slum can be an intermediary for new immigrants to the host country, making it easier to get accustomed to the new environment. In "Collective Action Racism", ghettos are the consequence of collective actions by the white so that the black people can be forced to be segregated. The collective actions include policy measures such as racial divisions and arrangements prohibiting sales to blacks, as well as violence and the use of force to prevent blacks from coming to the neighborhood of whites. "Decentralized Racism" shows that ghettos are formed even when the whites do not have any intention to eliminate the black people. In this case, the white people just hope to live among the white, resulting in making a district where only the white live. The white pay higher living expenses in order to live with other whites, while blacks are reluctant to pay so that they can live in the area where the whites live. As a result, ghettos are maintained without any desire.

In examining the slum in Nice, "Collective Action Racism" seems to be the most similar. However, the crucial reason for forming the slum was its relatively low rent. There were no positive political actions. The slum was already formed by gypsies and the Maghreb took it over. In this point, a classical study like SHAW and McKAY(1942) should be referred to because they focus on the effect by the different income. Relatively poor people were the residents in the slum. In other words, the point (1) can be found in early studies. However, in the case in the slum *la digue des Français*, though the race is the same, Maghreb, the differences of nationality played important roles to form groups and resident areas, where the point (2) matters. Moreover, even in the same nationality, in the case of Tunisian immigrants, the differences of their hometown were an important element to make groups, which makes the point (3) necessary to discuss. Considering these aspects, the idea of "Port of Entry" by CUTLER, GLAESER and VIGDOR comes to the point.

The research on isolation so far have mainly focused on the perspective of the host society. They have discussed, for example, how to solve the houses with poor conditions, how to develop the immigrants' possibilities, how to protect their rights, and so on. However, in the slum *la digue des Français*, areas were divided based on their country of origin (Tunisia or Algeria), and group formation was dependent on their region or village of origin. Such distinction was made not by positive actions from outside of the immigrants' society with measures by France as the host country, Alpes-Maritime, or Nice city as the administrative level, but negative ones as if the division was just a consequence the immigrants reached because they intentionally chose to live closer with

each other. This situation can be similar to Decentralized Racism by CUTLER and GLAESER, who insist that the white segregate the black. In contrast, in the slum *la digue des Français*, immigrants themselves made their own territories, which can be recognized as “reverse ghettoization” or “positive ghettoization”. Usually immigrants are equated in only one category of “Maghreb” from the viewpoint of states or region, but the case in *la digue des Français* suggests the importance of united race category of the Maghreb as a whole but the element of differences between Algerians and Tunisians. Moreover, Tunisians should be classified in more ways among their place of origin. Components detailed according to culture, custom, or interest give necessary and appropriate information to immigrants more effectively because each person has each condition or situation. Through this process, the differences among immigrants can be solved, which enables them to live in the host society where social manners are different from theirs, because they can share their individual problems to overcome more easily with other immigrants closer to themselves and they can find their own ways to live with their different custom, some of which should be abandoned and others of which can be maintained. In the Tunisian cases, immigrants knew about the slum when they left Tunisia for France, by which they had had some prospects to live in France before their departure.

4. Conclusion

In the studies on living environment, policies for hygiene and health are emphasized and many research papers have dealt with them. It is true that such circumstances should be improved for people to live comfortably, or to live with their human rights in many immigrants' cases. However, the research about the political level do not focus on human relationship inside the areas. Slums have a bad image from the outside and their evaluations are not necessarily good. Even this paper does not disagree, because it might be much better if people could live happily, without living in bad conditions like in the slum. However, this does not mean that we should ignore the function of slums. The close relationship, self-help and autonomous system should be researched more.

The subdivided relationships within the immigrants were made possible by the groups formed by “reverse ghettoization” because they could share their own values and culture in faraway country from their native ones with people who were closer to them. Such similarity was crucial when they tried to identify problems or hardships, based on their individual cases, which enabled them to find solution in each situation.

The studies on immigrants have not clarified the everyday state of immigrants, which YOUSFI (2009) tried to. Research about them has mainly focused on the conditions from outside the immigrants, but internal affairs should not be ignored. Immigrants formed groups dependent on each background to lessen their risks in the host society, which also served as the ways to reduce their hardships there so that they could come to live in a different country.

Slums are far from desired because of their environments. However, human relationship there would be the exact opposite of modern individualization and isolation. The “gesellschaft” and “gemeinschaft” by Tönnies. are going to be recalled. Immigrants leave their place to earn more

money. Such purposes made them emigrate, but in the destinations, which are far from their own country, the farther they are, the more mutual aid from others people require, which result in relative *gemeinschaft* ties in host country. These encounters would have never happened if they had stayed in the place of origin. In immigration, people stay in faraway countries in relatively long- or mid-term. This is why people try to help one another, and it is interesting that these ties were realized in slums in the country far from their places of origin among people so far disconnected from their homeland.

5. References

- AOKI, T. (2011) 「ニースという都市とアフリカ系移民—移民への視線、移民からの視線—」 in 宮島喬編『移民の社会的統合と排除—フランスの現状及び課題を中心に—』 or “Nice and African Immigrants – aspect against immigrants and from them” in MIYAJIMA, T. ed “Social Integration and Elimination of Immigrants – Situation and Problems in France Today” pp. 81 – 93
- — (2016) 「国際観光都市における観光イメージと移民—ニースを事例に—」 or Immigrants and Touristic Image of International Tourist City – A Case Study in Nice
- — (2017) 「ニースにおける移民構成の歴史的経緯と差別」 or Immigrants in Nice – Historical Perspective and Discrimination
- CULTER, D., GLAESER, E., and VIGDOR, J., (1997) « The Rise and Decline of the American Ghetto », in *Journal of Political Economy*, The University of Chicago Press, Chicago
- GASTAUT, Y.,(2004) « Les bidonvilles, lieux d'exclusion et de marginalité en France durant les trente glorieuses », in *Cahiers de la Méditerranée*, Vol. 69
- RUGGIERO, dir.,(2006), *Nouvelle histoire de Nice*, édition Privat, Toulouse
- SHAW, C., and McKAY, H., (1969), *Juvenile delinquency and urban areas : a study of rates of delinquency in relation to differential characteristics of local communities in American cities / by Clifford R. Shaw and Henry D. McKay. With a new introd. by James F. Short, Jr., and new chapters updating delinquency data for Chicago and suburbs by Henry D. McKay*, University of Chicago Press, Chicago
- SHOR, R., et al. (2010), *Nice cosmopolite 1860-2010*, édition autrement, Paris
- Simon, G.,(1979) *L'espace des travailleurs tunisiens en France : structure et fonctionnement d'un champ migratoire international*, Poitiers
- YOUSFI, N.,(2009) «Les Tunisiens dans le bidonville de «*la digue des Français*» à Nice» in *Recherches Régionales* no 194, Conseil Général Alpes-Maritimes

Archives

- ADAM, 207 W122, « *Inventaire des bidonvilles du département des Alpes-Maritimes* »
- ADAM, 207 W125, fiche signalétique de *la digue des Français*, 1^{er} mai 1971
- ADAM, 207 W 133, « *Description du bidonville de la digue des Français à Nice* », Note de l'équipe d'intervention sur le bidonville de *la digue des Français*. Juin 1974.

- ADAM, 207 W 133, Gendarmerie nationale, Compagnie de Nice, Rapport du chef d'escadron, commandant de la compagnie au Lieutenant-Colonel, commandant du groupement de Gendarmerie des Alpes-Maritimes, Nice, le 3 mars 1969.
- ADAM, 207 W 133, lettre du commissaire principal, chef adjoint de la sûreté urbaine au commissaire divisionnaire, commissaire central, 18 août 1969, objet : « *Nord-africains installés dans le campement de la digue des Français* ».
- ADAM, 207 W 133, Police urbaine de Nice, Compte-rendu d'intervention, 17 août 1971.
- ADAM, 207 W 133, Rapport au Préfet des Alpes-Maritimes, « Bidonville de la digue des Français à Nice » 12 septembre 1969
- ADAM, 177 W 494, Secrétariat d'Etat auprès du Ministère du Travail (Travailleurs immigrés), Programme urbain d'action à moyen terme en faveur des immigrés du département des Alpes-Maritimes (1976-1980).
- ADAM, 207 W133, Rapport au Préfet des Alpes-Maritimes, « Bidonville de la digue des Français à Nice » 12 septembre 1969
- ADAM, 207 W 133, Compagnie de gendarmerie de Nice, « Bulletin de Renseignements », 9 juillet 1970.
- ADAM, 207 W 133, Direction de l'aménagement urbain, Paris le 27 mai 1974.
- ADAM, 207 W133, « *Le bidonville de la digue Français à Nice, Population et structures* » Rapport SONACOTRA, 1974

Interviews

- B. C. De M'saken, Date de l'interview : 9 octobre 2007.
- M. H. De M'saken. Date de l'interview : 15 décembre 2007.
- R. K. De M'saken. Date de l'interview : 21 décembre 2007.

Newspapers

- *Nice Matin*, 15 mars 1976
- *Nice-Matin*, 29 mai 1972.
- *L'OBS*, 09 février 2016 , « Calais, Paris... Les bidonvilles n'ont jamais disparu. Leur éradication est un mythe »

Task Based Language Teaching in a pedagogical context, its strengths and weaknesses.

By Samuel Lilley

1.0 Introduction

The choice of syllabus for specific teaching situations requires careful analysis. The strengths and weakness of the syllabus and its suitability within the classroom environment, age and skill level of the pupil should be a prime consideration for the teacher. Task-Based language teaching (TBLT) is one approach to language teaching that prioritizes meaning but does not neglect form (Ellis, Skehan, Li, Shintani, & Lambert, 2020).

2.0 A task in a Language teaching context

What is a task? Collins (n.d.) online dictionary defines a task as an activity or piece of work which you have to do, usually as part of a larger project. Long (1985: 89) goes a little deeper by describing it as “*a piece of work undertaken for oneself or others, freely or for some reward.*” Tasks can be anything that fit this explanation as this is a general, non-technical, non-linguistic (Nunan, 1989). For a definition in a pedagogical context, there is a great deal of variation in language teaching as to what a task is (Brown, 2005).

2.1 Task Based learning a pedagogical definition

Richards (2001) suggests when a real-world activity is transferred into the classroom it becomes pedagogical in nature. So, an activity or action which is carried out as the result of understanding or processing language. For example, listening to an instruction or drawing a map while listening to a tape and performing a command may be referred to as tasks.

Breen (1987: 23) offers a further definition of a task as “*any structured language learning endeavour which has a particular objective, appropriate content, a specified working procedure, and a range of outcomes for those who undertake the task.*”

This is a broad definition and to offer a more synthesised view of what a task is in the language classroom Skehan (1998: 95) defines a task as an activity where

- Meaning is primary
- There is some communication problem to solve
- There is some relationship to real world activities
- Task completion has priority
- The assessment of the task is in terms of the outcome

Put simply by Skehan “*a task is an activity which requires learners to use language with an emphasis*

on meaning rather than to attain an objective.”

Lee (1995) goes further by saying that it requires two or more autonomous participants and that the focus should be on the learners use of language, not the teachers.

A task in a pedagogical context is therefore primarily focused on the *negotiation of meaning* (Ellis 2002). The main purpose of a task is to provide a context for processing language communicatively.

2.2 Task Based Language Teaching

As discussed in the previous section TBLT is primarily focused on meaning. Willis (1996) presents TBLT as a natural progression of Communicative language teaching (CLT) as

- Activities involve real communication for language learning.
- Activities, where language is used to perform tasks, promotes learning.
- Language that is meaningful to the learner, supports progress.

An early application of a TBLT approach based on this CLT framework is Prabhu's (1987) Bangalore project. Prabhu evolved an approach based on the principle that learning of *form* is best carried out when attention is given to *meaning* (White, 1988).

2.3 Form and meaning

Ellis (2020) talks about the importance of meaning in TBLT whilst not neglecting form. In language teaching, there are several approaches to teaching form. Willis (2007) gives the example of Presentation, Practice, Production (PPP) a well-known form-based approach that begins by highlighting one or two new forms and illustrating their meaning. Learners then go onto practice that form, carefully controlled by the teacher. The control is gradually relaxed until the learners are sufficiently able to produce the target form in an activity. The stress here is on *accuracy* of form.

Meaning based approaches, in contrast, try to encourage learners to use the language as much as possible, even if some of the language they produce either spoken or written is inaccurate. The students themselves think about how best to express their opinions and ideas. When they do this, they are thinking about language in general and searching their own language repertoire for how best to communicate. They are not just focusing on form; they are focusing on language (Willis 2007: 4) TBLT is such an approach.

2.4 Types of tasks in TBLT

Here are four examples from Willis (2007: 33-61) of some TBLT tasks.

- Tasks based on written and spoken texts, which would include discussions based on an opinion or a survey.
- Prediction tasks involving reading and speculation.
- Information gap or Jigsaw activities where one student or group has a certain amount of information and another individual or group has different information. The students must therefore negotiate with each other to acquire the full meaning.
- General knowledge tasks which engage learners' knowledge of the world prompting discussion,

an example would be getting students to look at facts about animals and ask if they believe they are true or false.

Richards (2001) offers two types of TBLT that can be proposed for syllabus design pedagogical *tasks* and *real-world tasks*. *Pedagogical tasks* include,

- Problem solving tasks where students must work together to solve a set problem that has a set solution.
- Decision-making tasks where students must negotiate, discuss, and solve a problem, usually with multiple outcomes.
- Opinion exchange tasks where students discuss and exchange ideas. They do not need to reach an agreement.

The ultimate point of these pedagogical tasks is an attempt to provide a real-world experience through interaction. There is evidence to suggest that learners can be taught to engage with each other and with a task so that they reap benefits from group interaction Naughton (2006). Students are encouraged to negotiate meaning with each other. This is at the heart of TBLT and its main strength as a syllabus choice.

3.0 Task based learning Strengths

3.1 Real language

As Willis (2007) suggests, some of the most successful activities in the classroom are “spontaneous” exchanges of meaning. Maybe a personal story is shared that piques the interest of students allowing for personal involvement and an interesting and lively discussion takes place with minimal vocabulary and rephrasing from the teacher, allowing for a free flow of *real language* to take place.

Often however this kind of spontaneity is difficult to achieve. It is after all spontaneous. Therefore, teachers need to come up with methods to allow this kind of *real language* to take place TBLT approaches are increasingly popular for this reason. Proponents such as Willis (2007) argue that TBLT is the most effective way to engage learners in real language.

3.2 Communicative competence

Communicative competence is an expansion of Chomsky's definition of competence and was coined by Hymes (1972). Hymes concept of communicative competence was based upon communication within a socially and culturally meaningful context (Shrum & Gilsan, 2016). The concept was further revised by Murcia (2008) to include a more defined set of six factors. They are as follows, sociocultural competence, discourse competence, linguistic competence, formulaic competence, interactional and lastly strategic competence. The outcome of this model of communicative competence is that students need more than grammar or linguistic knowledge to function in a communicative setting (Shrum & Gilsan 2016).

3.3 Communicative competence in TBLT

Cooperative learning in research by Johnson and Johnson (1998) suggests that the technique often produces higher achievement, develops interpersonal skills, and improves language retention. It has also been shown to improve self-esteem and acceptance of differences in learners. Most importantly when students are cooperating on a task, they can witness other students' problem solving and cognitive processing strategy (Kohn, 1987). All these interpersonal skills are invaluable and help develop interactional and strategic competence. Through *actional competence*, knowledge of how to perform speech acts, in the target language (TL) through interpersonal exchanges. Through *conversational competence*, that is taking turns, establishing, and changing topics, opening, and closing conversations and interrupting at the correct times (Murcia, 2008). Most importantly, for those interested in a TBLT approach, is strategic competence which contains the use of learning strategies and communication strategies to compensate for deficiencies in other areas of competence. This is achieved by the L2 learners through interacting, appealing for help or clarification to *negotiate the meaning* of a message received in the face of a misunderstanding (Shrum & Gilsan 2016). This negotiation of meaning is at the core of the TBLT approach.

3.4 Output hypothesis

Krashen (1982) argues that input is both a sufficient and necessary condition for language learning to take place. Swain (1985) however maintains that input is insufficient for language development. She argues that learners need opportunities to produce output. Learners need to speak the language to achieve higher levels of language competence (Shrum & Gilsan 2016). According to Swain (1995) output or speaking to communicate one's ideas, facilitates language acquisition. As it helps the learners discover there is a gap between what they want to convey and what they can convey. It allows learners to try new rules and modify them in real time. Finally, it helps learners reflect on what they want to know about the target system.

3.5 Output hypothesis in TBLT

According to Swain (2000) learners engage in metatalk (talk about talk) to co-construct linguistic knowledge whilst engaging in a task using *Collaborative Dialogue*. This type of scaffolding allows learners to test their own ideas about the correct forms to use. It is a key feature of the TBLT approach as the learner "*gradually reaches out for grammar from a secure basis in words*," (Batstone 1994: 104). Put in another way students negotiate meaning with themselves.

3.6 Longs interaction hypothesis

According to Long (1983), input can be made comprehensible by individual learners in 3 ways.

- Simplifying input, is done by using familiar structures and vocabulary
- Using linguistic and extra linguistic features, as in familiar structures, background knowledge and gestures
- Finally, by modifying the interactional structure of the conversation.

It is this final part that is at the core of Long's (1981) interaction hypothesis where he contends that input is modified and contributes to comprehension and acquisition. This point is further explored by Long (1996) maintaining that speakers make changes in their language as they interact or negotiate meaning. "*negotiation for meaning, and especially negotiation for work that triggers interactional adjustments by the native speaker (NS) or more competent interlocutor, facilitates acquisition because it connects input, internal learner capacities, particularly selective attention and output in productive ways.*" (Long, 1996: 451)

3.7 Long's interaction hypothesis in TBLT

Interaction occurs when two or more people engage in communication (Ellis, Skehan, Li, Shintani, & Lambert, 2020). As mentioned in section 3.1 on real language use, Willis (2007) claims that some of the most successful classroom activities promote spontaneous language use, although spontaneity is difficult to achieve. Ellis (2005) gives a good argument for the use of form as support in TBLT, to complement strategies that promote implicit learning. Incidental acquisition is more likely when learners are primarily focused on meaning, making and taking time out to attend to form when the occasion calls for it (Ellis, Skehan, Li, Shintani, & Lambert, 2020).

3.8 Summary

I have focused a great deal on the negotiation of meaning in relation to TBLT as I consider it to be the approaches' greatest strength. It allows as Willis (2007) states, *real language* to take place across many levels. Within communicative competence using a TBLT approach helps develop interactional and strategic competence. With output hypothesis learners engage in metatalk using collaborative dialogue as the learner reaches out for more understanding. Finally, through Long's interaction hypothesis where input is modified and contributes to comprehension and acquisition. TBLT as an approach allows learners to negotiate their own form of language, use it and then modify it as they see fit.

4.0 Weaknesses

As Richards (1986) states TBLT is an approach, not a method, nevertheless it has its critics. Many criticisms come from the examination of the theoretical underpinnings of the approach itself as Swan (2016) discusses. Its status as Hadley (2013) quoting Littlewood (2004) "as a new orthodoxy." Finally, Fotos (2002) considers the cultural differences of using TBLT. All these criticisms will be discussed in greater detail in the following sections.

4.1 Swan and the three hypotheses

To fully understand Swan's (2016) criticism of the theoretical underpinnings of TBLT It is necessary to understand the rationale behind it. Nunan (1991) talks about how language learning activities should reflect what the learners potentially or need to do with the target language. TBLT is therefore

justified by Nunan`s (1991) *rehearsal rationale*. There are three hypotheses associated with this, they are as follows.

- Online hypothesis: Language acquisition takes place principally or solely through communication (Schmidt, 2001)
- The noticing hypothesis (Schmidt and Frota, 1986) the conscious noticing of language elements is necessary to trigger acquisition.
- The teaching hypothesis (Pienemann 1998) procurement of second language syntax follows the developmental sequences in ways that are not easily manipulated. Therefore, this renders a predetermined structured syllabus unfeasible.

4.1.1 Swan and the on-line hypothesis

Swan (2016) argues the claim that acquisition only takes place online during communication and is dependent largely on extrapolated data distant from the classroom. Swan cites research on working memory by Cowan (1993) which suggests that working memory makes available a cognitive window of perhaps 40 seconds, during which the mapping of form to function is possible (Dougherty 2001: 226-227). However, Swan considers that further research might strengthen this argument. He believes that the evidence does not provide a solid enough platform for "*powerful and restrictive announcements about pedagogy*" (Swan, 2016: 379).

4.1.2 Swan and the noticing hypothesis

Swan (2016) argues that the noticing hypothesis is just that; a hypothesis. It is, he writes, based on the informal experience of one of its proponents Schmidt`s (1986) learning of Portuguese and that it seems highly unlikely that everything language learners acquire can derive from conscious noticing. Swan continues his argument by giving the example that many competent L2 speakers correctly use allophones of /p/. However, they do not necessarily have a conscious awareness of it. Many English speakers are aware of relatively complex English grammar points, but they are unaware of how they arrive at their understanding.

4.1.3 Swan and the teachability hypothesis

Finally, Swan (2016) argues that the teachability hypothesis is flawed. He contends that it is unclear why a fixed internal syllabus nullifies pre-planned structure during teaching, as it should not undermine focus on form during TBLT. He maintains that if it is pointless to give a lesson on relativization on a Tuesday because it is unclear who is developmentally ready for it, it is also useless to draw attention to relativization within a task on a Thursday. "*One can, of course, claim that task-based work enables teachers to deal with structures on an individual basis—particular problems will become salient for particular students as they are ready for them, and can be taught accordingly. But this argument conflates salience with readiness: learners may notice that they lack a difficult structure long before they are ready to learn it.*" (Swan, 2016: 381)

4.2 The new orthodoxy

Hadley (2013) uses a book review of Martin East's *Task based language teaching from the Teachers perspective* to offer the criticism that TBLT is itself as Littlewood (2004) states "a new orthodoxy." Hadley builds on this by arguing that TBLT itself has spread akin to religion, with adherents all over the world. There are arguments between scholarly proponents, the priesthood, and classroom practitioners the adherents, as to what a task is. The only agreement is that a task itself, in whatever form, is a "good thing." (Littlewood 2004: 319). This lack of common understanding leads to difficulties in the actual implementation of TBLT in the language curriculum. In fact, Van Avermaet and Gysen (2006) identify the issue of *specificity and extrapolation* when devising tasks and creating sequences for use in the L2 classroom. These issues create the problem of potentially "endless tasks" with specificity. The issue of extrapolation is the fact that "it cannot be taken for granted the performance of one task implies that a person will be able to perform a more or less similar task" (Van Avermaet and Gysen, 2006: 29).

4.3 Cultural issues and frequency of occurrence

Fotos (2002: 143) points out that performing a task is culturally linked to western instructional methodology. Some of the activities that constitute a well-run and effective TBLT lesson can be considered unadvantageous. Swan (2016) also talks of language teaching "time constraints". Some secondary school L2 language learners have as little as three hours a week to learn. So, within such a short time period other important language that falls outside of the framework of the task-based lessons is lost. This is also connected with Schmidt and Frota's (1986) noticing hypothesis. With such a short amount of time being exposed to L2 forms, the chance of consciously noticing important elements of language becomes more difficult. As Schmidt (1990: 143) theorises, frequency of occurrence is important if noticing is to lead to acquisition.

4.4 Summary

TBLT's critical weakness is its basis in several theoretical principles. As Swan (2016) discusses, the theoretical research that underpins the approach lacks supporting evidence. This argument is countered by various proponents of TBLT stating as Long (2015) does, that there is in fact ample evidence to prove the online teaching and noticing hypotheses; all of which Swan rejected. However, as Hadley (2013) talks about, upon reading the postscript of East's (2012) book which provides information on East's qualitative study. We learn that East chose research informants "who are likely to be sympathetic to TBLT" (Hadley, 2013: 195). This is problematic, in that as any study that admits this, is likely flawed.

5.0 TBLT in the classroom

In the following section, I will discuss my own experiences using a TBLT lesson in my classroom environment. I will analyse where TBLT suits and does not suit a particular syllabus or class. For

context I did the same lesson with two 2nd and 3rd year Junior High School (JHS) groups of Japanese private schoolboys, there were 10 classes with 22 students in each class. Also, there were two 2nd and 3rd year JHS groups of Japanese private school girls, in 8 classes with 22 students in each class. Both the boys and the girls are from separate single sex schools.

5.1 Guess what the animal is

The following task is taken from Willis (2007) and is adapted from Appendix 1.4 a guessing game from Theron Miller. I adapted the game slightly to better suit time constraints and my students' abilities. The original task was for 18-19-year-old low intermediate college students. My students are between 14-16 years old and are of mixed ability. Here is a brief explanation of the structure of the task:

1. The class was split the class into groups of 5 or 6. Each group was given a piece of paper and told to choose a team leader.
2. Students were given a spoken example and they guessed what the animal was (a snake)
3. In their teams, the students were given a minute to choose an animal.
4. The students then had 5 minutes to write as a team 5 or 6 sentences one for each member describing the animal, at no point was any help given. Except for checking to make sure the students were on task.
5. The teams chose a different leader to read the 5 or 6 sentences 2 times and the students tried to guess what the animal was. The teams were awarded points for each incorrect guess.
6. The game was repeated with Cartoon characters.

5.2 Thoughts on the task

The two institutions where I tried this task are socioeconomically similar. But the behaviour and level of English are vastly different. Both sets of students really enjoyed the task and were extremely disappointed when we resumed our regular lesson, which used a more structured PPP approach. In both schools, there are time constraints in our regular lessons which are conducted in a style I would define as PPP, although there is a lot of task based instructional work, which is mostly in the form of information gap activities. The students themselves are a lot more used to highly structured, timed, lexical, and grammar-based lessons. Therefore, I adapted the task to make it more timed and structured. Furthermore, this kind of free form thinking in English was very unusual for them as there was no scaffolding in place, apart from the brief example I gave at the start. I got some very interesting English, as students especially in the second round realised that to win, they had to describe but not give away too much information. Even the lowest level students came up with some good descriptions.

The only real issue was a lack of participation. As I mentioned the classes are mixed level so there was a tendency to lean on the strongest English students in each group to complete the task. I tried to remedy this by changing the *leader*, the person who oversaw writing the information at each step to increase participation. This worked with most groups, although the girls outperformed the boys,

and there were more students silently observing than I would have liked.

5.3 Teaching situations suited to TBLT

Based on my own teaching experience with a variety of TBLT techniques I believe that this technique requires a certain set of factors to operate effectively. With the 'What is the Animal' example shown above I highlighted the issue of group participation but by far the most important factor is class size. As Li (1998) observes the larger the class size the more difficult groups become to manage. This observation certainly holds true from my experiences. The other factor is student's need for guidance and structure. As Ellis (2020) suggests if students lack an understanding of why and how tasks can help them develop their proficiency, they will resist performing them. Therefore, the strength of TBLT is that it is best suited to smaller, focused classrooms with students of the same level.

6.0 Conclusion

TBLT is an approach to language teaching that prioritizes meaning but does not neglect form (Ellis, Skehan, Li, Shintani, & Lambert, 2020). Its focus on meaning is at the core of its strength as a syllabus choice. It allows real language to take place as students negotiate meaning with each other to improve their language skills. As an approach however it is not without its flaws. The issues of theoretical principles as Swan (2016) discusses cannot be ignored. TBLT proponents are aware of these criticisms and as Ellis (2020) declares much more research is needed. Classroom size is also a significant factor with TBLT being, I believe, much more suited to smaller focused learning environments.

In conclusion, TBLT is a powerful educational tool but as a singular syllabus design choice other than in a certain number of cases, it is not suitable. In my opinion, it is much better suited as part of a combined syllabus so students can experience the negotiation of meaning for themselves whilst also being given other language tools to help develop lexical and grammatical competence.

References

- Batstone, R.** (1994). *Language Teaching. A Scheme for Teacher's Education. Grammar* (Language Teaching: A Scheme for Teacher Education) (Illustrated ed.). Oxford University Press
- Breen, M.** (1987). *Learner contributions to task design*. In C. Candlin and D. Murphy (eds) *Language Learning Tasks*. Englewood Cliffs NJ: Prentice- Hall.
- Brown, D. H.** (2007). *Teaching by Principles: An Interactive Approach to Language Pedagogy* (3rd ed.). Allyn & Bacon.
- Cowan, N.** (1993). Activation, attention, and short-term memory. *Memory and Cognition* 21, 162–167 <https://doi.org/10.3758/BF03202728>
- Doughty, C.** (2001). 'Cognitive underpinnings of focus on form' in P. Robinson (ed.): *Cognition and Second Language Instruction*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Ellis, N. C. (2005). *At the Interface: Dynamic Interactions of Explicit and Implicit Language Knowledge*. *Studies in Second Language Acquisition*, 27(02), 305–352. <https://doi.org/10.1017/s027226310505014x>
- Ellis, R., Basturkmen, H., & Loewen, S. (2002). *Doing focus-on-form*. *System*, 30(4), 419–432. [https://doi.org/10.1016/s0346-251x\(02\)00047-7](https://doi.org/10.1016/s0346-251x(02)00047-7)
- Ellis, R., Basturkmen, H., & Loewen, S. (2001). *Learner Uptake in Communicative ESL Lessons*. *Language Learning*, 51(2), 281–318. <https://doi.org/10.1111/1467-9922.00156>
- Ellis, R., Skehan, P., Li, S., Shintani, N., & Lambert, C. (2019). *Task-Based Language Teaching: Theory and Practice (Cambridge Applied Linguistics)*. Cambridge University Press.
- Ellis, R. (2005). *Planning and Task Performance in a Second Language*. (Language Learning & Language Teaching). John Benjamins Publishing Company.
- Fotos, S. (2002). *Structure based interactive tasks for the EFL grammar learner*. In Hinkel, E., & Fotos, S. *New Perspectives on Grammar Teaching in Second Language Classrooms* (ESL & Applied Linguistics Professional Series) (eds.). Routledge.
- Hadley, G. (2013). *Task-based Language Teaching from the Teachers' Perspective*. *System*, 41(1), 194–196. <https://doi.org/10.1016/j.system.2013.01.010>
- Hymes, D. (1972). *On communicative competence*. In J.P. pride & J. Holmes (Eds.) *Sociolinguistics* (pp.269-293). Harmondsworth, UK: Penguin.
- Johnson, D. W., & Johnson, R. T. (1998). *Learning Together and Alone: Cooperative, Competitive, and Individualistic Learning (5th Edition)* (5th ed.). Pearson.
- Kohn, A. (1987, October). It's hard to get left out of a pair. *Psychology Today*, pp. 53-57.
- Krashen, S. D. (1982). *Principles and Practice in Second Language Acquisition* (Language Teaching Methodology Series). Alemany Pr.
- Lee, J. F. (1995). *Using Task-Based Activities to Restructure Class Discussions*. *Foreign Language Annals*, 28(3), 437–446. <https://doi.org/10.1111/j.1944-9720.1995.tb00811.x>
- Littlewood, W. (2004). *The task-based approach: some questions and suggestions*. *ELT Journal*, 58(4), 319–326. <https://doi.org/10.1093/elt/58.4.319>
- Li, D. (1998). *'It's Always More Difficult Than You Plan and Imagine': Teachers' Perceived Difficulties in Introducing the Communicative Approach in South Korea*. *TESOL Quarterly*, 32(4), 677–703. <https://doi.org/10.2307/3588000>
- Long, M. H. (1985). *A Role for Instruction in Second Language Acquisition: Task-Based Language Training*. In Hyltenstam, K., & Pienemann, M. (1985). *Modelling and Assessing Second Language Acquisition* (Multilingual Matters) (1st ed.). Multilingual Matters. (pp. 77-101)
- Long, M.H. (1981). *Input, interaction and second language acquisition*. In H. Winitz (Ed.), *Native language and foreign acquisition* (pp. 259-278). *Annals of the New York Academy of Science* 379. New York: Academy of Sciences.
- Long, M. H. (1983). *Native speaker/non-native speaker conversation in the second language classroom*. In M. A. Clarke & J. Handscomb (Eds.), *On TESOL '82: Pacific perspectives on language learning and teaching* (pp. 207-225). Washington, DC: TESOL.

- Long, M. (1996). *The role of the linguistic environment in second language acquisition*. In W. Ritchie & T. Bhatia, *Handbook of second language acquisition*. (pp. 413- 454). San Diego, CA: Academic Press
- Naughton, D. (2006). *Cooperative Strategy Training and Oral Interaction: Enhancing Small Group Communication in the Language Classroom*. *The Modern Language Journal*, 90(2), 169–184. <https://doi.org/10.1111/j.1540-4781.2006.00391.x>
- Nunan, D. (1989). *Designing Tasks for the Communicative Classroom* (Cambridge Language Teaching Library). Cambridge University Press.
- Nunan, D. (1991). *Communicative Tasks and the Language Curriculum*. *TESOL Quarterly*, 25(2), 279–295. <https://doi.org/10.2307/3587464>
- Pienemann, M. (1998). *Language Processing and Second Language Development: Processability theory* (Studies in Bilingualism). John Benjamins Publishing Company.
- Prabhu, N. S. (1987). *Second language pedagogy*. Oxford: Oxford University Press.
- Richards, J. C., & Rodgers, T. S. (2001). *Approaches and Methods in Language Teaching* (Cambridge Language Teaching Library) (2nd ed.). Cambridge University Press.
- Schmidt, R. (2001). 'Attention.' in Robinson, P. (2001). *Cognition and Second Language Instruction* (Cambridge Applied Linguistics) (1st ed.). (pp. 3-32) Cambridge University Press.
- Schmidt, R. and S. Frota. (1986.) 'Developing basic conversational ability in a second language: A case study of an adult learner of Portuguese' in R. R. Day (ed.): *Talking to Learn: Conversation in Second Language Acquisition*. Rowley, MA: Newbury House.
- Schmidt, R. (1990). *The Role of Consciousness in Second Language Learning*. *Applied Linguistics*, 11(2), 129–158. <https://doi.org/10.1093/applin/11.2.129>
- Shrum, J. and Gilsan, E. (2015). *Teacher's Handbook: Contextualized Language Instruction*. Cengage Learning.
- Skehan, P. (1998). *A Cognitive Approach to Language Learning*. Oxford: Oxford University Press.
- Swain, M. (1985). *Communicative competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development*. In Gass, S., Maden, C., & Madden, C. G. (1985). *Input in second language acquisition (Issues in second language research* (pp. 235-253). Newbury House Publishers.
- Swain, M. (1995). *Three functions of output in second language learning*. In Cook, G., & Seidlhofer, B. (1995). *Principle and Practice in Applied Linguistics: Studies in Honour of H. G. Widdowson* (pp.124-144). Oxford University Press.
- Swain, M. (2000). *The output hypothesis and beyond; mediating acquisition through collaborative dialogue*. In Lantolf, J. P. (2000). *Sociocultural Theory and Second Language Learning* (pp. 97-114) Oxford University Press.
- Swan, M. (2005). Legislation by Hypothesis: The Case of Task-Based Instruction. *Applied Linguistics*, 26(3), 376–401. <https://doi.org/10.1093/applin/ami013>
- Task definition and meaning** | Collins English Dictionary. (2020, November 28). Collins Dictionaries. <https://www.collinsdictionary.com/dictionary/english/task>

- Van Avarmaet, P. and S. Gysen (2006) *'From needs to tasks: language learning needs in a task-based approach'* in Van den Branden, K. (ed) *Task-Based Language Education: from theory to practice*. Cambridge: Cambridge University Press, (pp.17-46.)
- White, R. (1998). *The ELT Curriculum: Design, Innovation and Management* (1st ed.). Wiley-Blackwell.
- Willis, D., & Willis, J. (2007). *Doing Task-Based Teaching (Oxford Handbooks for Language Teachers Series)*. Oxford University Press.
- Willis, D., & Willis, J. (1996). *Challenge and change in language teaching*. Oxford Heinman

8000 Miles in Search of Another Opportunity:

Road Trip Across the United States

Jun Harada

Setting Out

With my hands tense on the wheel, I slowly pulled out of 159th street onto Broadway. It was a muggy summer day in 2000. In this rough neighborhood in New York, I was the only driver abiding by the speed limit. I was carefully manipulating the car by the book, taking the rightmost lane and pumping on the brake pedal well ahead of time at every traffic signal. I knew a driver of my sort would be a source of frustration for other motorists. I was honked at from behind many times, but I was determined to drive at my own pace.

I was breathing hard to soothe my nerves in the traffic jam in the Lincoln Tunnel, fighting with the fear of getting on the highway ahead. I was tormented by a nightmarish memory from six years before. I felt like abandoning the car on the road and taking the bus back to my old apartment.

I have been a lousy driver since the first time I touched a steering wheel. When I was attending driving school, I was the slowest learner. It took me 15 extra hours before the instructor grudgingly let me finish the course. Whenever I am behind the wheel, I upset fellow motorists on the road for one reason or another. I also have trouble reversing the car into a parking space. There is always a gap of a few feet between my perception and reality. I make it a rule to rely on public transportation whenever it is available.

However, there was a time I had no choice but to drive. It was in 1994 when I worked in a little town in Texas, where driving was the only means of transportation. It was in the middle of the Wild West, surrounded by 360 degrees of horizons. The only objects on the land were oil pumps here and there like black donkeys foraging on the ground rhythmically. For the first time in my life, I found it easy to drive. I could just go straight forever on this flat land. Driving 60 miles an hour, I was totally alone on this prairie, mesmerized by a feeling that I was a tycoon running the entire oil field.

Then, there appeared a tiny black speck far ahead on the horizon. As I drove along, it grew bigger and clearer. It was a gigantic petroleum tank truck coming my way. As I was getting closer, I saw a bearded face of the big driver with dark sunglasses. I felt a little intimidated by the roaring sound and black smoke coming out of the truck. I tried to steer right to stay away. The road was covered with dry dirt and I could not tell where the paved part ended and where the rough surface on the roadside began. When I went too far right, both of the right-side tires went on the sandy part and suddenly made a zzzzzz sound below. It was then that I lost control of the car. It was like the force of gravity splitting into many different directions. With all of the objects on the seats flying everywhere, the car

started spinning. With a loud *gagaga* sound and white dust rising around, the car swung 150 degrees left and then 130 degrees right, just like a dirty sock in the washing machine. As I was desperately clutching onto the wheel for my life, the car finally came to a stop after driving onto the elevated edge of the cattle ranch beside the road. Thank goodness, the car didn't turn upside down and I stayed in one piece. When I stepped out of the car, the bearded redneck driver was long gone and he was again a tiny speck in the other direction. It took me some time of breathing before I overcame the shock. The occasional passing of huge trucks zipping by with a loud noise gave me a shiver.

Now I came through the Lincoln Tunnel and stopped at the last red light before the highway entrance. I saw all of the vehicles flying like bullets on Interstate 95. The light turned green and there was no going back. I put all my weight on the accelerator to go up the slope to the highway and dove into the fast flow of the traffic for the first time in six years.

The next moment, I found myself surrounded by all sorts of racing vehicles heading south at over 70 miles an hour. There was a huge trailer fuming black smoke ahead in the next lane, which reminded me of the scene in Texas. I tried to stay away but there was an SUV right behind honking at me. No choice. I sped up. As I was going past the side of the trailer, its shadow seemed to be towering over and about to crush me. I felt my heart beating faster and could not help closing my eyes. Driving through the shadow felt like an eternity. When I finally got out of it, I found the steering wheel wet from my sweat. Seeing the trailer in the rearview mirror, however, I felt a little braver.

Now I felt like part of the traffic and could afford to look at the view outside the windows. I saw the skyscrapers in Manhattan getting smaller. I became a little emotional with some sweet memories from the last three years. Yet, I had to move on. I had already made a decision to give up the Big Apple to seek another opportunity. I stepped on the accelerator and changed lanes to overtake some other vehicles.

Board of Education

The reason I set out on this trip was the frustration with my employer, the New York Board of Education (NYBOE), the most irrational organization in the world. When I was looking for a teaching job after getting my master's in May 1999, I had to go through a lot of red tape. In order to be on the list of job candidates, we all had to be fingerprinted and pay an \$80 processing fee. Then we were all instructed to sign a document stating that we were free of criminal records of child abuse and molestation. Even worse, we were required to report to someone called a 'notary public' and pay him another \$50 to have our signature validated.

Though I found it ridiculous, I agreed to pay all these fees as the price to prove my integrity. After all, all other candidates had to accept the same treatment. What really irked me was the extra nonsense the NYBOE inflicted on me. They questioned my bachelor's degree I earned in Japan and told me that I needed to attend another four-year program to get one. I said having my master's automatically proved that I held my bachelor's, but they insisted a foreign degree was not always

trustworthy. I claimed my degree was endowed by a university run by the Japanese government and Japan had been America's best friend ever since Ronald Reagan was the president in the 80's. But the officials demanded that I have my degree validated by a special agent hired by the Board and that I pay another \$100. I had lost a few hundred dollars even before getting a job and starting to earn money.

After going through a lot of hard times, I finally got an offer to teach Japanese to American kids at one of the most prestigious schools. Teaching Japanese should be an ideal job. However, this golden opportunity was denied by the BOE for the strangest reason. They said I had not earned enough credits to teach the subject and told me to study Japanese before teaching it. I was probably the first Japanese person in history who was told to study Japanese by Americans who did not know a word of it.

For the next few months, I traveled all across New York City visiting every school district office for a job to teach English. I was still jobless even after the new school year started in September. After these four miserable months, I finally got a position to teach English as a second language (ESL) from October. The school that hired me was the least favorite of the teachers. It was a big school located in the middle of the Bronx with a dense Hispanic population. The whole neighborhood was full of dilapidated buildings and the school was infested with a sense of disorder. There were even metal detectors at the main entrance and a bunch of police officers in the hallways. The dropout rate was one of the highest in the city and many teachers wanted to quit after a few weeks. This was why I was hired as a substitute teacher. It would have been almost impossible for a Japanese person to teach ESL elsewhere in America.

Of course, teaching at this school was not easy. I had to go through a lot of trouble with kids who wanted to take advantage of my inexperience. Yet, as time went by, I somehow learned to deal with the disorder in the classroom. The Bronx and its Hispanic kids grew on me.

When my contract with the Board was about to expire in June 2000, I hoped to stay at the school for another year. In order to extend my work permit, I needed my employer to sign a resident document. Again, the NYBOE turned out to be the least helpful. They just did not like to get involved with extra work for my visa. They said this and that to persuade me to go back to Japan. I insisted that I was one of the few teachers willing to work at the chaotic school in the Bronx, but they said there were a bunch of American citizens who liked to teach and a Japanese man who spoke English with a funny accent was the least wanted.

How much longer would I have to put up with this nonsense? Although I found some kids lovely and I liked my coworkers, it was unbearable to have my self-esteem destroyed by these jerks. This was enough. I decided to move on to seek a new opportunity somewhere else in the US. I was determined to do whatever I could do to stay in the country. I knew it would be extremely difficult to find another job, considering the hardship I went through before getting the job a year before, but I was not ready to give up. When I told my friends in New York about my pipedream, they all encouraged me. They even held a farewell party for me, calling me a real fighter and wishing me luck.

This was what got me behind the wheel that I had been scared away from since the nightmare

in Texas. I decided to drive around the country looking for a job. I had two more months in the US before my visa expired. I figured the money in my Chase Bank account would be enough to tide me over through the two-month road journey. It was in early July when I made a deal with Avis in New York to rent out a car. I arranged to head west and return the car in San Diego, California, the city located diagonally in the opposite corner of the country. I was planning to drop my resume along the way wherever there was a prospect of a teaching position. I would keep up this endeavor until the very last day my visa allowed me.

I knew this was a crazy plan. My English accent was too distinct to be a teacher in the States, and finding an employer willing to help me with my visa was like finding the Genie in the Magic Lamp. Nevertheless, I was in the country of opportunities and I believed in miracles. Who could have imagined I could be a teacher in New York when I first came in 1997?

Job Search on the Road

It was already past 9 am when I woke up at a B&B in Pittsburg, Pennsylvania, my first stop. I was still overcoming the fatigue from the day before. I had slept half a day straight after driving 500 miles from New York.

The whole drive was strenuous. I already felt exhausted after lunch and dropped to sleep at the food court table. When the sun was getting lower in the late afternoon, I was constantly bothered by its strong light blinding me through the windshield. The real problem came after the sun went down. There were no streetlamps on the highway and the taillights in front were the only lights that I could follow. They told me which direction to go but there was no way of knowing how much space there was in front of my bumper. I was always afraid of bumping into the car in front at any moment.

When I drove into the city, I had a splitting headache from 11 hours of nerve-wrecking driving. I could throw up any minute. The last ten miles were the worst. I had to stop at every corner to read a signpost to find out where I was. When I finally reached the lodge, I slumped on the bed.

While having oatmeal for breakfast, I was looking up the local yellow pages for addresses of all the school district offices in Pittsburg. Then I studied a map and marked all the locations. I figured I needed a couple of days to visit all of them. This is how I started every morning on this trip: oatmeal, the yellow pages, and a map. It was long before WIFI and smartphones.

Trying to find a job in an unfamiliar place was not easy. My job search in town ended when I heard from an officer that they did not have an ESL or Japanese program. On the other hand, a major city like Pittsburg surely had opportunities, but there was hardly anyone handling personnel matters for the whole city and I had no idea who to contact. I was sent from one department to another. I was even sent to a local university for a state teaching certificate. It was often dozens of district offices or school principals that were recruiting teachers and I needed to visit them one by one to see if there was any opening. I stuck with the same city until I could rule out all the possibilities. Whether or not there was a prospect, I always left my resume so that they could contact me on my cellphone in case there was any job opening coming up.

In order to keep traveling for two months, I had to be on a tight budget. I lived on Seven Eleven sandwiches or greasy Chinese food. I mostly slept on a bunkbed in a dormitory room at a youth hostel. On weekends when district offices were closed, I went into a national park and slept in my car. Occasionally, I slept on a real bed in a cheap motel. At a fleabag about halfway through this journey, I had my room broken into and got my laptop stolen. From then on, I had to rely on a local library for internet use.

Although I spent most of the time alone in my car, I had some fun times at night with fellow travelers I met at a youth hostel. Sometimes I offered them a ride and we traveled together for a few days. This was another way to save money, sharing a motel room and gas. Having lived in the States for three years, I had some friends on the way who were kind enough to put me up in their houses. They all gave me moral support in chasing my dream.

National Pastime

While I spent the daytime at school district offices, I spent most nights at ballparks in many towns. There were dozens of minor league teams along the way. A little stadium in the outskirts of a small town was packed with excitement, which kept me going in the uphill battle of the job search throughout this journey.

A lit-up field at night appears just like a small green island in the middle of the dark ocean. The total attendance is just a few hundred or even smaller. It is great to hear the dry and pleasant sound of a bat hitting the ball echoed through the quiet night.

Ballparks are also a window into a local community. It is fun to strike up a conversation with friendly fans in the stands. Most of them do not seem to take games so seriously. They are often busy talking and drinking. Many of them just come to the game for a family picnic. To them, baseball is just a means to socialize. There are often some silly events between innings when some fans are allowed to come down to the field to take part. Everyone gets a good laugh when a dad and an uncle spin ten times around the plate and race staggeringly in dizziness to first base.

Some clubs make an extra effort to entertain their fans. A team mascot comes out in the field between innings to throw free t-shirts to fans in the stands. Everyone, including little kids and their grandpas, or a barber and a local business tycoon, stands up and stretches their arms to catch one. The funny mascot keeps entertaining spectators everywhere in the stadium. Sometimes he stays on the ground even after an inning starts and stands in the first base coach's box. The whole crowd gets a big laugh when he makes mischief to distract the lefthanded pitcher on the opposing team every time he is about to pitch. Now the whole stadium turns into a comedy theater. It is no wonder baseball is called America's national pastime.

No matter how small and minor their clubs may be, the players are just as passionate about baseball. Their fastball was almost a hundred miles an hour and their homerun flies far into the night sky over the fence 400 feet away. While they travel from stadium to stadium by bus and eat at Wendy's at a meal stop, they all dream to be part of the big leagues. Some old major leaguers who

refuse to retire after being dumped, spent the rest of their careers on a minor league team. They just do not want to give up baseball and are determined to keep playing as long as they can throw a ball. They overcome their pride and play with unknown young players. Their passion for baseball was a source of inspiration for me. At least I felt assured I was not alone in pursuing a dream.

In the Middle of Cornfields

While moving from one BOE to another, or one ballpark to another, I had driven a thousand miles to the Great Plains, a vast flat region in the middle of the continent. There are not many foreign tourists venturing into this part of the country. There is not much industry that attracts business from overseas, either.

Nevertheless, I felt privileged to drive through this area. The landscape was flat as far as the eye could see, offering amazing views. I felt carefree to drive on the straight road stretching from horizon to horizon through endless corn fields. It was muggy in midsummer, but the winds coming through the car windows felt cool. I turned up the volume of the stereo while singing along in a loud voice. I enjoyed the noble isolation in this huge land.

The people living in the middle of the corn fields have little contact outside of their own communities. They rarely step out of their villages. Many of them tend to be conservative and they seem to believe the Bible is the only window to the world outside. Some of them even refuse to believe Charles Darwin's theory of evolution.

Traveling in many parts of the world, I have met people with various religious backgrounds. I do not mean to ridicule any of them.. The best way for these people to coexist is to respect each other and not intrude upon other territories. Religion is such a sensitive realm that the cardinal rule I learned in cosmopolitan New York is to avoid talking about it.

The question, however, is what I should do when others bring up the subject. This was what sometimes happened on this journey, especially in a conservative village where a Japanese person looked as foreign as an extraterrestrial. "Have you read the Bible?" This was the first question they often asked. They were eager to 'enlighten the uncivilized'.

I have my own faith in God. I am a Christian in a sense that I give and receive Christmas gifts like everybody else. I even know how to say Hail Mary in Japanese. But my grandparents' funerals were conducted in Buddhist styles and I sat through sutras read by monks. As a young boy, I was taught the deceased become a Buddha and gain an eternal life in heaven. I habitually visit a Shinto shrine every New Year to hope for good luck. I believe that God, whatever He is, exists, but He is far from almighty. If He were, there would be no evil, no war or no poverty. So, I am inclined to believe having two or three Gods is better, just as two minds are better than one. When God A is tired and useless, I can always turn to God B.

The evangelical Christians, however, found it outrageous to believe in more than one God. As soon as they found out I was a pagan, they would launch a campaign to brainwash me. They would drag me into endless Bible talk, saying Jesus was this and Jesus was that. They pushed a copy of the

Bible into my hands and insisted that I come to church next weekend. I kept receiving copies of the Bible from these pushy folks. It is no surprise the Bible is the world's bestselling book. Somebody who does not even open a page had four copies in his suitcase. I sneaked out of town on Sunday morning before the church service started.

Legacies from the Civil Rights Movement

The South is known for the civil rights movement in the mid-20th century. In my classroom in the Bronx, I often used a story of how African Americans fought against injustice. My Hispanic students seemed to like it. These were rare occasions where I succeeded in getting them to listen. They probably sympathized with those minorities half a century before. I felt I was in the same boat, especially with the NYBOE.

I had some chances to visit such historic sites in the South. One of them was the National Civil Rights Museum in Memphis, Tennessee. It was refurbished out of an old motel where Martin Luther King was assassinated. Besides detailed exhibits regarding Reverend King's achievements, the exhibition was full of stories how Jim Crow prevailed in the South. I was glued to pictures of a poor black man lynched to death, non-violent marchers fire-hosed or charged upon by a brutal police dog, freedom riders on a bus harshly beaten up by a redneck mob in a southern state, or sit-in activists ketchupped and mayonnaised at a white-only eatery. I ended up spending half a day in this museum. Going through all these displays, I felt more determined to fight for a teaching position. After all, the frustration I had experienced in New York paled in comparison with all these injustices.

I was even more thrilled when I saw a real historic spot of a famous incident. It was Central High School in Little Rock, Arkansas. It was a very prestigious school that accepted only white students until the mid-50's. Then it was forced to admit black students after the Supreme Court's ruling that school segregation was unconstitutional. Nine black teenagers were chosen to be enrolled and they were supposed to make history. However, when they came to the school gate on the first day, they were blocked by a white mob who cried out for the continuation of segregation. Now, Arkansas's top high school turned into a stage of a heated crash between segregationists and integrationists. With media reporting live on what was going on at the school gate, the quiet state capital became the center of national and international attention.

The nine students kept coming to school but got chased away by the mob for days, until the president then, Dwight Eisenhower, made an unprecedented decision. He ordered the national guard to clear the mob and escort the nine into the school building. This was a big turning point in history. Many history textbooks in America carry a picture of the Little Rock Nine walking up the steps into the majestic building while protected by soldiers with guns standing in line. There have been some movies depicting this story. (If only I had had a state trooper driving away all the jerks at the NYBOE and escorting me to the teacher's room in a high school.)

It was in the middle of summer holiday and already late in the afternoon when I arrived. It was incredibly quiet with few people nearby. Yet the majestic building standing with dignity was eloquent

enough to tell the history full of passion and sacrifice it had witnessed. It was so inspirational to imagine what conflicts and struggles this country had gone through.

Totally Alone

I love Texas for its friendly people and the vast land since I lived there in 1994. I also expected that it would be full of teaching opportunities with its high populations of Hispanics and Asians. The size of the state was nearly twice as large as Japan and I spent weeks covering its entire land from corner to corner. This really made me tired and I needed a break. A friend of mine suggested that Big Bend National Park near the Mexican border would be a nice retreat. It was one of the largest parks, larger than Tokyo, and known for its rich wildlife. It took nearly a two-hour drive from the closest village, beyond which there was no cellphone reception, which made Big Bend the least accessible park in the country.

Tourists visiting the hottest place in Texas in midsummer were few and far between. In fact, I was totally alone in the campsite. I felt a little scared of wildlife such as mountain lions and coyotes. I kept the door shut and locked when I slept in the car. When I had a little trouble sleeping in the heat, I timidly stuck my head out the window. I was amazed by the entire night sky with twinkling stars all over. Yet, the complete silence of the windless night scared me. I could hardly wait for the break of dawn.

Despite this wilderness in the desert, the roads in the park were well paved. It was a pleasant drive through cacti and bushes under the blue sky. I followed a park map and found a nice hot spring by the Rio Grande, a murky river separating the US and Mexico. As I put my hand in the water, the temperature was just right. While most Americans were not familiar with dipping in a natural hot spring, I could not resist. I took advantage of being alone and monopolized the great nature. The gray rocky cliffs rising into the deep blue sky looked spectacular. Looking at the white clouds drifting over the edge of the cliffs made me a little drowsy. It was a lot cozier than in my car and I could catch up on some sleep in the hot water.

The Mexican land across the river kept tantalizing me. It was just a stone's throw away and the flow of the river seemed calm. I would have swum across the border if I had not been told there were alligators in the muddy water.

A park ranger told me there was a secret spot where I could cross the border by boat. Since I had never stepped outside the United States for the last three years, I grabbed this opportunity. I drove along the river and found the sign the ranger had told me about. There were no cars parked other than mine. Sitting on the bank was a boatman with a sleepy face in a dirty shirt. Amazingly there was nothing that seemed like passport control. As I gave him ten dollars, he put the long oar into the water and slowly rowed away without saying a word. It only took a few minutes to cross the river to the opposite bank. It was equally quiet on the other side.

There was a little open space by the river with a thatched hut in the middle. A girl sitting inside smiled and beckoned as she saw me get out of the boat. As I took a seat under the roof, she showed

me what looked like a menu. She brought me a cup of coffee after she received four US dollars. We managed to communicate as she could say 'Yes' and 'No' to my questions. Here is the limited information I gathered out of this conversation. She lived in a village about ten miles away and commuted to this hut every day on a dirt road. She earned a little money by serving snacks and drinks to tourists like me. It was impossible for them to come to her village because they were not supposed to step out of this boat area, probably due to border restrictions. There were police along the way, and I would get into trouble if I did anything dubious. Finishing the coffee, I caught the same boatman and headed back. My first visit to Mexico, with merely a few steps into the territory, a 30-minute stay and meeting one resident, was quite an adventure.

When I was trying to figure the way out of Big Bend, a little mark on the map caught my attention. There seemed to be a ghost town a little past the park gate. According to a park ranger, there was not a single resident living there but there remained some buildings. He also warned me not to trespass into any estates because they were legally private properties.

There were not any landmarks and I had to carefully follow the map as I drove. I got off the main road onto a narrow dirt path. All I could hear was the rustle of bushes and chirping of birds. The road was bumpy and covered with grass and there was no telling when it was last trod upon.

Then I came across a dilapidated wooden landpost whose sign was worn out and illegible, but it clearly told that there once was life in this area. Beyond the post appeared a series of old abandoned buildings. They were mostly built of bricks and had tin roofs. Some of them were residential and others looked like offices or commercial facilities. The whole area looked soulless. This was a real ghost town not preserved for the sake of tourists. Everything was totally rundown and rusty, a real witness to time. Most buildings were just hidden behind thickets. I pulled over right in front of what looked like an old residence with white walls and a red roof. I stood on my toes to look over the hedge to barely see an old rocking chair by the porch. There was also a little rusty swing in the weedy front yard. It was then when a strong wind pushed the swing a little. What a creepy squeak it made! Frightened, I went back into the car and left the spot in a hurry.

New Mexico

When I crossed the border into the State of New Mexico, I knew it would be more desolate than Texas. The road surface suddenly turned rough, reflecting poor maintenance by the state. As I drove on, the grassy cattle ranches were being replaced by red dirt and rocky surfaces. The whole area was so dry that it looked like a moon surface. I stopped the car on the roadside and stepped out to see what it was like to be standing in the middle of this wilderness. Apart from the paved road, there were no signs of humanity. There were merely black specks of hawks gliding in the cloudless sky over the bare mountains. The gust of wind felt like a ghostly message. My car was the only shelter from death. I blasted the stereo to make sure I was still part of civilization.

The first stop, White Sands National Monument, was of stunning beauty. It was a vast area made of a group of white dunes. The sand was pure white, composed of gypsum crystals coming down

from surrounding mountains. This was the first place I saw other tourists since I had crossed the state border. They were running around barefoot or sleighing down on the sand. I had never seen a sky bluer than this and it made a stark contrast with the white sand under the radiating sun. It was so bright that I could hardly open my eyes.

White Sands offered another wonder at night with millions of twinkling stars. There was nothing to block visibility--no cloud, no urban lights. The shining pieces of dust spread all over the entire sky not only above but also horizontally in every direction. At the very center of the hemispheric universe, winds sounded like a message from galaxies far away. It is no surprise there are so many UFO sighting reports in New Mexico.

The town of Truth or Consequences was like an oasis in the desert. It was named after a radio show in the 50's and was known for its natural hot springs. There was a hostel with a hot spring in the yard. It was an outdoor natural bath where people had a dip with bathing suits on. My skin felt so good in the lukewarm water that smelled full of minerals. I felt like I was back in Japan.

The state capital, Santa Fe, was just a small town with a population of just about 60,000. It was one of the prettiest towns in the US with a unique history. First, it was a village of Pueblo Indians living in houses made of red bricks. In the 16th century, came the Spanish settlers. They worked hand in hand with Native Americans at first and built the second oldest town in North America in the early 17th century. Unfortunately, some conflicts broke out between the two peoples and the town began to decline. However, there remain many colonial buildings and Native American traditional crafts, which makes Santa Fe very colorful.

It was also fun to hang out with hippies I met at the hostel. I was strongly attracted to Santa Fe and aspired to teach there. I passionately pleaded to the city's BOE and the state's education department. After getting a promise from an officer that they would contact me if there was any opportunity for me, I left the town.

Grand Canyon and Freaky Woman

I was thrilled when I found a road sign that read 'Historic Route 66.' It was built in the early 20th century as the first road to go across the country all the way to the West Coast. It was the road a bunch of pioneers traveled on pursuing their dreams. It was mainly thanks to this road that the West Coast saw the great progress and it was called the Mother Road. Although in the 70's most parts of it were turned into interstate highways to deal with the increasing traffic, some segments of the old road remained. They stretch through a large desert with some ups and downs over hills, going straight all the way. The Wild West depicted in John Steinbeck's stories has stayed intact for almost a century.

There were hardly any other vehicles on the road. An encounter with another motorist happened only once or twice an hour. Occasionally, I came across pretty towns along the way with old-fashioned restaurants and rusty gas stations. They were like scenes from movies in the 50's and 60's.

These towns once thrived in the mid-20th century but saw rapid declines since the role of Route

66 as the Main Street of America was taken over by modern Interstate 40. The people left one after another but some remained. They made a special effort to preserve the towns. The buildings still kept the original façades. Driving along Historic Route 66 felt like a time trip. Now I came to Flagstaff, Arizona, the base town for the Grand Canyon.

The Grand Canyon went beyond my expectations. Nowhere else in the world could we grasp the age and the size of the Earth more clearly. It has gone through millions of years of geological formation. It started with land elevation that took place 70 million years ago. Then the Colorado River beneath has eroded the hard rock inch by inch every year to form this humongous canyon. Now it is 1500 meters deep, 300 miles long, and 4 to 20 miles wide to the other rim. What is more amazing is the flat and endless plateaus on both sides of the canyon, which can dwarf the gigantic valley. What appears to be an enormous gap on the land is a mere scratch made in the North American Continent.

The view is most breathtaking at sunrise. The moment the edge of the sun appears on the other side of the canyon, its light spreads over the plateaus. It is the moment the dark red rocks in the canyon glare bright, reflecting the strong rays of the sun. It is no wonder that early pioneers expected to find gold mines in the canyon.

At the youth hostel in Flagstaff, I met a strange American woman who was traveling by bus. We happened to be at the same breakfast table and exchanged a conversation. She was already in her middle age and not my type. She said she needed a ride to the Canyon so I offered one out of courtesy because it was 60 miles away and was impossible to access without a car. Little did I imagine this goodwill of mine would spoil the beautiful memories of the Grand Canyon.

On the way, she droned on about how she had broken up with her boyfriend and how she had quit her job, telling me how tragic her life was. When we reached the South Rim and looked down into the deep gorge with some clouds floating over the Colorado River, she brightened up for the first time. I thought I did something nice in a philanthropic sense. However, I was dismayed when she suggested we stay in a motel closer to the Canyon and come back the next day.

We found a room about 30 miles away. We took turns to take a shower, but I did not even touch her body. I suspected there was something dangerous about this woman. When I slept, I put all my money and car key under my pillow.

The next day we woke up before dawn and went back to the Canyon for the sunrise. There were already a bunch of tourists waiting for the moment of wonder. They all exclaimed to see the first morning light appear on the edge of the other rim. As the sunlight spread over the area, I was so excited that I was not aware what was going on in the woman's face.

When we had breakfast at a nearby restaurant, she was busy writing a letter on the table. To break the awkward moment of silence, I asked who she was writing to. I was taken aback when I saw her face full of hostility as she looked up. She sighed deeply and said, "Why do you ask me such a stupid question?" Actually, I did not care who it was she was writing to. I just asked for the sake of conversation at the breakfast table, but my reply made her angrier. She did not say a word all the way back to the motel. It was the most uncomfortable ride.

When I got out of the shower, I saw her packing her stuff, saying she wanted to leave now.

"Where are you going?" I asked.

"I don't know," she said without looking up.

"Can't you wait? I got up too early and I want to catch up on some sleep before I can give you a ride to the Greyhound Depot in Flagstaff."

Then she blurted out all of sudden, "No, I don't need a ride. I will hitchhike. I hate you for bothering me with stupid questions. You're the nosiest man." With this said, she stormed out the door with her bag.

The motel stood in the middle of nowhere in the desert. There was nothing around but a single road connecting the South Rim and Flagstaff, where cars only went by every ten minutes. I said to her through the window very politely she should think twice about hitchhiking. She told me to go back to sleep and called me an asshole.

Through the Dark Night

I needed something to cheer me up after this freaky experience. I thought Las Vegas, Nevada, would be a nice destination. The State of Nevada is larger than Honshu and Kyushu put together, but there are only two million people living there. Most of the residents are concentrated around the Las Vegas area, which makes the rest of Nevada very deserted.

Surprisingly, this area has no rivers connected to the sea. All rainwater either evaporates under the scorching sun or goes underground, which makes Nevada ecologically unique. There are high chances of encounters with coyotes, panthers or rattlesnakes.

It was as if I had travelled back to the Stone Age. Things got spookier as I drove toward the twilight over bare mountains, which reminded me of the scene depicted in 'Hotel California' by the Eagles. Soon I was surrounded by total darkness. All I could see through the windshield was a limited part of the road lit up by the front lights. Occasionally, there were what looked like little rodents running across the road, surprised by the glare of the headlights.

After driving through the darkness for a few hours, there appeared shimmering lights on the horizon. As I came closer, it formed shapes of tall buildings rising up high towards the dark sky. It was the City of Las Vegas. How glad I was to be back to the modern world.

Las Vegas, known for its gambling facilities, is, in fact, chosen to be Americans' favorite place to live. Hotels and casinos in town hire a great number of security guards, which makes it the safest city. Plus, the residents are happy with the low tax rates as the city is largely financed by casino revenues. Even a tourist on a shoestring budget can take advantage of its economy. Many hotels set low rates for accommodations to entice gamblers. I could sleep in a comfy room and eat fancy meals on a little budget. I felt revitalized gulping down lots of steak and fish at a buffet lunch after living on cheap sandwiches for days. I stayed in town until I got an officer to say they would contact me for a future job opportunity.

Death Valley, located between Nevada and California, was named after the historical tragedy that a group of 49ers strayed into the heart of the desert and lost their lives. It is a deep valley surrounded

by mountains in every direction with its lowest spot over 120 meters below the sea level. Its dry weather and sandy ground keep this area from becoming a lake. In summer, the heat is trapped in the valley and the temperature once hit 54°C .

It was already dark when I drove through the park gate. I still had to go 30 miles further to the camp ground. After showing the ticket to the gatekeeper, I saw no one for the next hour. I carefully followed the park road that was only lit up in the headlights. If the car got stuck in the roadside, there would be no way to call for help. I had lost cellphone reception ever since I left Las Vegas in the morning.

I did not even divert my eyes off the centerline to make sure I stayed on the road. So, I had no idea what had happened when the car suddenly made a loud splash sound. The next thing I knew, my car was submerged in water and the water level was as high as my eyes outside the windshield. The nightmare of the car spinning in Texas came back. It seemed I had driven into a river or a lake.

I quickly thought what to do. There were three choices. One was to stay where I was. It did not seem to be a good choice because the water could seep in through the doors sooner or later. The second was to go backward. I looked back and there was only darkness through the rear window. This may be the smartest move in retrospect but I was too scared to move the car in a direction where there was no telling what there was. The third was to move forward and this was what I did. At least I could see a few meters ahead thanks to the headlights. Of course, I could go deeper and totally get submerged, but in that case, I could always open the door or climb out the window and swim back to the shore. At least, the water looked stagnant.

I stepped on the accelerator really hard. As the car moved through the water, it made a loud sound of the engine fighting the resistance. After hearing what sounded like the car's rage, I found myself back on dry land again. It seemed that a little drizzle in the afternoon had flowed into the deepest spot in the valley and made a flood on the road. It turned out the swamp was just the size of a swimming pool, but it gave me a real Death Valley experience.

Finally the West Coast

After driving over the Sierra Nevada through the deep forests of redwood trees rising up over 100 meters, I finally came down to the Pacific Coast. When I drove down the long slope and saw the blue waves of the ocean crashing into tetrapods in the glaring sun light, I knew I got out of the wildest part of the journey. I also knew my days in the country were numbered unless I found a teaching position in California.

Driving on the West Coast offered totally different experiences. When I drove into downtown San Francisco, I felt a little claustrophobic in the heavy traffic with constant honking on the streets. There were hardly any parking spaces downtown. The winding roads through all gorgeous mansions in Beverly Hills seemed out of this world.

While I felt like a fish out of water in most parts of California, the only place I felt at home was school campuses. There were always large green lawns and quiet libraries with large collections

of books. These campuses were different from what I knew from New York, where thousands of students were packed in a block surrounded by busy streets. I dreamed of coming back as a student sometime in the future.

Then I came down to San Diego, my final destination. I had only three more days to spend before I caught a flight back home. There was good public transportation to move around. It was time to return the car. The odometer indicated I had driven over 8,000 miles.

San Diego was another cosmopolitan city sharing a border with Mexico, which I decided to venture into before flying back to Japan. There was a tram service to the border. Many people were standing in line at the passport control, but crossing the border was relatively easy. They just let me go through after taking a little glimpse at my passport.

Beyond the Mexican gate spread the hustling and bustling city of Tijuana. Come to think of it, this was the first time on this journey to walk around to see things on my feet. I felt safe and comfortable. The street signs were all bilingual with Spanish first and English second. Most people on the street understood English and took US dollars along with Mexican pesos. I went into a Mexican restaurant and had a dish of fajitas. It was the last splurge on this trip.

I went back to the States after spending a half day. It took much longer to get back into the States as the passport control was tighter on this side. Now I had to pack my stuff for the flight back home.

Time to Go Home

During the entire two months, I did my best looking for a teaching position. Every town where I stopped, I looked up the yellow pages to locate the local BOE offices. They were much smaller than New York's. Some of them were like the size of a convenience store with a few staff members. Getting to meet someone was not as stressful. I did not have to show my ID and go through a metal detector to get into the building. I could just walk in as if I came shopping for groceries. I was not pushed around by mean security guards or put through a long wait in a dark corridor, either. The officers I met on this journey treated me with some respect. Some of them showed some interest in my stories and encouraged me.

I especially worked hard after getting into California where there were high international populations of Hispanics and Asians. While there seemed to be a big demand for ESL teachers, I could not get to the point of getting a job. After all, it was already in September when I got to California and there seemed to be no opening for someone who was supposed to leave the country soon. There was no miracle after this two-month saga.

It was early in the morning when I checked in at the American Airlines counter at San Diego Airport. My attempt to find a job turned out to be futile, but I did everything I could and I had no regrets. Besides, the whole experiences with baseball, national parks and the Wild West gave me a good reason to come back. Now I knew I could survive an 8,000-mile drive. I was glad I could complete my sojourn in the States with the most memorable journey.

As the flight took off, the view of the country where I had spent three years spread below. As the flight turned northward, the eastern edge of the flat land below elevated and made a wide slope. There in the middle was the long straight road I had traveled along, radiating in the morning glare over the Sierra Nevada. Another day had just begun.

－ 執 筆 者 紹 介 －

則 竹 雄 一 …………… 社 会 科 教 諭
柳 本 博 …………… 国 語 科 教 諭
原 田 淳 …………… 英 語 科 教 諭
青 木 輝 憲 …………… 英 語 科 講 師
Samuel Lilley …………… 英 語 科 講 師

紀 要 委 員

藤 崎 央 嗣 原 田 淳
高 畑 義 憲

研究紀要 第35号

令和3年3月10日 発行
発行者 東京都文京区関口3丁目8番1号
獨協中学・高等学校 紀要委員会
印刷所 東京都北区王子本町2丁目5番4号
株式会社 王 文 社